ISSN 2758-5808

Journal of Civic Engagement Research

シビックエンゲージメント研究

第４号

CIVIC ENGAGEMENT CENTER
AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター

■ シビックエンゲージメント研究　第 4 号　目次 ■

刊行によせて

センター長挨拶　センターの歩みと軸を確認しつつ新たな時代の市民協働へ …… 5
副センター長挨拶　『シビックエンゲージメント研究』第 4 号の刊行に寄せて …… 6
青山学院大学シビックエンゲージメントセンターについて …… 7
コーディネーター挨拶 …… 8
学生スタッフ …… 9

Ⅰ　研究論文・実践報告

実践報告

社会人 MBA 課程における「シビック・エンゲージメント・プロジェクト」実践報告
　―神山まるごと高専への「本の架け橋プロジェクト」―（伊藤雄太郎）…… 13
キャリア理解を促す教育系カードゲームの実践研究
　―遊びを通じた探索的学習と事業化の可能性―
　（塩田航大・岸本真愛美・熊本あい・立川雅一・中野遍理）…… 25
市民協働プロジェクト「藤野プロジェクト」実践報告
　―立ち上げから定着までの軌跡―（三神憲一）…… 39

Ⅱ　シビックエンゲージメントセンター活動報告

≪ボランティア・シビックエンゲージメントプログラム≫

笹塚プロジェクト …… 51
笹塚小学校「ワクワク水曜塾」…… 53
笹塚小学校夏休み学習支援ボランティア …… 54
「渋谷おとなりサンデー」参加・記録学生スタッフ …… 54
青山キャンパス＆原宿・渋谷ツアー …… 55
キャンパスファーミングプロジェクト …… 56
YOUTH プロボノプロジェクト（「原宿はらっぱファーム」広報・PR 活動）…… 57
夏の草むしり隊ボランティア …… 58
青山祭に行こう！ …… 59
YOUTH プロボノプロジェクト（「マナビファクトリー」広報・PR 活動）…… 60
Fun sport nexus 2026 …… 61
藤野プロジェクト …… 62
相模原市中央区地域活性化プロジェクト「わかば」…… 63
相模原ワインプロジェクト …… 64
相模原市立図書館ボランティア …… 66
青学国際子ども食堂 …… 68
相模原市立小学校連合運動会ボランティア（相模原地域小中学校等連携事業）…… 69

≪イベント≫
ボランティアオリエンテーション …… 70
CEC 学生スタッフ企画「日常をよりよく！ Run & Walk in 代々木公園」…… 71
パタゴニア東京・渋谷ストア訪問 …… 72
ボランティアカフェ（ボラカフェ）…… 72
①山林火災とボランティア活動
～学生団体「Youth for Ofunato」による現地での支援活動レポート～ …… 73
②ヤングケアラーについて知る・学ぶ・支える勉強会～となりにいるかもしれない
「ヤングケアラー」ちょっと知ってみませんか？～ …… 73
青山学院有志×宮古プロジェクト 宮古 day 青山学院×宮古市交流活動発表会
～つながる想い、広がる学び、そして未来へ～ …… 74
2025 年度青山学院大学シビックエンゲージメントセンター活動報告会 …… 75
≪講座・セミナー≫
第 3 回青山シビックエンゲージメントフォーラム「ちいきふくしと絵本」…… 77
2025 年度国際協力プランナー入門（ソーシャルビジネス編）…… 78
コミュニティエンゲージメント勉強会 …… 79
子どもと関わるはじめの 0 歩～みんなで語ろう！子どもの居場所づくり～ …… 79
認知症サポーター養成講座（相模原キャンパス）…… 80
防災ボランティア講習：無線機を使ったコミュニケーションを体験しよう …… 81
≪各種サポート制度≫
災害・復興支援活動に対するサポート制度 …… 82
教職員ボランティア活動補助プログラム …… 82
ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度（通称ボラサポ）…… 82
【スタートアップコース】
ゆるりば …… 82
AOGAKU ボランティアネットワーク…… 84
≪正課での取り組み（青山スタンダード科目）≫
サービス・ラーニング科目 …… 85
その他の科目 …… 86
≪アドバイザー・グループ（アドグル）≫
珈琲を知り、つながりを広げ、深める …… 88
≪学生スタッフの活動≫
ボランティアオリエンテーション …… 89
ユニコムプラザさがみはら「まちづくりフェスタ」の展示 …… 89
学生スタッフによるボランティア広報誌「CEC TIMES」…… 90
Instagram の活用 …… 91
CEC 企画運営参画 …… 91
ボラカフェ企画運営 …… 92
Ⅲ　資料
シビックエンゲージメントセンター利用状況 …… 95
シビックエンゲージメントセンター規則 …… 99
シビックエンゲージメントセンター運営委員、実務委員、学生スタッフ …… 102

刊行によせて



センターの歩みと軸を確認しつつ新たな時代の市民協働へ

シビックエンゲージメントセンター　センター長
河見　誠

シビックエンゲージメントセンター（CEC）はボランティアセンターを改組してスタートしてから、2025 年度で 4 年になりました。この 4 年間、センターはそれまでの蓄積をもとに、シビックエンゲージメントのあり方をどのように展開していくかを模索してきました。

改めてセンターの設立の経緯を振り返ってみたいと思います。その原点は、2011 年東日本大震災発生を機に学生の声を受けて発足したボランティアステーションです。それが発展した組織として 2016 年青山キャンパスにボランティアセンターが設立され、2018 年には相模原キャンパスにもセンターが開設されました。但し、これは第一ステップであり、次なるステップとして、サービス・ラーニングセンターへの展開が、並行して模索されてきました。この動きは青山学院 140 周年を受けて宣言された青山ビジョンにおいて、「サーバント・リーダーの育成」が教育目標に掲げられたことに基づきます。2018 年に青山学院の「サービス・ラーニング検討プロジェクト」チームから、青山学院サービス・ラーニングセンターを大学に設置するという提案が答申されました。その後議論が深められ、結果としては、サービス・ラーニングよりも、さらに射程を広げたシビックエンゲージメントセンターが 2022 年に改組して立ち上げられることになります。

留意すべきことはその際に、シビックエンゲージメントセンターは、「他者とともに未来の国際社会及び地域社会を創造する市民として、かつ、全ての人と社会のために仕えるサーバント・リーダーとして成長するよう支援することを目的とする」（センター規則第 2 条）とされたことです。つまりその活動内容は「ボランティア活動の支援」に留まらず、また市民活動、地域活動の実践それ自体に留まるものではなく、それらを通して「市民として」かつ「サーバント・リーダー」として成長するように活動参加者を支援すること、すなわち自主的に仕えることを学ぶサービス・ラーニング教育を常に軸においたものであることが求められています。

そのような経緯と前提に基づいて、センターの活動は三分野に分けることができます。従来のボランティアセンターから行ってきた「ボランティア支援・育成」。「サーバント・リーダー」育成を授業の中で具体化していく「サービス・ラーニング」関連科目の実施・支援。そしてシビックエンゲージメントを体現する、団体や自治体との協働の活動・プロジェクト。紀要の実践報告はこの 1 年、それら三分野がどのように展開されてきたかを検証する土台となります。

加えて、規則を見ていただければ分かるように、センター旧規則では対象が本学＝大学の「学生、職員」だったのが、新規則では「青山学院の学生、生徒、児童及び園児並びに本法人の教職員」となりました（第 2 条）。幼稚園から大学まで、青山学院全体に開かれたセンターとなったことも留意しておくべきことと考えます。

社会貢献も、国際協力も、現在そのあり方を大きく変えていきつつあります。「支援」と共に「協働」というスタンスが、今後益々必要になってくるでしょう。CEC は今後、様々な社会・地域主体や当事者との「協働」と共に、青山学院内の「協働」、そして CEC 活動間の「協働」も意識しながら、一歩ずつ進んでいきたいと願っています。

本紀要はボランティア、サービス・ラーニング、市民協働に関する研究成果公表の場でもあります。寄稿くださった皆様に感謝申し上げ、研究に支えられた実践の展開に邁進していく所存です。



紀要『シビックエンゲージメントセンター研究』第４号の刊行に寄せて

シビックエンゲージメントセンター　副センター長
左近　豊

2023 年度に 1 年間 CEC に携わり、改めて今年度は 9 月からセンターの大事な働きに関わらせていただくこととなりました。センターの教員・スタッフの皆さん、そして青山、相模原両キャンパスで CEC の様々な活動に参与している学生の皆さんの、顔ぶれは変わられても、変わることなく誠実に地域の方々や子どもたちと関わりを深め、生き生きと新しい発見や出会いへと開かれている姿に青山学院を舞台に繰り広げられる現在進行形の壮大なドラマを見るだけでなく、舞台の袖に加えていただいているような喜びを味わっています。

青学の学生たちが渋谷でスタバのコーヒーかすを畑に運んで土と混ぜて野菜育てているんだよ、とか相模原ではワインプロジェクトで葡萄酒や苺ワインの企画に関わっているんだよ、とか家族や学内外の人たちに、あたかも自分ごとのように自慢（？）して回っています。聞く人たちは一様にびっくりしながら、すごく関心をもって聞いてくれます。ただ、CEC に関わるようになって心震わせられているのは、藤野や笹塚や相模原といった地域に溶け込んで、それぞれの場で地域の活性化や子どもたちのサポートなどを通して、青学のキャンパスが置かれている地域の人たちと言葉を交わし、時間をかけて関係を築いて、たとえ担い手は毎年変わっても根を深く張って、信頼関係を結んで、地域を生かしている様子を聞いたり見たりする時です。

ふと「自分自身のうちに塩を持ちなさい。そして、互いに平和に過ごしなさい」（マルコによる福音書 9：50）という言葉を思い出しました。CEC が持つ塩気は、いい塩梅に生かされて、人と人を繋ぎ、周囲の味わいを際立たせて、身近な地域から始まる「平和」を造り出していることに気付かされます。その多彩で味わい深い活動の軌跡や、探究の成果が、この紀要には刻まれています。原稿を寄せてくださった方々、査読にあたった先生方、そして編集の労を取られた皆様に感謝を申し上げます。

青山学院大学シビックエンゲージメントセンターについて

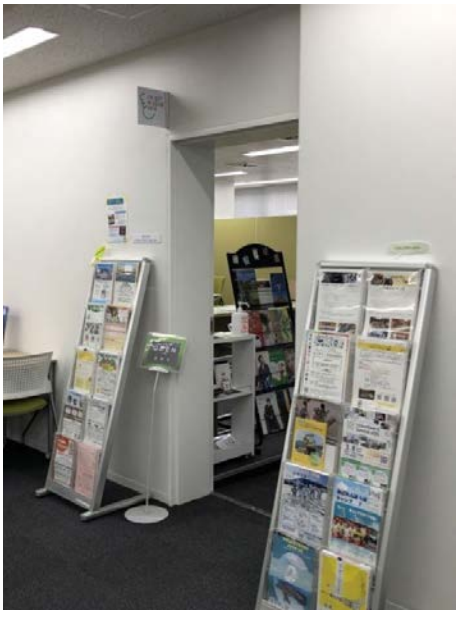
青山学院大学シビックエンゲージメントセンターは 2022 年 4 月に開設しました。
青山学院のスクール・モットーである「地の塩、世の光」を体現する人物、サーバント・リーダーの育成に向け策定された AOYAMA　VISION に基づき、前進であるボランティアセンターを改組した組織です。
2011 年の東日本大震災以降、青学生が主体的に展開してきたボランティア活動を発展させつつ正課との接続を強化させ、サーバント・リーダーシップ教育に取り組みます。

■設　立　　2022 年 4 月設立（2016 年に設立したボランティアセンターより改組）

■所在地　　青山学院大学青山キャンパス 10 号館 1 階
青山学院大学相模原キャンパス F 棟 2 階

■センターの特色
・「地の塩、世の光」となり地域社会や国際社会に貢献する
・「知（学問）の力」「若い（学生）力」「スマート（サーバントリーダー）な力」を活用する
・社会のニーズにあったボランティア活動を組織的に展開する

■センターミッション
①大学と社会の繋がりをつくる
学生・教職員の自発的な社会貢献活動への参画を促進すること
②より良い社会をつくっていく
大学の持つ専門性や強みを活用してボランティアや市民協働活動の社会的効果を向上すること
③社会から学び、自分の力へ
社会貢献活動への参加に伴う教育的効果を向上させること





【センター外観　青山（左）、相模原（右）】

コーディネーター挨拶

青山キャンパス

主にサービス・ラーニング科目を担当し、地域社会や NPO 団体の皆さまとともに連携の輪を広げながら、実践的な学びと活動に取り組んでまいりました。皆さまと力を合わせて歩んできたこの一年に、あらためて感謝しております。今後も、地域の皆さまと対話を重ねながら、教育と地域貢献がともに実を結ぶ学びをめざしてまいります。

秋元 みどり

本センターに着任して二年目は、学生の地域（ボランティア）活動という切り口で、小学校、商店街、あるいは都市農地など、私自身も従来関わってこなかった領域の現場に学生とともに関わり、新たな展開を地域の方々と作ることができました。地域のなかで大学生（若者）がどのような役割を担いうるのか、その可能性を聞こえの良い大きな標語に頼ることなく、具体的な取り組みのなかから考えられていることをうれしく思っています。

中里 晋三

この一年、新たな活動を通じて、学生が地域や団体の方々と協働しながら、自らの力を社会の中で発揮していく姿に多く触れてきました。実践の場での学びの積み重ねが学生の成長につながっていることを日々実感しています。こうした機会を支えてくださった皆さまに心より感謝申し上げます。今後もご縁を大切にしながら、学びと実践の往還を広げるとともに、地域や団体の皆さまにとっても新たな気づきや活力につながる協働を目指してまいります。

広瀬 かおり

相模原キャンパス

シビックエンゲージメントセンターの開設から年度を重ね、本誌も第４号の発刊を迎えることができました。活動面でも、本センターの理念が具体的な形となって表れ始めているように感じています。本センターは、単に支援活動を提供するだけでなく、学生が社会との関わりの中で視点を広げ、協働を通じてともに学び、成長していく場であることに意義があります。今号においても、多様な取り組みとさまざまな視点からの報告を掲載することができました。今後も、学生・教職員、そして地域の皆様をつなぐ架け橋として、活動を着実に推進してまいります。

三神 憲一

CEC へと改組して始まった本紀要も第４号を迎えることとなりました。この間、「わかば」プロジェクトやそこから派生した相模原ワインプロジェクト、地域の小中学校との連携企画、相模原市立図書館ボランティア、認知症サポーター養成講座等、多くの活動を通して学生と地域の皆様のつながりを作ることに関わらせていただきました。こうした活動が継続・発展してきたことは、ひとえに地域や関係団体、行政の皆様のご協力、そして学生スタッフやプロジェクトの学生たちの力によるものです。心より感謝申し上げます。私からのご挨拶は本号が最後になりますが、これまでの活動の積み重ねが今後さらに発展し、学生の学びや成長、そして大学と地域のさらなるつながりへと続いていくことを願っております。

水谷 耕平

学生スタッフ

シビックエンゲージメントセンターでは、センターが掲げるミッション実現に向けて、コーディネーターと共に青学生のボランティア活動や社会貢献活動を促進し、学生と地域をつなぐ役割を担う学生スタッフ制度を設けています。

学生スタッフとしての活動を通して、ボランティアや社会貢献活動に関する視野を拡げ、さまざまな地域や団体との連携から社会について学び、CEC と共に青学生の社会貢献力を高めたい！そんな強い意志と行動力をもつ学生たちが活動しています。

主な活動

・センター主催事業の企画や運営
・本学学生に向けたボランティア活動や市民協働活動の啓発や促進・情報発信
・その他、センターが必要とする活動の補佐業務

青山キャンパス

11 人（1 年生 1 人、3 年生 5 人、4 年生 3 人、修士 1 年 2 人）

相模原キャンパス

5 人（2 年生 2 人、3 年生 3 人）

学生スタッフの活動を振り返って

私は大学２年生の頃からシビックエンゲージメントセンターの学生スタッフとして活動を続けています。今まで様々な活動に携わりましたが、特に笹塚プロジェクトに力を入れて活動をしてきました。笹塚プロジェクトでは、イベントを通じて笹塚地域の方々と共に楽しい時間を共有することで、交流を深めています。当初は企画や運営に苦労することもありました。しかしチームメンバーと話し合いながら試行錯誤することで、地域の方々に「来てよかった」「楽しかった」と思ってもらえる活動ができていると感じています。このように、学生スタッフとして主体的に関わることで、地域に貢献することができます。そのような機会は、大学生活において中々訪れるものではないと思います。この貴重な経験を通して少しでも多くのことを学びながら、これからも活動を続けたいと思います。



青山キャンパス学生スタッフ
経済学部４年
萩原　稜久



相模原キャンパス学生スタッフ
コミュニティ人間科学部２年
黒木　雫

一年間の活動を振り返ると、シビックエンゲージメントセンターの学生スタッフとして、学内から地域社会へと、私自身の視野が大きく広がった一年であったと感じています。 特に相模原市 22 地区社会福祉協議会中央区連絡会の方々との意見交換会は、とても印象的でした。当初は緊張もありましたが、対話を通じて学生の視点が想像以上に地域から期待されていると知り、喜びを感じました。一方で、学生の実情と地域のニーズの間にある「すれ違い」を肌で感じたことは、社会学を学ぶ身としても重要な気づきとなりました。このギャップを埋め、学生を地域へ繋ぐ工夫を凝らすことが、学生スタッフとしての課題の一つであると感じます。私にとってボランティア活動とは、ただ誰かを支援するだけではなく、日常のなかで「今自分に何ができるか」を問い続け、他者との間に緩やかな繋がりを育む過程そのものです。見ず知らずの誰かが「隣人」へと変わっていく、その連鎖を広げていくことに大きな意義を感じています。この一年の学びを糧に、これからも感謝と初心を忘れず、周囲に目を配りながら、今の自分にできることを着実に積み重ねていきたいです。

Ⅰ　研究論文・実践報告

＜実践報告＞

社会人 MBA 課程における「シビック・エンゲージメント・プロジェクト」実践報告
―神山まるごと高専への「本の架け橋プロジェクト」―

伊藤 雄太郎
青山学院大学大学院国際マネジメント研究科 修了生

Practice Report on the “Civic Engagement Project” in a Part-Time MBA Program: The “Bridge of Books Project” for Kamiyama Marugoto College of Design, Engineering and Entrepreneurship

Yutaro ITO
MBA, Graduate School of International Management, Aoyama Gakuin University

要旨

本稿は、青山学院大学大学院国際マネジメント研究科（ABS）の講義「シビック・エンゲージメント・プロジェクト」（2023 年度）における実践として、神山まるごと高専への書籍提供「本の架け橋プロジェクト」を取り上げ、背景、設計、実施過程、成果と課題を整理・考察した。図書スペースの書籍不足という顕在ニーズを起点に、起業家育成環境における学習者の成長を支える潜在ニーズ（人間力形成や多様な視点への接続）を踏まえ、書籍提供を単なる物品移転ではなく、推薦メッセージカードおよび図書館カード等により「本との出会い」を設計する試みとして位置づけた。結果として、計 86 タイトルの書籍を提供し、2024 年 3 月に現地で配架を実施した。また、翌年度に同様の枠組みで第二弾が実施されたことを確認した。考察では、世代差による介入の正当性、読書を通じた人間力形成の因果的不確実性、提供者側チームの参画設計という論点を示し、次回に向けて受け手の声の事前把握、軽量なフィードバック回路、社会人学生の制約を踏まえた運営設計の必要性を示した。また、関係者の反応およびインパクト評価の観点から、書籍提供というアウトプットに加え、受け手・提供者双方に生じた意味づけと、学生本人のアウトカム把握が未検証である点を整理した。

キーワード：シビック・エンゲージメント（CE）、コミュニティ・ベースド・ラーニング（CBL）、社会人 MBA（専門職大学院）

1　はじめに

本稿の目的は、青山学院大学大学院 国際マネジメント研究科（以下、ABS（青山ビジネススクール））における講義『シビック・エンゲージメント・プロジェクト』（以下、本講義）（2023 年度開講）の一環として実施した取り組みについて、活動の背景・設計・実施の過程を整理した上で、そこから得られた課題と気づきを考察することである。本稿が扱うプロジェクトは、徳島県に所在する神山まるごと高専（以下、まるごと高専）との協働を通じて、書籍を中心としたインプット環境の拡充を試みたもの（以下、本プロジェクト）であり、寄贈（提供）という行為そのものだけでなく、「本を介した学びの場づくり」をどのように構想し得るかをテーマとしている。筆者らはこのプロジェクトを ABS とまるごと高専の学生を「本」を通じてつなぐ意図を込めて「本の架け橋プロジェクト」と名付けた。

本講義は、社会人学生が MBA 課程で学ぶ授業の一つとして、シビック・エンゲージメント（以下、CE）の概念理解と実践を柱としている。本講義では、コミュニティ・ベースド・ラーニング（以下、CBL）の考え方に基づき、コミュニティ（協働先）と学生が課題やニーズを相互に共有し、それらを定義したうえで、学生が活動に参画することを通じて、コミュニティにとっての成果と、学生にとっての学びを同時に達成することを目指す。

本プロジェクトの出発点には、まるごと高専における「図書スペースに本が不足している」という顕在的ニーズがあった。他方で、起業家育成を掲げる教育環境において、10代後半の学生が長期的に成長するために、どのような知的素材に触れ、何を手がかりに世界を捉え直していくべきかという潜在的な問いも立ち上がった。そこで本稿では、必要とされる環境をどのように整理したのか、書籍収集や提供方法をどのように設計したのか、また受け手の学習体験を豊かにするためにどのような工夫（例:メッセージカード等）を施したのかを、実践記録として明確化する。

加えて本稿では、「大学院生」であると同時に「社会人」であるABS学生がCEに取り組むことの意味を考える。職業人として培ってきた知識・技能・経験を携えつつコミュニティの現場に身を置くことは、既存の価値観や問題設定を点検し直し、学びを社会に接続する契機が生まれ得る。一方で、時間的制約や役割期待といった固有の条件が存在する中で、学位取得を目的とした専門職大学院における学びと同時に自身が関係するコミュニティに対してどのように関わりを持つべきであるかを検討する。本稿は、こうした社会人学生ならではの可能性と制約の双方を視野に入れ、実践を振り返るための材料を提示することを意図する。

2　プロジェクトの概要

2.1 神山まるごと高専の概要

本プロジェクトの協働先は、神山まるごと高専である。神山まるごと高専は、徳島県神山町に設置された私立高専で、2023年4月に開校した。定員は1学年40名程度、全寮制を基本としている。同校の教育コンセプトは、「テクノロジー×デザイン×起業家精神」を核に、実践的な学びを通じて学生の創造性と実行力を育成することを掲げている。

2.2 背景 /ABS とまるごと高専の関わり

本講義を担当する宮副謙司教授は2013年より地域活性化研究の対象として神山町に着目し、先行研究を進めてきた。2019年からはABSにおいてNPO法人グリーンバレー（神山町の地域活性化の推進主体）による寄付講座『地方創生実践論 神山プロジェクト』を開講し、2022年からはCBLとしてABS学生が神山町に滞在して学習するプログラムも加わった。こうした経緯を通じてABSと神山町の関係は深化しており、2023年のまるごと高専開校時、神山プロジェクトとしてABSが訪問・見学した際に寮の図書スペースに書籍が不足している事実を知り、ABSとして何かしら貢献できないかと検討をするに至った。

2.3 ニーズの整理（顕在ニーズ）

本プロジェクトの出発点となった顕在的ニーズは、学習環境における「書籍」というインプット資源の不足である。図1に示すように、2023年の訪問時点では図書スペースの棚の多くに空きが確認され、開校初年度の教育機関として蔵書環境の整備が進行中であることがうかがわれた。この際、正確な蔵書数までは確認していないものの、少なくとも当時の図書スペースは蔵書形成の途上にあったと判断した。なお、全国学校図書館協議会の調査によれば、全国の高校における平均蔵書冊数は26,534冊とされており、この数値は本プロジェクトにおける蔵書環境の課題を考えるうえでの参考値となる。

図 1：2023 年訪問時のまるごと高専図書スペース



また、ここでいう不足とは、単に書棚の空きに対して収蔵数が少ないという数量的な側面に限らない。筆者（プロジェクトチーム）は、図書スペースにおいて学生が参照し得る書籍の選択肢が限定的であり、結果として学生が自ら関心を広げ、問いを深める際の足場となる書籍群が十分ではない状態にあると捉えた。書籍や図書スペースが学習者の探究的学習や関心形成を支える基盤的資源であるという先行研究上の理解を踏まえ、本プロジェクト上の課題として整理したものである。

2.4 ニーズの整理（潜在ニーズ：筆者の問題意識）

一方で筆者は、顕在ニーズ（本がないこと）への対応だけでは、起業家育成という教育環境における学生の成長を十分に支えきれない可能性があると考えた。起業家育成は、ビジネス、テクノロジー、課題解決手法等の実学的な知識やスキルに焦点が当たりやすい。しかし、アントレプレナーシップ教育において期待される成果は、知識・スキルの習得にとどまらない。

文部科学省のアントレプレナーシップ人材育成プログラムでは、課題発見力、他者と協働する力・柔軟性、技術活用、アイデアを起点とする課題解決力が、起業家に獲得が期待される能力として示されている。また、アントレプレナーシップ教育に関する先行研究では、起業意思、起業への態度、自己効力感、起業家的能力などが主要な成果として扱われてきた。たとえば田路ら（2023）は、大学の教育・環境が起業意思に影響を及ぼすことを示している。海外研究においても、Wu ら（2022）は、アントレプレナーシップ教育が自己効力感や起業意思を高める効果を持つこと、起業コンテストや挑戦経験・成功体験がその効果をさらに強化することを示している。これらの研究は、アントレプレナーシップや起業家的能力を先天的な個人特性としてのみ捉えるのではなく、教育環境や経験を通じて一定程度形成され得るものとして扱っている点で示唆的である。

筆者は社会人として金融業界に身を置き、Debt/Equity 性資金の出し手として複数の経営者と対話してきた経験を有する。その中で、継続的に成果を挙げる経営者には、起業や経営そのものを目的化するのではなく、「社会を変えたい」「自社のプロダクトやサービスの価値を届けたい」といった動機に基づいて行動し、周囲の協力者を集めている例が多いように見受けられた。ここには、誠実さ、他者への敬意、学習姿勢といった人間的側面が関与している可能性がある。本稿では、これらの側面を便宜的に「人間力」と呼ぶ。

ここで本稿が主に念頭に置く学習者は、まるごと高専の１・２期生を中心とする高専生である。高専は中学校卒業後に入学する５年制の教育機関であり、後期中等教育段階に相当する年齢から専門的な学習を始める点に特徴がある。こうした高専生が、専門的な学習を始めると同時に自己理解、他者理解、将来像の形成を進める青年期の学習者であることを踏まえると、実学的インプットに加えて、世界の捉え方や価値判断の前提を揺さぶる素材に触れ、自分自身の問いを立ち上げる契機も重要である。

この意味で、書籍提供は単なる「不足の補填」ではなく、学習者が自ら問いを持ち、関心を広げ、

思考を深めるための環境整備として位置づけられる。筆者は、特定の正解を提示するのではなく、多様な視点に接続する入口を増やすことが、潜在ニーズに対する一つの解決策になり得ると考えた。

2.5 先行研究と本稿の位置づけ

書籍提供や読書環境の整備に関する実践は、学校図書館、地域図書館、大学図書館、読書推進活動等の文脈において蓄積されてきた（米澤，2008；田中・篠崎，2025）。また、大学教育におけるCE、サービスラーニング、CBLに関する研究では、学生が地域やコミュニティと関わることを通じて、学習者自身の学びとコミュニティへの貢献を同時に達成しようとする実践が論じられてきた（佐藤，2017；秋吉，2025）。

一方で、これらの先行研究に対して、本稿には三つの特徴がある。第一に、本稿が扱う実践は、社会人MBA課程におけるCE/CBL実践であり、社会人学生が有する職業経験、専門性を活用した点である。第二に、本プロジェクトは、書籍提供を単なる物品寄贈としてではなく、推薦メッセージカードや図書館カードを通じて、受け手が「なぜこの本が薦められたのか」を知り、本との出会いを意味づけるための体験設計として位置づけた点である。第三に、本稿は、受け手側の学習環境整備だけでなく、提供者側である社会人学生チームの参画の質、役割分担、コミットメント設計を考察対象に含めた点である。

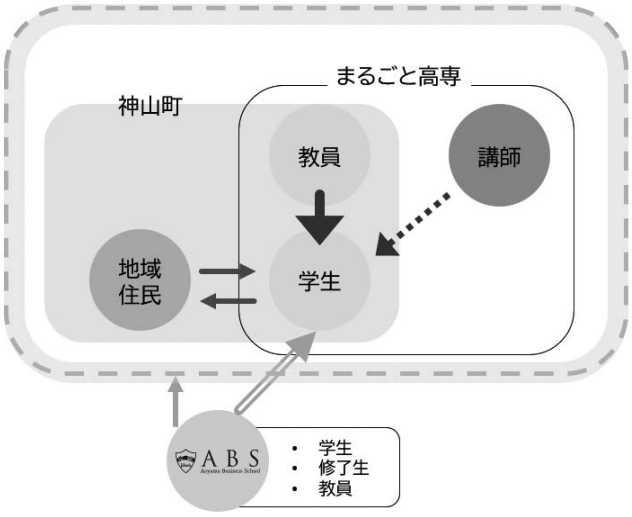
以上より、本稿の新規性は、社会人MBA生によるCE/CBL実践として、書籍提供を「本との出会いの設計」として捉え直し、さらに受け手・提供者双方の関与の質を検討した点にある。本稿は、書籍提供の教育効果を厳密に測定するものではないが、社会人大学院生が実務経験と学術的学びを背景にコミュニティへ関与した実践を整理し、社会人MBA課程におけるCE/CBLの可能性と課題を検討するものである。

3　プロジェクトの設計

3.1 設計方針と進め方

本プロジェクトは、まるごと高専の学習環境に対する支援を「書籍提供」という具体的行為として実施しつつ、その過程をCE・CBLの実践として位置づけることを意図して設計された。すなわち、単に書籍を集めて送付するのではなく、ニーズ把握から提供方法の設計、実施、振り返りまでを一連のプロセスとして組み立てた。

図2：プロジェクト概要図



出典：筆者作成

3.2 体制と役割分担

本プロジェクトは、青山学院大学大学院国際マネジメント研究科（青山ビジネススクール）の講義『シビック・エンゲージメント・プロジェクト』の履修生8名で構成したチームで実施した。

役割分担にあたっては、まるごと高専との調整、書籍収集の呼びかけ、収集書籍の整理、メッセージカード等の準備、発送・現地での配架といった必要機能を整理し、各メンバーの職務経験や関与可能性を踏まえて分担した。表 1 は、その概要を示したものである。

表 1：プロジェクトメンバーの役割分担

メンバー	職務経験・背景	主な役割
A （筆者）	金融・投資管理	対外調整、全体進行、現地訪問
B	ヘルスケア・営業戦略	書籍収集の告知・参加促進
C	流通小売・人事	収集書籍の管理・重複チェック
D	資源関連・営業管理	メッセージカード設計・制作
E	営業	図書館カード・ブックポケット調達
F	飲料・消費財・営業	書籍収集の告知・同窓会の設計運営
G（科目履修生）	素材・化学品・事業開発	書籍の発送・現地訪問
H（科目履修生）	教育・保育・IR/ 広報	書籍リスト化・現地訪問

3.3 具体的な作業

① 目標の設定：書籍数はまるごと高専 1、2 期生の学生数合計に合せて 80 タイトルとした（宮副教授の寄贈分 30 タイトルを含むため、実質的な目標は 50 タイトル前後）。

② まるごと高専とのキックオフミーティング：本プロジェクトの概要を説明し、賛同を得る。

③ 書籍収集対象と方法の決定（参画の設計）：神山プロジェクト履修者および ABS 教授陣を中心に寄贈を募った。提供者側（ABS）の参画者をどのように増やし、どのような関わり方を促すかも設計課題として位置づけ、参加行動のハードルを下げ、参加者が「関与した実感」を持てる導線を用意することを重視した。具体的には、書籍収集の呼びかけにあたり、①まるごと高専の図書スペースにおける顕在ニーズ（書籍不足）を共有し、②起業家育成という教育環境において多様な知的素材に触れる機会を増やすという意図（2.4 で述べた問題意識）を示したうえで、③提供書籍に推薦メッセージを添付することを活動の中核的要素として明確化した。これにより、寄贈者が単に本を提供するだけでなく、「なぜその本を薦めるのか」という文脈を言語化し、受け手の学習体験に接続する関与が生まれることを狙った。

④ まるごと高専側とのすり合わせ:既に高専が保有する書籍を確認するため、一時的に保有データベースの閲覧権限付与を受け、収集した書籍との重複が無いかを確認。

3.4 受け手の学習体験を意識した工夫

本プロジェクトの設計上の工夫として、下記 2 点を施した。

① 提供書籍に推薦メッセージを記したカードを添付：カードには、書籍の特徴や薦めたい理由を短く記述し、提供者名が併記された。例えば、当該書籍がどのような学習に役立つか、人生のどのような場面で活きるものであるのかが簡潔に示されており、受け手が書籍を手に取る際の手がかりとなるよう配慮した。

② 昔ながらの図書館カードとブックポケットを添付：書籍貸出のデジタル化 / スマート化に伴い、現在の図書館では見ることのなくなった図書館カードだが、自分の前後に当該書籍を読んだ人が分かるという情報は、学生間コミュニケーションのきっかけになり得る。ひらめきやアイデアは、自分の中で知識が結びつくだけではなく、他者とのインタラ

クティブなやりとりが触媒となって生まれることもあると考え、そのような反応が生まれることを期待して図書館カードを添付するとともに、Z世代が知らないであろうブックポケットにカードを収納することでアナログ時代も追体験できるような演出を施した。これらの工夫により、受け手の選択コストを下げつつ、提供者の意図を添えて「押し付け」を避ける導線を意図した。

3.5 まるごと高専との調整

準備段階では、書籍の提供方法（持ち込み／送付、受領場所、受領時期等）や、提供物の取り扱い（図書スペースへの配置や管理の想定等）について、まるごと高専との調整を行った。まるごと高専の運用上の制約（入試業務が落ち着く3月に書籍を搬入、新学期から学生による閲覧が可能となるスケジュール）や希望（図書データの登録、配架作業）を踏まえつつ、先方に過度に負担を生じさせない形で提供が実現するよう、引き渡しの段取りを整えた。

本プロジェクトは、ABSの授業の枠内で実施される活動であるため、準備作業の時間的制約が存在する。その中で、実務的な調整（連絡、日程、搬入、当日の進行）を確実に行うこと自体が、社会人学生によるCE実践の特徴とも関連する。すなわち、現場に対する配慮と実行可能性の確保を両立させながら設計を進めることが、学習上の重要な要素となった。

4　実施内容

4.1 書籍の収集

書籍寄贈を依頼する対象者は、神山プロジェクト履修者およびABS教授陣とした。対象者をこのように設定した理由は、本プロジェクトが単なる書籍収集ではなく、まるごと高専の学生に向けて推薦理由を添えた書籍を届ける取り組みであったためである。

神山プロジェクト履修者は、神山町やまるごと高専との接点を有しており、本プロジェクトの趣旨を理解しやすい。また、社会人学生として業界・職種・年齢・専門分野が多様であるため、幅広い書籍推薦が期待できた。さらに、推薦メッセージカード記入という追加的負担についても、趣旨への共感を前提に協力を得やすいと考えた。

実際の依頼にあたっては、対象者に対して事前にメールで本プロジェクトの概要を伝え、「神山プロジェクト同窓会」の場に寄贈する書籍を持参してもらうよう依頼した。対象者が本プロジェクトに参加したいと思える仕掛けとして、「神山プロジェクト同窓会」という形で集まる場を設けた点も、本プロジェクトの特徴である。同窓会当日は、改めて本プロジェクトの企画意図、まるごと高専の図書スペースの状況、推薦メッセージカードを添付する趣旨を説明したうえで、参加者にカードを配布し、その場で記入してもらった。これにより、提供者が本プロジェクトの背景を理解したうえで、自らの経験や問題意識を踏まえて「まるごと高専の学生に読んでほしい本」を選び、その理由を受け手に伝える参加形式とした。

一方で、ABSは専門職大学院であり、学生の多くは実務経験を有する社会人であるため、提供される書籍は実務的・実践的な関心に寄りやすい可能性があった。そこで、実務的視点に加えて学術的視点を取り入れるため、宮副教授を通じてABS教授陣にも協力を依頼した。教授陣を対象に含めることで、経営学、社会科学、人文知等の学術的観点からの書籍推薦も加わり、提供書籍の幅を広げることを意図した。

4.2 書籍の贈呈

収集した書籍は宅配便で事前にまるごと高専へ送付し、2024年3月2日にプロジェクトメンバー3名でまるごと高専を訪問した。先方の対応者は事務局長および司書担当者であった。当日は、まるごと高専側で用意した背表紙用のラベルを各書籍に貼付し、ジャンルを大まかに意識しつつも、学生と本との偶発的な出会いが生まれるよう、異なる領域の書籍が隣り合う配置となるように配架した。

あわせて、ジャンルが多領域にわたること、また各書籍に推薦メッセージカードを添付していることを先方へ共有し、学生が本を手に取る際の導線づくりを意図した設計である旨を説明した。

先方司書は事前に各タイトルを確認済で、一部の書籍を指して「このような名著をいただけること、大変嬉しく思う」といったコメントもあった。

図 3：作業の様子と配架デザイン





図 4：贈呈式の様子



5　成果と考察

5.1 成果①：書籍の収集

ABS 学生・修了生・教員から合計 56 タイトルの書籍を集めることができ、宮副教授寄贈の 30 タイトルと併せて 86 タイトルと目標は達成された。

提供書籍の内容は、ビジネス・経営、学習・研究、語学、科学技術、人文・社会、建築・デザイン、文学、紀行・エッセイ等の複数領域にまたがった。表 2 には、分野別の代表例を示す。

表2：収集書籍のタイトル例

分野	代表的な書籍例
ビジネス・経営	『ビジネスの未来』『創造的破壊の力』『資本主義の歴史』
人文・社会	『サピエンス全史』『君たちはどう生きるか』『日本人のための宗教原論』
文学・小説	『夜のピクニック』『アルジャーノンに花束を』『沈黙』
科学技術・デザイン	『誰のためのデザイン』『量子コンピュータの仕組み』『ガウディ×井上雄彦』
語学・学習	『一億人の英文法』『ジーニアス英和辞典』『理想の国語教科書』
紀行・エッセイ	『深夜特急』『旅をする木』『ナナメの夕暮れ』

5.2 成果②：プロセス上の成果（継承・再現性）

本プロジェクトの実施後、同講義の2024年度履修生により、書籍提供の第二弾が実施されたことを確認した。第二弾の実施背景については、まるごと高専から「蔵書が増えた一方で、ジャンルが実学系に偏り、小説等のフィクションが少ない」という趣旨の指摘があったとされる。これを踏まえ、第二弾では小説を中心に（一部エッセイ等も含めて）収集・提供したという。第二弾の実施は、本プロジェクトが単発の活動に留まらず、後続の履修生により同様の枠組みで再実施可能な活動として引き継がれた点で、プロセス上の成果と位置づけられる。

5.3 関係者の反応

本プロジェクトの意義を検討するため、ここでは、現地での贈呈・配架作業時、および書籍収集の過程で確認された関係者の反応を整理する。なお、これらは体系的なアンケート調査や事後ヒアリングに基づくものではなく、プロジェクト実施過程で得られた発言や反応を実践記録として整理したものである。そのため、本節で示す内容は、教育的効果や行動変容を実証するものではなく、本プロジェクトが受け手側・提供者側にどのように受け止められたかを考察するための補助的材料として位置づける。

受け手側であるまるごと高専関係者からは、提供書籍の内容および本プロジェクトの実施姿勢について肯定的な反応があった。配架作業の際、司書担当者からは、一部の書籍について「このような名著をいただけることは大変ありがたい」といった趣旨のコメントがあった。また、事務局長からは、「まるごと高専には多くの見学者が訪れる一方で、見学を通じて生じた関係性を具体的な支援行動につなげる事例は必ずしも多くなく、本プロジェクトのように実際のアクションとして関与が行われたことは嬉しく、意義あることだ」という趣旨のコメントがあった。これらの反応から、本プロジェクトは単なる物品提供ではなく、ABSとまるごと高専との関係性を踏まえた具体的な参画行動として受け止められたと考えられる。

また、現地での配架にあたっては、学生と本との偶発的な出会いを促すことを意識した。ジャンルごとに書籍を固めると、学生がすでに関心を持っている領域の本にしか手を伸ばさない可能性があるため、あえてジャンルを過度に固定せず、異なる領域の書籍が隣り合うように配置した。これは、本プロジェクトのコンセプトである「本との出会いの設計」を、書籍選定やメッセージカードだけでなく、配架の段階においても具体化しようとする試みであった。

一方、提供者側であるABS関係者にとっても、本プロジェクトは神山での学びを振り返る機会となった。書籍収集の場として設けた「神山プロジェクト同窓会」では、履修者同士が再会し、当時の経験や地域との関わりを改めて想起する場となった。また、まるごと高専の学生に向けて本を選び、推薦メッセージを書く過程は、提供者自身が自らの経験や価値観を振り返り、それを若い学習者に向けて言語化する機会にもなった。

以上を踏まえると、本プロジェクトの意義は、86タイトルの書籍を提供したというアウトプットにとどまらない。受け手側にとっては、推薦理由が添えられた書籍や配架上の工夫により、本を手に取る導線が設計された。一方、提供者側にとっては、神山での学びを振り返り、自らの経験や問題意識を次世代に向けて言語化する参画機会となった。この点において、本プロジェクト

は、書籍提供という一方向の支援にとどまらず、受け手と提供者の双方に意味づけを生じさせ得る CE/CBL 実践であったと考えられる。

ただし、本節で整理した反応は、体系的な調査に基づくものではない。そのため、まるごと高専の学生が実際にどの書籍を手に取り、どのような学びや対話が生じたのかについては、本稿では十分に把握できていない。この点は、本プロジェクトのアウトカム把握上の限界であり、今後同様の取り組みを行う際には、受け手である学生の反応や利用実態を把握する仕組みを設ける必要がある。

5.4 学究的収穫：社会人大学院生の協働経験としての学び

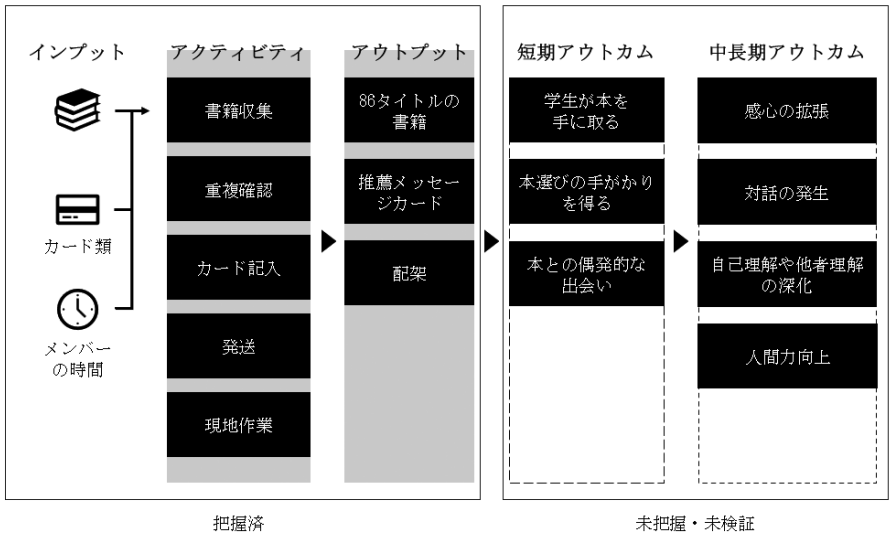
本講義が掲げる「学生にとっての学究的収穫（学び）」の観点では、筆者にとって、本プロジェクトは異なる専門性・職業文化を持つ社会人学生同士で協働すること自体が重要な学習機会となった。筆者は業務上、プロジェクトを推進する経験を有するが、企業内や同一業界内では、暗黙の前提や「当たり前」（意思決定の速度、役割分担、合意形成の作法、優先順位の付け方等）が一定程度共有されていることが多い。これに対して ABS では、受講生が多様な業界・職種から集まっており、前提となる常識や仕事観が必ずしも一致しない。実際に本プロジェクトの準備過程でも、プロジェクトの進め方やコミットの仕方、論点の置き方がメンバー間で異なり、調整が必要となる局面があった。

こうした状況下で協働を成立させるためには、前提を言語化して共有し、相手の立場や制約を踏まえて合意形成を行うことが不可欠である。この経験は、筆者にとって、CE を「外部のコミュニティに関与する活動」としてだけでなく、多様性を内包するチーム内部での協働を通じて、市民的関与に必要な対話・調整・合意形成を学ぶプロセスとして捉え直す契機となった。とりわけ社会人学生は時間制約や優先順位が異なるため、参画の仕方に差が生じやすく、そのこと自体を前提に運営設計を考える必要があるという示唆も得られた。

5.5 インパクト評価の観点から見た本プロジェクトの整理

本プロジェクトは厳密なインパクト評価を目的として設計されたものではないが、確認できた成果と未把握の成果を整理するため、インパクト評価の考え方を補助的に参照する。図 5 に示すように、本プロジェクトでは、書籍、推薦メッセージカード、図書館カード、メンバーの時間等がインプット、書籍収集・重複確認・カード記入・発送・配架がアクティビティ、86 タイトルの書籍提供と推薦メッセージカード付き配架がアウトプットに相当する。一方、学生が実際に書籍を手に取ったか、読書を通じて関心や対話が生じたか、長期的に自己理解や他者理解、人間力形成につながったかは検証できていない。したがって、本稿で確認できたのは主としてアウトプットまでであり、アウトカム・インパクトの把握は今後の課題である。

図 5：インパクト評価の観点から見た本プロジェクトの整理



出典：公益財団法人社会変革推進財団「インパクト測定・マネジメント」におけるロジックモデル例を参考に筆者作成

5.6 考察

本プロジェクトは、社会人大学院生（実務経験を持ちながら経営学を学ぶ学習者）が、市民としてコミュニティに参画する試みとして位置づけられる。一方で、その参画の質をCEの観点から評価するためには、「何を提供したか」だけでなく、「どのような不確実性や葛藤の中で関与したか」を明示する必要がある。本プロジェクトでは、少なくとも以下の3点が設計・実行上の重要な論点として立ち上がった。

第一に、提供者（ABS学生：30～50代）と受け手（高専学生：10代後半）との世代差が、介入の妥当性に関する不確実性を生んだ点である。提供者側の経験や価値観にもとづく「良い本」「触れてほしい視点」が、受け手にとって本当に意味あるものとして受け取られるのか、筆者には確信が持てなかった。ここで問題となるのは、善意の有無ではなく、ABSという外部者が持ち込む価値判断が受け手側の文脈に適合するかという正当性の論点である。CEとしては、提供者が“よいと思うもの”を実装するだけで完結せず、受け手の関心・選好・生活感覚を設計段階に取り込み、価値判断のズレを調整するプロセスを持てたかが重要になる。

第二に、潜在ニーズとして設定した「人間力」（協働、信頼、他者理解、価値判断の成熟等）について、書籍提供がそれに資するのかという因果の不確実性が残った点である。読書体験が人間形成に寄与し得るという直観はある一方で、提供した本が実際に読まれ、対話や内省につながり、態度･行動の変化に至るという連鎖の担保は、本プロジェクトの設計にはない。したがって、本プロジェクトのコンセプトである「出会いの設計」は、読書による成長を断言するものではなく、むしろ“その可能性を開く入口を増やす”という控えめな水準の仮説として位置づけるのが適切であると考えられる。CEやCBLとしては、この仮説の妥当性を検証可能にするためのフィードバック回路（読まれ方・使われ方の把握、受け手の声の回収）が不可欠であったが、本プロジェクトではその設計が限定的であった。

第三に、実施主体（チーム）内部の参画にばらつきがあった点である。準備作業への関与が限定的なメンバーが存在し、最終的にまるごと高専への贈呈に参加したのは3名だけであった。この事実は、プロジェクト運営上の課題に留まらず、CEとしての「参画」を考えるうえでも示唆がある。すなわち、コミュニティへの参画を掲げる以上、提供者側のコミュニティ（ABS講義内チーム）においても、目的意識の共有、役割と責任の分担、関与の納得感をいかに形成するかが問われる。社会人学生は時間制約や関与可能性に差が出やすいからこそ、CE実践を継続可能なものにするには、最低限のコミットメント設計（役割の明確化、関与の可視化、当日の参加の意味づけ等）が必要になる。

以上より、本プロジェクトは、社会人大学院生が市民としてコミュニティへ関与する入口として成立した一方、(1) 世代差に起因する価値判断の適合、(2) 読書介入の因果の不確実性、(3) 提供者側コミュニティ内部の参画の設計という三つの困難を伴う実践であったと整理できる。これらは「失敗」ではなく、CEを単なる善意の提供から、相互性と説明責任を備えた参画へと高めるための論点であり、次回以降の改善課題として位置づけられる。

6　今後の課題

前節で述べた3つの難しさを踏まえ、今後同様の取り組みを行う際の課題を整理する。

第一に、受け手である高専生の関与を設計段階に組み込むことである。世代差がある状況では、提供者が「価値がある」と考える書籍や視点が、受け手の関心や生活感覚に適合するとは限らない。したがって次回以降は、協働先の教職員だけでなく、可能な範囲で学生の声も事前に把握し、選書方針や配架･導線設計に反映することが望ましい。たとえば、学生代表への簡易ヒアリングや、「読みたいテーマ」を尋ねる短いアンケートなどが考えられる。

第二に、アウトカムを把握するための軽量なフィードバック回路を設けることである。本プロジェクトでは、提供後の利用実態や学生本人の反応を十分に把握できなかった。そのため、読書が関心の拡張、対話の発生、人間力形成にどのようにつながったのかを検証する材料が限られている。厳密な因果推論を目指す必要はないが、配架後一定期間を経た段階での司書への簡易ヒアリング、学生による任意の感想記入、貸出・閲覧状況の簡易記録など、負担の小さい方法で反応を把握する仕組みが必要である。

第三に、社会人学生の制約を踏まえた運営設計である。社会人学生は仕事や家庭の事情により、関与

可能な時間や方法に差が生じやすい。そのため、全員が同程度に関与することを前提とするのではなく、最低限必要な関与水準を事前に合意しておくことが望ましい。特に、現地訪問のように負担の大きいタスクについては、早い段階で参加可能性を確認し、役割分担を具体化しておく必要がある。また、推薦メッセージカードは、提供者が選書理由を言語化する重要な仕組みであるため、記入の趣旨や方法を共有する簡易なガイドを用意することも有効である。

以上の課題は、単に作業効率を高めるためではなく、社会人大学院生が市民としてコミュニティに関与する際の「参画の質」を高めるためのものである。本プロジェクトは第二弾へ引き継がれたことからも、継続可能性を持つ取り組みであったと考えられる。今後は、受け手の声を取り込み、軽量なフィードバックを備えた形で実践を反復することで、コミュニティへの貢献と学習成果の双方をより確かな形で接続していくことが期待される。

7　おわりに

本稿では、青山学院大学大学院国際マネジメント研究科（青山ビジネススクール）の講義『シビック・エンゲージメント・プロジェクト』における実践として、神山まるごと高専への書籍提供プロジェクトを取り上げ、その背景、設計、実施内容、成果と課題を整理した。

一方で、CE として本プロジェクトを評価すると、単にアウトプットを達成したか否かではなく、どのような関与の仕方でコミュニティに参画したのか、という観点が重要となる。特に本プロジェクトでは、提供者（社会人大学院生）と受け手（10 代後半の学生）との世代差に起因する価値判断の適合、読書体験が人間力形成に資するという仮説の不確実性、そして提供者側チーム内の参画のばらつきといった論点が顕在化した。これらは活動の「失敗」ではなく、社会人大学院生が市民としてコミュニティへ関与する際に不可避に立ち上がり得る論点であり、参画の質を高めるための改善課題として位置づけられる。

今後は、受け手の声を設計段階から取り込み、提供後の反応・利用実態を把握する軽量な仕組みを設けることで、単発の活動から反復可能な学習プロセスへと発展させることが求められる。また、社会人学生という属性を踏まえたチーム運営（役割・最低限コミットの合意、継承可能な手順の記録）を整備することで、活動の継続性と再現性を高めることができる。

社会人大学院生は、実務経験と学術的学びを併せ持つ点で、コミュニティとの接続において独自の立場にある。しかし、その強みは、適切な参画設計と説明責任が伴わなければ、外部者による一方向の支援に留まってしまう危うさも孕む。本プロジェクトの経験は、コミュニティに向けた「何かをする」こと自体よりも、当事者との関係の中で価値判断を調整し、学びを更新し続けることが CE の実践において中核であることを示唆している。

以上を踏まえ、本プロジェクトは、社会人大学院生が市民としてコミュニティに参画する入口として成立しつつ、参画の質を高めるための課題を明確化した実践として位置づけられる。今後は、活動の継承と反復を通じて、受け手側の声にもとづく改善を積み重ねることで、コミュニティへの貢献と学術的収穫の双方をより確かな形で接続していくことが期待される。

参考文献

宮副謙司（2023）「シビック・エンゲージメント・プロジェクト第 1 回講義資料」青山学院大学大学院国際マネジメント研究科 配布 2023 年 9 月 16 日

公益社団法人全国学校図書館協議会「学校図書館調査結果」参照 2026 年 5 月 23 日
＜ https://www.j-sla.or.jp/material/research/gakutotyousa.html ＞

田中真理子・篠崎文哉（2025）「中学校における探究的課題解決学習の環境改善―図書スペースの評価と学習への満足度の分析―」『JAILA JOURNAL』第 11 巻 , pp.48-62.

米澤誠（2008）「学習・教育基盤としての図書館」『カレントアウェアネス』NO.296, pp.23-28.

アントレプレナーシップ人材育成プログラム運営事務局「獲得が期待されるスキルや能力」文部科学省 参照 2026 年 2 月 10 日＜ https://entrepreneurship-education.mext.go.jp/student/ ＞

田路則子・藤村まこと・玉井由樹（2023）「大学生の起業意思形成モデルの検証」『組織科学』Vol.56 No.4, pp.81-94

LIHAO Wu, Suo Jiang, Xiaomin Wang, Linwei Yu, Yansu Wang and Hui Pan（2022）
「Entrepreneurship Education and Entrepreneurial Intentions of College Students: The Mediating Role of Entrepreneurial Self-Efficacy and the Moderating Role of Entrepreneurial Competition Experience」『Frontiers in Psychology』Vol.12, pp.1-9
秋吉恵（2025）「地域と連携した教育実践（Community Engagement Learning:CEL）に参加する学生と地域住民の相互作用を通じた社会関係資本の醸成プロセス」『立命館大学地域情報研究所 地域情報研究』第 14 号，pp.37-51.
杉本昌彦（2024）「米国私立研究大学におけるコミュニティ・エンゲージメントの組織的取組―ノートルダム大学を例に―」『東京大学大学院教育学研究科 大学経営政策研究』第 14 号，pp.73-90.
出原至道（2023）「新しい時代に求められる起業家教育―起業家精神を養う教育とは―」『多摩大学紀要 経営・情報研究』第 27 号，pp.21-26.
佐藤智子（2017）「CBL（Community-Based Learning）の意義についての一考察―地域や社会で学ぶことはなぜ有効なのか―」『東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要』第 3 号，pp.183-190.
文部科学省「高等専門学校（高専）について」参照 2026 年 5 月 31 日
＜ https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kousen/index.htm ＞
高等教育資格承認情報センター「基本情報・教育制度の概要」参照 2026 年 5 月 31 日
＜ https://www.nicjp.niad.ac.jp/japanese-system/about.html ＞
内閣府社会的インパクト評価検討ワーキング・グループ（2016）「社会的インパクト評価の推進に向けて―社会的課題解決に向けた社会的インパクト評価の 基本的概念と今後の対応策について―」
公益財団法人社会変革推進財団「インパクト測定・マネジメント」参照 2026 年 5 月 31 日
＜ https://www.siif.or.jp/approach/50550/ ＞

＜実践報告＞

キャリア理解を促す教育系カードゲームの実践研究
―遊びを通じた探索的学習と事業化の可能性―

塩田　航大・岸本　真愛美・熊本　あい・立川　雅一・中野　遍理
青山学院大学大学院 国際マネジメント研究科 修了生

A Practical Study of an Educational Card Game to Promote Career Understanding: Exploratory Learning Through Play and Its Potential for Social Implementation

SHIODA Kodai・KISHIMOTO Manami・Kumamoto Ai・TACHIKAWA Masakazu・NAKANO Henri
MBA, Graduate School of International Management, Aoyama Gakuin University

要旨

近年、職業環境の急速な変化を背景に、児童・生徒が主体的に進路を考える機会の重要性が高まっている一方、従来のキャリア教育は講義や職業紹介にとどまり、体験的学習の機会は限られてきた。本研究は、複数の職業を同時に扱いながら能力と資源の関係性を理解することを目的とした「キャリアカードゲーム」（名称「キャリアクエスト」）を設計し、その有効性を実践的に検討する。テストプレイを実施した結果、児童は短時間でルールを理解し、職業カードの条件から必要要素を逆算して戦略的に意思決定を行うとともに、複数職業を並行して選択する行動や、目標達成後も自発的にプレイを継続する姿が確認された。またゲームの面白さに対して肯定的反応も多く得られた。以上より、本ゲームは楽しさを媒介として児童のキャリア思考を自然に引き出し、導入段階のキャリア教育として有効に機能しうる可能性が示された。今後は、B2C・B2B・企業自治体連携を組み合わせた社会実装の可能性を視野に、対象・環境を拡張した継続的検証が課題である。

キーワード：キャリア教育、体験型学習、ゲーミフィケーション、児童教育、進路選択

Abstract

Against the backdrop of rapid changes in occupational environments, the importance of providing opportunities for children and students to consider their future careers proactively has been increasingly emphasized. Conventional career education, however, has largely relied on lectures and occupational introductions, and opportunities for experiential learning have remained limited. This study designed a "Career Card Game," aimed at enabling participants to understand the relationships among abilities and resources while simultaneously managing multiple professions, and examined its effectiveness through practical implementation. The results of a pilot test play showed that the children quickly understood the rules and engaged in strategic decision-making by reasoning backward from the conditions indicated on the occupation cards to identify what they needed to acquire next. They also exhibited behaviors such as selecting multiple professions concurrently and voluntarily continuing play even after reaching their initial goals. In addition, a variety of qualitative positive reactions were observed among the participants. These findings suggest the possibility that the game, by using enjoyment as a medium, naturally elicits career-related thinking in children and can function effectively as an introductory tool for career education. Going forward, in view of its potential development into a hybrid social implementation model combining B2C distribution, B2B educational adoption, and collaboration with corporations and local governments, continued validation in expanded age groups and settings remains a key task.

Key Words: Career Education, Experiential Learning, Gamification, Child Education, Career Choice

1　はじめに

本稿は、青山学院大学大学院国際マネジメント研究科2024年度後期の実践型授業「シビック・エンゲージメント・プロジェクト」（宮副謙司教授担当）にて実施した、児童・生徒のキャリア教育の支援を目的とする市民活動の実施結果を報告するものである。この取組みは、「子どもの教育」という共通の関心をもつ同講義の受講生6名（社会人学生4名を含む）によって企画・立案され、2024年10月から2025年1月にかけて「青山みらいSEEDプロジェクト」（以下、「本プロジェクト」）として実施された。

本プロジェクトの発案にあたっては、多様なバックグラウンドを有するメンバー間での経験共有が重要な契機となった。特に、メンバーが小学生時代に参加した「1/2成人式」において、10歳の段階で将来の職業選択に迷ったという経験は、チーム全体に共通する問題意識を形成した。このエピソードは、子どもが自身の興味や価値観に基づいて将来を考えるためには、早期から多様な職業に触れる機会が必要であるという認識をチーム内で共有するきっかけとなり、本プロジェクトの目的設定に寄与した。

こうした背景を踏まえ、本稿では、本プロジェクトの目的・意義および具体的な実施内容を説明し、活動の振り返りと今後の方針について述べる。

2　子どもたちを取り巻く外部環境の変化

近年、子どもたちの職業観については様々な調査が行われている。2024年に株式会社アイデムが中学1年生から3年生までの男女582名を対象に実施した「中学生の職業観に関する調査」[1]によれば、将来働くことについて「楽しみ」と感じる中学生は計81.6%、「自分ならできる」と思う者は計70.2%と、働くことに対する肯定的な見方が多数を占める一方、「大変そう」と感じる割合も計90.6%に上った（※1）。また、将来働くようになったら期待することとして「自分でお金をかせげる」が59.5%で最も多く、次いで「お金が好きに使える」44.7%、「自分の好きなことができる」44.3%、「夢の実現や目標の達成」30.8%が上位に挙がった。経済的自立と並んで、自己の関心や目標の実現を重視する傾向がうかがえる。

一方、子どもたちが日常的に認識している職業の幅は必ずしも広くない。2024年に学研教育総合研究所が小学1年生から6年生までの男女各学年100名ずつ計1,200名とその保護者を対象に実施した「小学生白書Web版 2024年11月調査」[2]によれば、小学生が将来つきたい職業として挙げた上位は、1位「パティシエ（ケーキ屋）」5.6%、2位「ネット配信者（ユーチューバー・インスタグラマーなど）」3.0%、3位タイで「保育士・幼稚園教諭」「警察官」「会社員」がそれぞれ2.8%となっている（※2）。これらはいずれも、家庭や学校、メディアを通じて日常的に接する機会の多い職業である。子どもたちの職業認識が、身近な大人の職業や可視化されやすい職業に偏りやすい構造であることが示唆される。

このような情報接触機会の偏りは、子どもたちの職業観の形成に影響を与え、結果として進路選択の幅を狭める要因となりうる。前述のアイデム調査に見られるように、中学生は働くことに対して肯定的な期待を抱きつつも「大変そう」といった不安を併せ持つ。こうした段階にある子どもたちが、多様な職業に早期に触れ、自身の興味や価値観に気づく機会を得ることは、将来の進路選択において重要な意味を持つといえる。

3　プロジェクトの目的と意義

本プロジェクトは、児童が社会に存在する多様な職業に早期に触れることを通じて、自身の興味・関心を認識し、将来の進路選択に関する視野を拡張する契機を提供することを目的とする。対象とする職業は、一般的に認知されている職種に加え、日常生活で接する機会の少ない専門職や、社会構造の変化に伴って新たに生じた職業を含むものとする。

また、本プロジェクトは、児童・生徒が従来認識していなかった職業に関する理解を深めるとともに、自身の関心や志向を再認識する機会を提供する点に特徴を有する。これにより、単なる職業知識の獲得にとどまらず、どのような活動に興味を持つのか、どのような価値観を志向するのかといった内面的側面に対する省察を促すことが可能となる。

さらに、将来の不確実性が高まる現代社会においては、あらかじめ規定された進路に従うのではなく、

主体的に意思決定を行う能力の育成が重要とされる。本プロジェクトは、児童が自身の興味・関心に基づいて進路を検討するための初期的な学習機会を提供する点において、キャリア教育の基盤形成に寄与するものである。

4　活動内容

(1) リサーチ

本プロジェクトの基盤形成にあたり、児童・生徒のキャリア教育の現状把握およびゲーム導入の可能性検討を目的として、リサーチを実施した。リサーチはヒアリングおよびミーティングを中心に構成し、2024 年 10 月から 2025 年 1 月にかけて複数の関係者を対象に実施した。

第一に、2024 年 10 月に青山学院大学において、学内公認団体で児童福祉ボランティア活動をおこなっている青山子ども会の渉外担当者に対するヒアリングを行った。同団体は地域の児童を対象にレクリエーションおよび学習イベントを実施しており、主な参加者は小学生である。ヒアリングの結果、児童は遊びを通じた活動に対して高い関心を示す一方で、職業理解に関する教育機会が十分ではないとの指摘が得られた。また、ゲーム形式の導入は児童の関与を高める可能性があるとの見解が示された。

次に、同年 10 月末に港区議会議員とオンラインミーティングを実施した。本ミーティングはテストプレイ実施場所の確保を主目的としていたが、教育行政の観点から、地域施設における教育プログラムの運用可能性に関する知見が得られた。

(2) 有識者からの知見の収集

リサーチの一環として、シビック・エンゲージメントに関する講演への参加を通じて、教育実践および研究の観点からの知見収集を行った。

2024 年 12 月 14 日に青山学院大学にて開催されたシビック･エンゲージメントセンター主催のセミナー（同センター秋元助教のコーディネートによる）に参加し、渋谷区立加計塚小学校副校長の森島恭仁子および筑波大学大学院博士前期課程の松本隼人らによる講演を聴講した。

講演内容からは、学校現場において職業教育を実施する際、教員の業務負担が制約要因となること、ならびに職業内容を児童にわかりやすく伝えることの困難性が指摘された。また、ゲーム形式の教材は児童の関与を高めるとともに、職業理解を補完する手法として活用可能であるとの示唆が得られた。さらに、教育プログラムの実施時期については、通常授業期間外に設定することが現場への適合性を高める可能性が示された。

これらの知見を踏まえ、本プロジェクトでは、教員の負担を考慮した実施時期の設定および、職業理解を支援するゲーム設計の検討を行った。また、講演内容を質的データとして整理し、「児童の関心喚起につながる設計」および「対話を通じたキャリア理解の促進」の二点を抽出した。

(3) カードゲーム開発

リサーチと講演の成果を基に、カードゲームの開発を進めた。ゲームのコンセプトは、職業カードを基に進化要素を組み込み、子どもたちが自身の興味を逆算的に考えるものである。ゲーム名を「キャリアクエスト」と定め、人生をテーマにしたカードゲームとして設計した。以下に実際のカードデザイン・ルール・ゲーム進行を示しながら、それぞれどのような意図で作成したかを併記している。

ゲームルール

基本情報

対象年齢:小学生、プレイヤー人数:2 ～ 4 人、プレイ時間:約 30 ～ 60 分、プレイ道具（1 人当たり）:カード 60 枚、プレイフィールド、サイコロ、コマ

概要

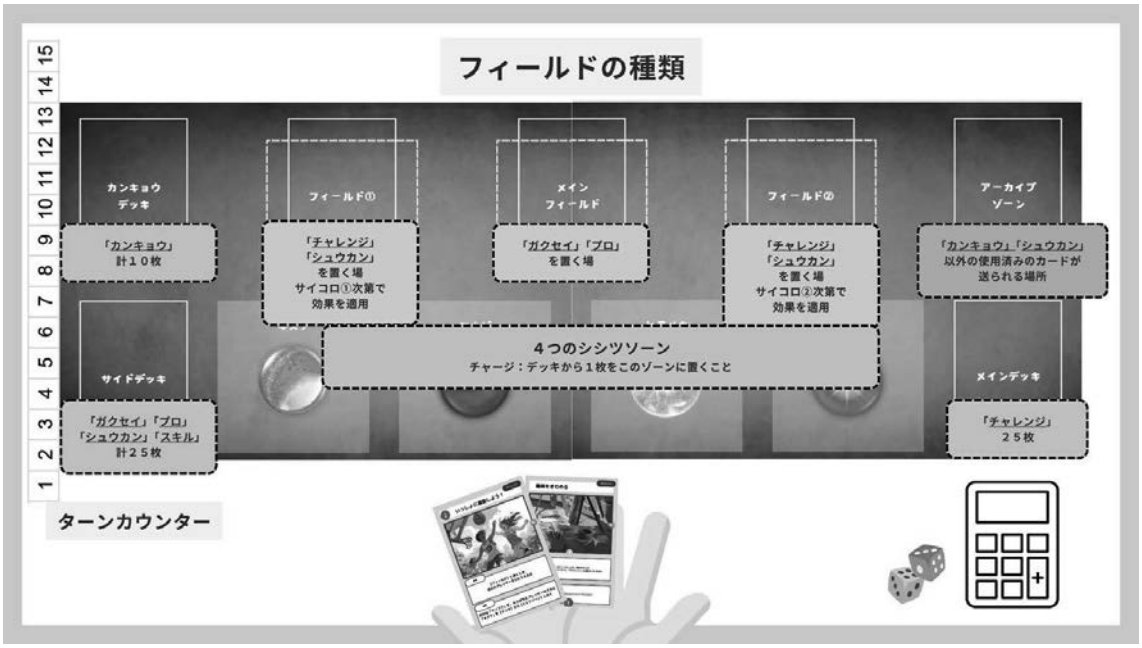
交互に 20 ターンのゲームをプレイして、カードをプレイするごとに得られる「アーカイブポイント」（得点）の合計点を競う。トレーディングカードゲームでは先に相手のポイントを減らすことが勝利条

件であることが一般的だが、本ゲームは人生を模したゲームのため、すべてのプレイヤーが同等のライフスパンを有する一方、ライフステージの進行速度はプレイヤーの選択によって異なるという構造を反映すべく、この勝利条件を設定した。また、手札枚数は経済的制約を、場の余力は時間的・体力的制約を意識して設計した。全体として１ターンにつき１年程度のスケールで進む中で、人生における選択や成長、外部環境の影響を学びながら、最終的に最も充実した人生を送ったプレイヤーが勝利するという設計である。１ターン内の詳細な流れは後項の「ゲーム進行」にて記載している。

ゲームの準備

各プレイヤーは、60 枚を各デッキに分類し裏向きでシャッフルし、フィールドの所定の位置に配置する（図 1）。次に、初期手札２枚をメインデッキからドローする。全員のメインフィールドにサイドデッキから「中学生」を置く。プレイヤーが中学１年生の段階から人生を体験していくデザインである。

図 1：フィールドの種類



カードの種類

①　ガクセイカード

シシツを貯めてプロカードに進化することを目指すカード（※ 3）。中学生、高校生（文理別）、専門学生、大学生（文理別）、大学院生（文理別）がある。

②　プロカード

職業を表すカード。所定の進化条件（ガクセイの種類＋所定シシツ枚数＋スキル）を満たすと進化できる。プロカードは年次を重ねるとベテランカードである EX に進化できる。なりたい職業から逆算して能力を貯めていくことを考えさせるような設計である。

③　スキルカード

シュウカンやチャレンジを通じて獲得する。資格が必要な職業への進化に必要な場合があるため、これを目指す場合にはより計画的な逆算思考が必要になる。

④　シュウカンカード

継続的な経験を表し、習慣形成を促す。特定のシシツを確実に貯められる反面、フィールドに残るため他のアクションの余地を減らす。自由度と確実性の判断を考えさせる設計である。

⑤　チャレンジカード

短期的な挑戦を表し、即時的な成長を促す。サイコロにより効果が適用されるか決定するため、行

動が必ず成長につながるわけではないというランダム要素が反映されている。ひとりで完結するソロチャレンジカード、他のプレイヤーを指定してプレイするペアアクションカードがあり、ペアアクションカードでは追加でシシツ「キズナ」が獲得できるが、相手は欲している効果ではない場合それを拒否することも可能である。他のプレイヤーがライバルであるとともにともに成長できる仲間でもあり、自己の利益と他者の利益の天秤を適切に見極める設計とした。

⑥　**カンキョウカード**

外部環境の変化を表し、ゲームにランダム性を加える。自分の意志ではどうにもならない状況を体験し、柔軟な対応力を養う。

全体として、既存のトレーディングカードゲーム（TCG）を参考に点数や干渉要素を追加し、楽しみながら学べる仕組みとした。

図 2：カードの種類



ゲーム進行

①　カンキョウフェイズ

ターンの始まり。予測不可能な社会情勢や外部要因の影響を表現した。

図３：ゲームの進め方（カンキョウフェイズ）



②　ジャンプフェイズ

年度始まりの進級・進学・就職・昇進を表現した。

図４：ゲームの進め方（ジャンプフェイズ）



③　ドローフェイズ

金銭的収入を表現した。基本はターンにつき１枚だが、職業やカード効果によってドローの枚数が増減することがあり、経済力の可変性を反映した。

図５：ゲームの進め方（ドローフェイズ）



④　メインフェイズ

この年度ではどのアクションを行うかを戦略的にプレイする。

図６：ゲームの進め方（メインフェイズ）



⑤　アクションフェイズ

プレイしたカードがサイコロによって成功と失敗に分かれることで、アクションが必ずしも結果に結びつかないことを表現した。

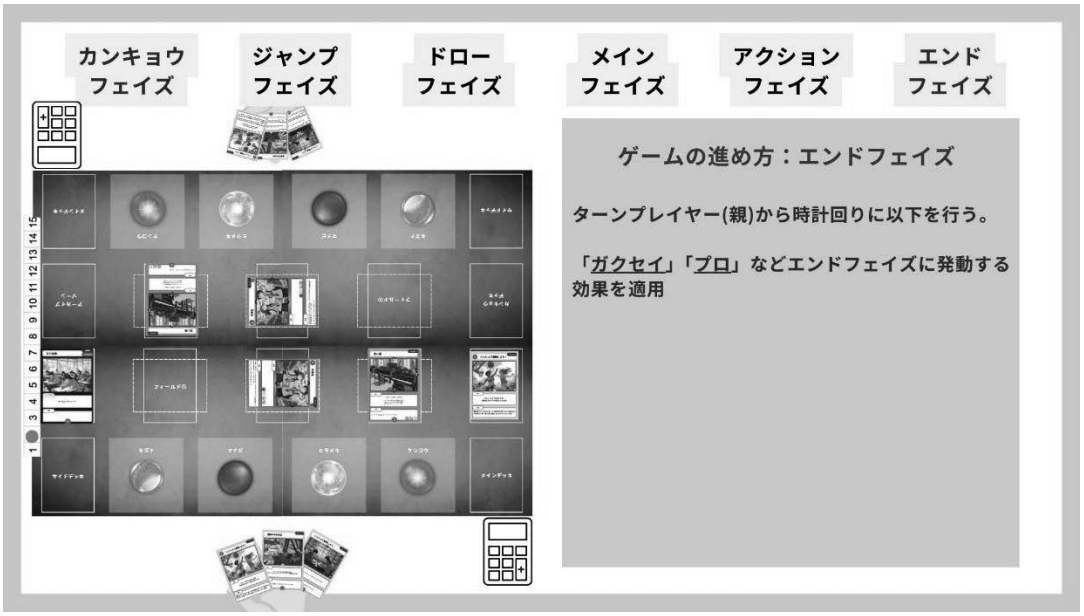
図７：ゲームの進め方（アクションフェイズ）



⑥　エンドフェイズ

すべての処理が終わり次のターンの戦略を立て直す。

図８：ゲームの進め方（エンドフェイズ）



(4) テストプレイ会場の検討

本プロジェクトにおいて「キャリアクエスト」の基本設計が確定した段階で、対象となる児童による試遊機会の確保に向けた検討を行った。本検討の目的は、実際のプレイ環境においてゲームの改良点を把握するとともに、職業選択に関する学習機会としての有効性を検証することである。

第一に、大学で実施されたシビック・エンゲージメント関連のセミナーを通じて、小学校教員との接点を得て、学校現場における試行的実施の可能性について検討した。その結果、教育委員会との調整および年間カリキュラムとの整合が必要であり、短期間での実施は困難であることが確認された。

次に、青山子ども会を通して、学童保育施設を対象とした試遊機会の確保を試みた。大学近隣の施設について調査を行った結果、対象年齢が未就学児を中心としており、本プロジェクトの対象である小学生とは適合しないことが明らかとなったため、当該施設での実施は見送ることとした。

(5) 芝浦アイランド児童高齢者交流プラザの訪問

テストプレイ実施に向けた協力依頼として、港区議会議員である榎本議員のオフィスを訪問し、本プロジェクトの趣旨説明および実施可能性に関する協議を行った。その結果、港区芝浦に所在する「芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ」を紹介され、同施設においてテストプレイの実施可能性を検討することとなった。

当該施設は公益財団法人東京 YMCA が管理運営しており、施設職員との協議を通じて、ゲーム内容および実施方法に関する説明を行った。その過程で、カードゲームは児童および職員双方にとって親和性の高い遊びであることが確認され、新規ゲームの導入に関しても一定の適合性が示された。また、ゲーム開始前に職業の種類や内容、必要条件を共有することが、円滑な進行に寄与するとの指摘が得られた。

さらに、施設職員の提案により、現場において試行的に対戦形式でのプレイを実施した。体験後には、児童が関心を示す可能性があるとの評価が得られたことから、日程調整を行い、正式なテストプレイを実施するに至った。

(6) テストプレイ

テストプレイは、2025 年 1 月 20 日 15 時 30 分から 17 時 00 分に、芝浦アイランド児童高齢者交流プラザにおいて実施した。チームからは実施者 3 名が試遊補助を行い、参加者は小学校 1 ～ 3 年生相当の児童 10 名程度であった。ゲームの説明後、参加児童の多くは短時間でルールを理解し、既存のトレーディングカードゲームに類似した操作に基づいてプレイを開始した。

ゲームに設定された職業については概ね理解が見られた一方で、各職業に必要とされるスキルや経験に関する条件については、実施者による補足説明を行いながら進行した。参加児童は、目標とする職業に必要なポイントの獲得や条件の達成を目指しながら意思決定を行う様子が観察された。また、プレイに直接参加していない周囲の児童も、進行中のゲームに関心を示し、カード選択や行動に関する発言を行うなど、間接的にゲームへ関与する行動が確認された。

写真 1・写真 2　テストプレイの様子





本テストプレイにおいては、従来の設計では単一の職業の達成を目指すルールであったにもかかわらず、複数の職業カードを同時に視野に入れてプレイする児童の姿が確認された。これは、ゲーム内において複数の職業を組み合わせるプレイが一定程度受容されていたことを示すものである。また、このような選択行動は、複数の役割や働き方を志向する意思決定の萌芽として解釈することができ、後述するカード改良の契機の一つとなった。

参加児童の多くはゲームの基本的なルールを理解したうえでプレイに取り組んでいたが、中学校・高等学校・大学における活動や専攻に関する要素については、理解に一定の困難が見られた。一方で、これらの要素を含むゲームを通じて、児童が将来の進路や学習内容について考える契機が提供された可能性が示された。

ゲーム終了後の聞き取りにおいては、得点要素および進化要素に対する関心が複数の児童において確認された。また、目標とする職業に到達した後も、さらなる進展を目指してプレイを継続する行動が観察された。さらに、「面白い」「再度参加したい」といった肯定的な発言が複数確認された。一方で、細部のルールについては初回のプレイのみで完全に理解することが困難である様子も見られた。今後、ルールブックやガイドの整備等を通じて理解支援を行うことで、より円滑なゲーム進行および参加機会の拡大につながる可能性がある。

5　実践の評価

(1) 実践から得られた知見

テストプレイでは事前の想定を上回り、児童が短時間でゲームルールを理解し、自発的にプレイを開始する様子が確認された。具体的には、職業カードに記載された必要条件を基に、自身に不足している要素を把握し、次の行動を計画するなど、条件の逆算に基づく意思決定が複数の場面で観察された。これらの行動は、主体的かつ動的な学習過程として位置づけることができる。

また、本実践を通じて、プロトタイプを早期に現場へ適用し、利用者の反応を基に改善を行うプロセスの有効性が確認された。開発段階において理念の提示を最小限にとどめ、ゲームとしての楽しさを重視した結果、児童の自発的な関与が促進され、得点要素や進化要素が活動への没入を高める要因として機能していることが明らかとなった。さらに、「既存のトレーディングカードゲームと同程度の難易度が適切であること」や、「対象年齢を中学生まで拡張する可能性」といった具体的な改善指針が得られた。

(2) 考察

本プロジェクトを通じて得られた主要な示唆の一つは、学習の導入段階において「楽しさ」を中心とした設計が有効に機能する可能性である。シビック・エンゲージメント活動においては、理念や目的を前面に提示することが、参加者に一定の心理的距離を生じさせる場合がある。一方で、本ゲームのように楽しさを媒介として学習要素を組み込んだ場合、児童は教育的意図を強く意識することなく、主体的に活動へ関与する傾向が確認された。特に、「どのような条件を満たせば職業に到達できるか」を自発的に検討する行動は、キャリア選択に関する思考過程を内在化する契機として機能していると考えられる。

さらに、本ゲームは児童向け教材としての機能に加え、大人と児童の対話を媒介するツールとしての可能性も示した。シビック・エンゲージメントの観点からは、地域社会における世代間の相互理解を促進する仕組みの構築が重要とされる。本実践においては、ゲームを共有することで、児童が職業に対する関心を表明し、大人が自身の経験や価値観を言語化する契機が生じる可能性が示唆された。

このような特性から、本ゲームは学校教育の枠組みに限定されず、地域コミュニティ施設や学童保育等における活用を通じて、その機能が拡張される可能性を有する。ゲームを介した対話は、参加者間の相互理解を促進し、学習内容を社会的文脈の中で再構成するプロセスを生み出す点で意義がある。以上より、本ゲームはキャリア教育における初期段階の関与を促進するとともに、対話を通じた学習を支援する補助的手法として位置づけることができる。ただし、本研究は限定的な実践に基づくものであり、今後は対象や実施環境を拡張した検証を通じて、その教育的効果および適用可能性を精査する必要がある。

6　その後の活動

(1) 協業の可能性

キャリア支援事業を行うNPO法人xTReeE（クロスツリー）との意見交換を通じて、既存のキャリア支援手法との比較検討を行った。同団体の活動は、キャリアコンサルタントによるヒアリングやセミナー形式を中心としており、専門家による対話や講義は参加者にとって有益な学習機会を提供している。

一方で、参加者が十分に自己を開示し、主体的に言語化する状態に至るまでには、一定の心理的障壁が存在する可能性がある。特に中高生を対象とした探究活動やキャリア教育の場においては、将来像の不確実性や正解志向が対話の深化を阻害する要因となり得る。これに対して、本研究で開発したキャリアカードゲームは、既存のヒアリングやセミナーを補完する手法として位置づけることができる。本ゲームは、職業を能力や資質の構造として再構成し、対話を通じて理解を深める設計となっているが、その特徴はゲームという媒介を用いる点にある。

ゲームを介在させることで、参加者は自己の将来や価値観を直接的に表明するのではなく、カードという第三項を通じて間接的に思考を表現することが可能となる。この構造は、心理的安全性の向上および自然な対話の生成に寄与する可能性を有する。

以上の観点から、本カードゲームはキャリアコンサルタントの役割を代替するものではなく、対話を促進する補助的手法として機能する可能性が示唆される。特に、セミナーやヒアリングの前段階における導入的活動として活用することで、参加者の関心喚起および自己理解の促進に寄与することが期待される。ただし、本構想は現時点では仮説的段階にとどまっており、今後は実践を通じて具体的な適用場面および効果を検証する必要がある。

(2) ゲーム改良

また、本検討過程において、キャリアカードゲームの設計に対して複数の改良を加えた。従来は単一の職業を選択し、自己の能力を育成することを中心とした構造であったが、今回の設計変更では、複数の職業を同時に扱い、それらの関係性を比較・検討する形式へと再構成した。具体的には、参加者が一つの職業を選択するのではなく、複数の職業を並列的に扱いながら、それぞれに求められる資質や行動特性を比較する構造を採用した。この変更により、参加者は単一の進路選択に焦点を当てるのではなく、職業間の共通点や差異、さらには複数の領域に共通して求められる資質について検討することが可能となる。このような構造は、自己理解を直接的に求めるのではなく、まず職業構造を俯瞰的に把握するプロセスを経由する点に特徴がある。この過程は、参加者に対する心理的負担の軽減に寄与する可能性を有するとともに、職業間の関係性を分析する活動そのものが探究的学習の契機となると考えられる。以上より、本設計変更は、キャリア選択支援にとどまらず、思考過程の可視化および構造的理解を促す学習ツールとしての機能を強化するものであると位置づけられる。

7　社会実装モデルおよび持続可能性の検討

(1) 一般ユーザー向け展開の可能性

第一に、個人利用を想定した一般ユーザー向け展開である。本ゲームは、家庭や友人同士でのプレイを通じて、日常的な対話の中にキャリア理解の機会を組み込むことを意図している。スターターセット（初期デッキおよびルールブックを含む）を基盤とし、拡張パックによって新たな職業やスキル概念を追加する形式は、継続的な学習機会の創出につながる。この構造は、学習を一回限りの体験で終わらせるのではなく、反復的かつ発展的な探索活動へと拡張する設計である。さらに、限定カードやオンライン販売の導入は、ゲームとしての魅力を維持しながら、継続的な利用を促す仕組みとして機能し得る。

(2) 企業・自治体との連携モデル

次に、企業および自治体との協働による展開可能性について検討する。企業においては、CSR（企業の社会的責任）活動の一環として若年層向けキャリア教育を実施する事例が増加している。本カードゲームを活用することで、企業の業務内容や職業構造を可視化し、ゲーム内カードとして具体化することが可能となる。これにより、抽象的な「企業理解」ではなく、参加者が自らの興味・資質との関連性を探

索する機会を提供できる。また、自治体との連携においては、地域産業や伝統工芸をカード化する「地域版キャリアカード」の開発が考えられる。これは、地元企業や産業構造への理解を促進する教材として機能し、地域への愛着形成や地元就業意識の醸成に寄与する可能性がある。このようなモデルは、キャリア教育と地域振興を接続する新たなアプローチとして位置づけられる。

(3) 教育機関向け導入モデル

教育機関に対しては、授業導入パッケージとしての提供が想定される。具体的には、カード教材に加え、授業用ワークブックおよび指導マニュアルを組み合わせた統合型教材セットの開発である。さらに、出張授業やワークショップ形式での実践、ならびに教員・保護者向け研修を通じて、本ゲームの教育的意義や活用方法を共有することが可能である。これにより、単発的なイベント教材ではなく、学校教育の文脈に組み込まれた継続的実践モデルへの発展が期待される。

(4) コミュニティ形成と継続的学習環境

本ゲームの特徴は、プレイ体験そのものが対話を生み出す点にある。そのため、オンライン・オフラインを含むコミュニティ形成は、実践効果の持続において重要である。定期的な大会やイベントの開催、オンラインコミュニティでのキャリア対話の促進は、単なる教材利用を超えた「学習共同体」の形成へとつながる可能性を持つ。

(5) 持続可能な運営モデルの検討

教育実践を継続的に展開するためには、運営面での持続可能性も重要である。本ゲームは、「商品販売（B2C）」「教育機関向け導入（B2B）」「企業・自治体連携プログラム」といった複数の経路を持つハイブリッド型モデルを構想している。この多層的構造は、特定の収益源に依存しない安定的運営を可能にするとともに、教育的価値の社会的拡張を支える基盤となり得る。もっとも、本研究段階では事業性の実証は行っておらず、今後は実装事例の蓄積と効果測定を通じて、その妥当性を検証する必要がある。

(6) 事業化の評価軸と判断

本節で述べた社会実装の各モデルについては、以下3つの評価軸に基づいて事業化の可能性を検討した。第一に「教育効果」である。テストプレイにおいて、子どもたちはルールを短時間で理解し、職業カードから必要条件を逆算する戦略的思考や、複数職業の同時選択といった行動が観察された。また「面白い」「またやりたい」という自発的な反応が多く得られ、遊びを通じたキャリア学習の有効性が裏付けられた。第二に「実施可能性」である。児童施設でのテストプレイでは、運営スタッフの負担を最小限に抑えながら実施でき、小学校低学年からでもプレイ可能であったことから、学童施設・学校・企業CSR・自治体イベントなど多様な現場への適合性が確認された。第三に「ビジネス可能性」である。B2C（スターターセット＋拡張パック）、B2B（教育機関向け授業導入パッケージ）、および企業・自治体連携プログラムの3経路を併走させるハイブリッド型モデルは、特定収益源への依存を回避しつつ、教材パッケージ化と研修プログラム化による継続的収益を見込める構造である。加えて、NPO法人xTReeEとの協議を通じて、既存のキャリア支援事業と補完的に機能する可能性も確認された。以上3軸の評価を踏まえ、本プロジェクトは現段階では事業性の実証に至っていないものの、社会実装に向けた妥当性を有していると判断した。今後は実装事例の蓄積と定量的な効果測定を通じて、各軸における成立性を検証していくことが課題である。

謝辞

本プロジェクトの実施および本稿の執筆にあたり、指導教員として終始貴重なご助言を賜った青山学院大学大学院国際マネジメント研究科の宮副謙司教授に、心より感謝申し上げる。また、港区議会の榎本あゆみ議員、芝浦アイランド児童高齢者交流プラザの職員の方々、渋谷区立加計塚小学校の森島恭仁子副校長、筑波大学大学院の松本隼人氏には多大なご協力を賜った。ここに深く感謝の意を表する。

注

※1 本調査は、全国の中学 1 ～ 3 年生 582 名（1 年生 176 名、2 年生 201 名、3 年生 205 名）を対象としたスマートフォン調査で、2024 年 5 月 10 日～ 15 日に実施された。有効回答数は 582 件である。

※2 本調査は、ネットエイジア株式会社のインターネットモニター会員を母集団とし、小学 1 ～ 6 年生の子どもを持つ 20 ～ 59 歳の保護者を対象に実施されたインターネット調査である。調査期間は 2024 年 11 月 6 日から 14 日までの 9 日間であり、保護者の付き添いのもとで子ども本人が回答した。サンプルは各学年男女 100 名ずつの均等割付により構成され、有効回答数は計 1,200 件である。

※3 本カードゲームにおいては、煩雑さを避けるため、「ガクセイ」とは児童・生徒・学生のことを全て指す用語として使用している。

参考文献

[1] アイデム人と仕事研究所（2024）『中学生の職業観に関する調査』株式会社アイデム, https://apj.aidem.co.jp/upload/chousa_data_pdf/513/aidem_career_2024.pdf（最終閲覧日：2026 年 2 月 28 日）

[2] 学研教育総合研究所（2024）『小学生白書 Web 版 2024 年 11 月調査』学研教育総合研究所, https://www.gakken.jp/kyouikusouken/whitepaper/202411/（最終閲覧日：2026 年 2 月 28 日）

＜実践報告＞

市民協働プロジェクト「藤野プロジェクト」実践報告
―立ち上げから定着までの軌跡―

三神　憲一
青山学院大学　シビックエンゲージメントセンター（コミュニティ人間科学部分属）

The Practice Report on the Civic Collaboration Project “Fujino Project”: From Its Initiation to Establishment

MIKAMI Kenichi
Civic Engagement Center, Aoyama Gakuin University
（affiliated with the College of Community Studies）

キーワード：地域連携、市民協働、ボランティア、中山間地域

1　はじめに

(1) シビックエンゲージメントセンターにおける市民協働プロジェクトの位置づけ

青山学院大学（以下「本学」とする）における地域連携および社会貢献活動の支援体制は、2022 年 4 月のシビックエンゲージメントセンター（以下「CEC」とする）の開設によって、従来の学生および教職員のボランティア活動の支援という枠組みを超え、大学が地域社会の一員として、様々な団体との関わり合いの中で地域の課題解決に取り組む活動、すなわち「市民協働」による事業を展開していくこととなった。「市民協働プロジェクト」は、その中核をなす取組であり、特定の地域やテーマに対して学生が継続的に関わることで、地域住民との信頼関係を醸成し、大学と地域が相互に連携しながら、地域社会に根ざした活動を継続的に展開していくものである。本学相模原キャンパスの CEC において、2021 年度から 2024 年度まで実施された「相武台団地活性化プロジェクト」については三神・水谷（2023:37-43）が地域課題の解決と学生の主体的な関わりを目指すプロジェクトの事例としてまとめており、また、相模原市中央区をフィールドに展開されている「相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト」については、水谷（2024:37-52,2025:13-25）がその立ち上げから現在の活動に至る過程を詳細に報告している。本稿で報告する「藤野プロジェクト」（以下「本プロジェクト」とする）は、これらの市民協働プロジェクトと同じ位置づけであり、神奈川県相模原市緑区（旧藤野町）をフィールドに取り組んできたものである。構想は 2020 年度に始まり、本稿は 2025 年 2 月時点までの約 5 年間にわたる活動経過を整理したものである。

(2) 本稿の目的と構成

本プロジェクトは立ち上げ以降、「里山体験ツアー」や「しのばら園芸市」への参画を軸として着実な歩みを続けてきた。当初は試行的な活動から始まった本プロジェクトであるが、年度を重ねるごとに活動の柱が明確化し、また地域の受け入れ団体との信頼関係も形成され、現在に至っている。特に 2025 年度にはプロジェクトの学生メンバーが 13 名となり、初めて二桁になったことで班体制を導入する等、運営体制の面でも大きな転換期を迎えた。本稿の目的は、こうした本プロジェクトの活動の軌跡を整理し、市民協働プロジェクトとしての立ち上げから定着までのプロセスを提示することにある。あわせて、活動の展開に伴う運営体制の変化を振り返り、大学における地域連携型のボランティア活動支援の企画・運営に資する実践的な知見とその課題を明らかにしたい。本稿の構成は、第 2 章でプロジェクトの概要を述べ、第 3 章から第 5 章にかけて活動の変遷を時系列で整理する。第 6 章では本プロジェクトの実践

から得られた知見および課題を示す。

2　プロジェクトの概要

(1) 藤野の基本情報

藤野は、神奈川県相模原市緑区の北西部に位置する中山間地域の名称であり、2007年の市町村合併以前は藤野町として存在していた。現在も地名としてはないものの、この地域一体を「藤野」と呼んでいるのはこのためである。山林や農地に囲まれた自然豊かな環境を有しているため「都心に一番近い里山」と称されている。また、戦後の芸術家の移住を契機に文化的活動が活発化し、現在も地域内で多様な芸術・市民活動が展開されており、「芸術のまち」と称されることもある。その他、パーマカルチャーやトランジションタウンの理念に基づく持続可能な地域づくりの実践の地としても知られている[(1)]。このように豊かな自然環境と文化的活動が共存する地域という特性をもち、都市近郊に位置しながらも里山環境とユニークなコミュニティが存在している点は、本学相模原キャンパスからアクセス可能なフィールドとして協働を実践するうえで重要な条件を備えているといえる。

(2) プロジェクトの目的・基本方針

本プロジェクトの目的は、学生が藤野地域に足を運び、自然環境や地域文化に触れる体験を通して、足元の地域である相模原市の魅力を知るとともに、主体的な地域貢献活動へと展開する機会を提供することにある。こうした目的のもと、単発的なボランティア参加にとどまらず、継続的な関与を通じて受け入れ団体および地域住民との信頼関係を構築することを基本方針としている。加えて、活動を重ねる中で、市民協働の実践的経験を蓄積し、学生が地域活動の担い手として成長するとともに、地域内の多様な市民活動との接点を広げ、主体的に活動領域を拡張していくことも視野に入れた構成としている。

(3) 活動地域、受け入れ協力団体、活動期間

活動地域は、藤野エリア内の和田地区および篠原地区[(2)]としている。

「里山体験ツアー」は藤野北部に位置する和田地区において実施しており、自然とともに暮らす農的営みに触れ、伝統料理をつくる体験型活動として継続的に行われてきた。本活動の受け入れは、一般社団法人藤野観光協会（以下、藤野観光協会とする）が担っている。

「しのばら園芸市」は篠原地区で開催される地域イベントであり、本プロジェクトではこの準備および当日運営に継続的に参画している。受け入れは、しのばら園芸市実行委員会が担っており、地域住民との協働を通じて活動が展開されてきた。

活動は原則として単年度ごとに運営しているが、例年4月に開催される「しのばら園芸市」への参画を軸に進めている。このイベントの運営を活動の集大成と位置づけているため、実質的な活動期間は「里山体験ツアー」を実施する7月から翌年4月までの約10か月間となる。

3　プロジェクト立ち上げ期（2020 ～ 2021年度）

(1) 立ち上げの背景

本プロジェクトの立ち上げは、当時進められていたセンター組織の改組[(3)]を背景に、新たなセンターの方向性を具体化する試みを模索する中で構想されたものである。従来の単発的支援にとどまらず、特定地域に継続的に関わる実践モデルの形成を検討する過程で立ち上がった取り組みであった。また、コロナ禍によって制限されていた対面型ボランティア活動が徐々に再開へ向かう状況を見据えながら、段階的に具体化が図られていった。

藤野は豊かな自然環境や文化資源を有していることに加え、地域の課題として関係人口の創出（地域拠点の整備）に関する議論が進んでいたことや、本学キャンパスからアクセスが遠いため、同じ相模原市ではあるが、学生が自ら足を運ぶことが少ない状況であったことから、センター事業としての協働の可能性を探るフィールドとして選定された。

(2) 初期の活動内容

2020年度は、プロジェクトの構想形成および地域との関係構築を進めた準備段階にあたる。相模原市が実施した「(仮称)テレワークセンター空間等検討ミーティング」[(4)]にセンター長およびコーディネーターが参加し、藤野地域における拠点形成や地域資源活用に関する議論に接した。ミーティングに参加することで行政・地域関係者との接点が生まれ、藤野における人脈形成の第一歩となったことの意義は小さくない。また地域の現状や構想段階の政策議論を把握することで、今後の協働の方向性を探る基盤が築かれた。

2021年度は、具体的活動の実装を開始した時期である。学内では藤野地域をテーマにした「ボラカフェ」を2回実施し、藤野地域の魅力やプロジェクトの構想について学生と共有する機会を設けた（図1)。こうした企画は、学生のうち活動関心層の掘り起こしを図るとともに、本プロジェクトの活動の意義を整理する場ともなった。

図1：ボラカフェのポスター



出典：ボランティアセンター相模原キャンパス（2021年度）作成

また、学内における情報発信強化の一環として、相模原市内および周辺地域に設置され始めていたカプセルトイ「地産ガチャ」を購買会に設置した。藤野の地域資源をカプセルトイという形式で紹介する試みは、日常的な空間に地域情報を組み込む新しいアプローチであった。併せて、ボランティアセンター内にマガジンラックおよびショーケースを設置し、藤野関連資料や地域特産品等を展示した。これにより、プロジェクトの認知度向上と継続的な情報提供の基盤が整備された（図2)。

図 2：学内に設置した関連物品



左：購買会に設置した地産ガチャ
右：ボランティアセンターに設置したショーケース
写真：筆者撮影

さらに、藤野観光協会が実施している「藤野里山体験」[5] を、本学向けの企画「里山体験ツアー」として実施し、学生が現地を訪問する機会を創出した。自然環境や地域の営みに直接触れる体験は、今後の継続的関与へと学生の関心をつなげる重要な場となった。

(3) 試行的取組としての特徴

立ち上げ期の特徴は、「関係構築」「可視化」「実験的実装」を段階的に進めた点にあるといえる。初年度は人的ネットワーク形成と情報収集に重点を置き、次年度には小規模ながら具体的取組を複数展開した。特に、「地産ガチャ」や展示スペース整備といった試みは、従来型のボランティア募集とは異なり、キャンパス内に地域との接点を組み込む実験的アプローチであった。この時期に形成された関係性と活動基盤は、以後の活動の定着・発展期へとつながる重要な礎となった。

4　活動の展開と定着（2022 ～ 2024 年度）

(1) 活動の柱の形成－協働型プロジェクトへの展開－

2022 年度以降は試行段階を経て、継続的に取り組む活動の柱を形成していった。第一の柱は「里山体験ツアー」の継続的実施である。2021 年度に実施した本ツアーは、藤野地域の自然環境や地域資源を体験する機会として位置づけられた。以後も継続的に開催することで、藤野地域への理解を深める導入的プログラムとして機能し、初めて参加する学生が地域と接点を持つ契機となった。

第二の柱は、「しのばら園芸市」開催に向けた継続的な活動への参画である。この契機となったのは、「地産ガチャ」の設置を通じて関係を築いていた地域関係者からの相談であった。これを受け、篠原地区での開催が構想されていた新たな地域活性化イベントに、本学の学生が初期段階から参画することとなった。具体的には、月 1 回程の頻度 [6] で篠原地区を訪れ、会場予定地に自生した竹の伐採や斜面への階段設置など、敷地内動線の整備を行いながら、実行委員や地域住民からイベントの趣旨や里山の維持・活用に関する考え方について学ぶ活動であった。

学生は既に整えられた枠組みに参加するのではなく、イベントの実現に向けた過程そのものに関与しながら、地域理解を深め、その中で自らの関わり方を模索していった点に本取組みの特徴がある。また構想段階から複数年度にわたり関わるなかで、学生の役割は当初の運営補助にとどまらず、準備段階における実行委員との意見交換を経て、当日の学生ならではの役割の模索へと行動の選択肢が広がっていった。

受け入れ団体側においては、活動を重ねる過程で、次第に学生を一時的な支援者としてではなく、継続的に関わる協働相手として捉える認識が共有されるようになった。学生の役割や関与のあり方につい

て対話を重ねることで、活動継続のための基盤が形成されていったといえる。さらには、新たに始まった地域行事に当初から学生が継続的に関与してきたこと自体が、地域側に一定の印象を残し、その積み重ねが学生と地域との信頼関係の醸成につながっていった。

このように、本プロジェクトが「里山体験ツアー」と「しのばら園芸市」という二つの活動軸によって展開されたことにより、「体験を通じた導入」と「地域行事への協働・継続要素をもつ活動」という異なる性格を持ちながら、本プロジェクトの骨格を成すものとして次第に定着していった（図 3）。

図 3：活動時の集合写真



左：里山体験ツアーにおける自生植物の解説の様子（2021 年度）
右：「しのばら園芸市」開催に向けて斜面に階段を設置した（2022 年度）
写真：筆者撮影

(2) 年度を越えた活動継続の実際－運営体制の模索・確立－

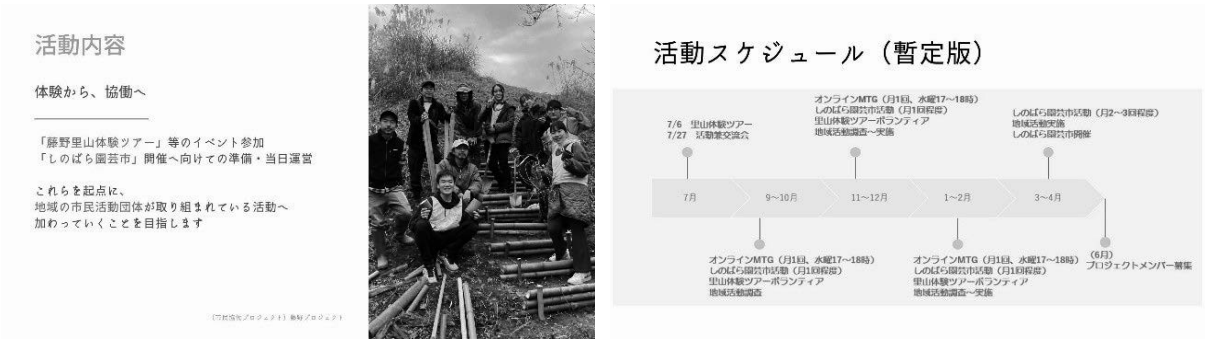
活動の柱が明確化する一方で、学生の参加体制については試行錯誤が続いた。2022 年度から 2023 年度にかけては、学生スタッフが活動の中心的役割を担い、メンバーの募集方法や関与のあり方を模索する段階にあった。プロジェクトとして継続性を備えた活動が形づくられる時期であったが、すべての参加学生が長期的な関与を希望しているわけではなかったため [(7)]、活動日ごとに参加者を募る形式で運営を行った。

この方式は参加機会を拡大する点では有効であったが、活動内容や経験の蓄積が継承されにくいという課題が顕在化した。とりわけ、「しのばら園芸市」は受け入れ団体側との継続的な関係性を前提とする活動であるため、参加する学生にその都度の活動概要の説明や役割調整が必要となり、受け入れ団体・コーディネーターの双方に一定の運営負担が生じた。こうした状況を踏まえ、体制の再構築が課題として認識されるようになった。

2023 年度には、年間の活動予定をあらかじめ提示した上でメンバーを募集する方法を試行した。また、里山体験ツアーを導入的プログラムとして位置づけ、参加者に対して継続活動への参加を案内するなど、活動間の接続を意識した運営を行った。こうした試行を経て、2024 年度には年度当初にメンバー募集を行い、年間を通じて活動する体制を基本とする方式が確立された。募集時点で活動内容・年間スケジュール等の概要を明示し、参加意思を確認することで、継続的な関与を前提とした運営を掲げた（図 4）。この結果、活動準備や当日の作業において一定の規則性をもって取り組むことに繋がった。

以上のように、この期間は学生参加の枠組みを段階的に整理し、年度単位での活動体制を確立する過程であったと位置づけられる。

図 4：オンライン説明会の資料



出典：筆者作成（シビックエンゲージメントセンター相模原キャンパス資料）

(3) 継続的関与を支える基盤の形成

2022 年度から 2024 年度にかけては、プロジェクトの活動内容と運営体制の双方において整理と定着を進めた。活動面では、「里山体験ツアー」を導入的プログラムとし、「しのばら園芸市」への継続的関与を主要な実践の場とする構成が明確化した。とりわけ、地域行事の構想段階から関与し、複数年度にわたり本行事への参加を継続したことは、学生と地域との関係を安定的に維持する基盤となった。

また運営面では、学生募集方法および参加形態の整理を段階的に進め、2024 年度には年度単位での参加体制を基本とする方式を確立した。これにより、学生の活動の継続性が定着し、地域との協働を持続するための組織的枠組みが整えられた。

5　運営体制の変化とプロジェクトの定着（2025 年度）

(1) 参加学生数の増加と班体制の導入

2025 年度は、本プロジェクトの運営体制において明確な転換点となった年度である。継続メンバーに加えて新規参加者を迎え、計 13 名による活動体制が形成された。これは本プロジェクトとして初めての二桁体制であり、従来の少人数による運営とは異なる組織的対応へと移り変わる契機となった。活動は 3 つの班に分けてすすめる体制を導入し、①自由企画班、②ツアー企画班、③学内広報班を設け、メンバーはいずれかの班に所属することとした。また各班には班長を配置し、班内での役割分担と進行管理を担う仕組みとした。班編成により、活動領域を明確化するとともに、学生が主体的に企画・実行に関与できる構造を整備した。

自由企画班は、藤野をフィールドとした新規企画の立案を担当し、2025 年度においては地域資源を活用した商品開発等の検討を進めた。ツアー企画班は、藤野地域における既存イベントや自然体験を組み合わせた 1day プログラムの企画や、一般学生の参加も想定した構成を検討した。学内広報班は Instagram を活用した情報発信を行い、プロジェクトの認知度向上と次年度参加者の確保を視野に入れた活動を行った。

あわせて、活動開始時には改めてボランティアの概念を確認する機会を設け、自発性・社会性・無償性といった基本的概念を共有し、地域との関わりが単なる作業の参加にとどまらないことを明確にした上で、各班の活動に取り組むことを確認した。

(2) 運営方法および受け入れ体制の変化

運営面では、月 1 回のオンラインミーティングを定例化し、このミーティングへの参加をプロジェクト参加の条件とした点が特徴といえる。初回活動日のミーティングを除き、定例ミーティングは後期が始まった 9 月から 12 月まで計 4 回実施した。内容は①各班の進捗報告、②次回までのタスク整理、③その他共有事項等とし、活動状況を全体で共有することで情報の分断を防ぎ、またプロジェクト全体としての方向性を確認する機会とした。受け入れ団体関係者にも参加してもらい、地域側の動向やイベント出展団体との調整を含めた進捗について情報共有を行う場としても機能した。ミーティングの定例化により、学生側と地域側のニーズをすり合わせながら活動を進める体制が整備されたといえる。

一方で、2025年度には受け入れ団体側の運営体制に変更が生じた。プロジェクトのコア活動として位置づけてきた「しのばら園芸市」は、イベントのコンセプトを刷新し、自然との共生をテーマに、篠原の環境を生かした滞在型マルシェ「しのばらグリーンデイズ」へと再編された。これに伴い、従来イベント開催に向けて実施してきた会場の整備作業は、篠原地区で新たに始まったワークショップ「あおしの」[8]の準備と連動して行われることとなった。学生の受け入れ体制については、当面はしのばら園芸市実行委員会が担うこととなったが、今後の活動展開については柔軟な対応が求められる状況にある。こうした変化を受け、プロジェクトとしても特定の枠組みに固定的に依拠するのではなく、地域側の状況に応じて関与のあり方を調整していく必要があることが明らかとなった。

このように2025年度は、参加学生数の増加に伴う内部体制の整備と、地域側の体制変化への対応という二つの課題が重なる年度であった。班体制の導入や定例ミーティングの実施は内部運営の安定化を図る取り組みであり、受け入れ団体の変化への対応は外部環境との関係により活動内容を再調整する取り組みであった。総じて本年度は規模拡大に対応した組織的枠組みを整えるとともに、地域との関係を維持しながら活動の柔軟性を確保することが求められた時期であった。活動の定着とは、単に継続を担保することではなく、規模や環境の変化に応じて運営方法を更新し得る体制を持つことであり、本年度の取り組みはこの段階へと移行したことを示すものであった。

6　おわりに

(1) 実践を通じて得られた知見と今後の展望

本報告で扱った2020年度から2025年度までの軌跡は、本プロジェクトが構想段階から立ち上げ期、展開期を経て、組織的定着へと移行していく過程であり、実践の蓄積を通じて、いくつかの運営上の知見が得られた。

第一に、プロジェクトの継続を支える人材確保の重要性である。学生主体のプロジェクトである以上、卒業等に伴うメンバーの入れ替わりは不可避である。そのため、年度当初の募集機会を活用しつつ、多様な媒体を通じて活動を周知し、また班体制の導入などの仕組みによって役割を分散させることで、メンバーの交代に対応しながら活動の継続性を確保する必要がある。

第二に、体制整備と活動の柔軟性の両立である。少人数体制の段階では柔軟な意思決定が可能であったが、規模の拡大に伴い、役割分担の明確化や進行管理の仕組みを整備する段階へ移行し、組織化が進んだことで、コーディネーターが個々の学生と対話を重ね、活動への思いや参加の背景に触れる機会が相対的に減少する側面もみられた。状況が見えにくくなることで、一部の学生に実質的な役割が集中することのないような運営設計とあわせて、学生の個別の思いにも応える仕組みの検討も課題として残る。さらに、受け入れ団体側の体制変更が示すように、地域の状況は固定的ではない。したがって活動を一定の形に固定化するのではなく、地域側の変化に応じて協働のあり方を調整していく柔軟性を維持することが、継続的運営の前提となる。

以上を踏まえると、今後の本プロジェクトにおいて重視すべきは、活動内容の拡充そのものよりも、継続を可能にする仕組みの深化にあるといえる。人材確保や体制整備といった基盤を段階的に強化していくことが、今後の活動を支えるうえでの課題となる。

(2) 市民協働プロジェクトとしての意義

本プロジェクトは、「里山体験ツアー」を通じた導入的な交流と「しのばら園芸市」を中心とする継続的な協働という二層構造を特徴とし、単発的なボランティア活動とは異なる実践の枠組みを形成してきた。学生にとっては、地域との関係が一過性の経験にとどまらず、継続的に関わる実践の場となっている。また、地域にとっても、学生との協働を重ねるなかで新たな関係性が築かれてきた点に一定の意義を見いだすことができよう。さらに、地域行事への参加にとどまらず、構想段階から地域とともに取り組んできた点にも特色がある。完成された枠組みに加わるのではなく、地域と協働しながら活動のあり方を模索してきたことは、本プロジェクトの特徴の一つといえる。

市民協働プロジェクトとしての意義は、成果の有無のみで測られるものではない。地域と大学が相互に関わり続ける関係性を維持し、その過程において対話と合意を重ねながら活動のあり方を更新していく点に特質があるといえよう。本プロジェクトは、こうした関係性を支える仕組みを段階的に整備して

きた点において、大学における地域連携型の実践の一例として捉えることができる。活動はなお進行中であり、今後も地域との対話を重ねながら、継続と発展に対応した運営のあり方を探究していく。

謝辞

本プロジェクトの実施にあたり、多くの関係機関および藤野地域の皆様より多大なるご協力を賜りました。とりわけ、藤野観光協会の皆様には、里山体験ツアーの実施をはじめ、地域資源に関する情報提供や活動の模索段階での助言など、継続的なご支援を賜りました。しのばら園芸市実行委員会の皆様には、イベントの構想段階から実施に至るまで学生の活動を温かく受け入れていただき、貴重な協働の機会を与えていただきました。また、相模原市緑区役所区政策課には本プロジェクトとの接点づくりや情報共有においてご協力をいただき、森のイノベーションラボ FUJINO には地域の新たな拠点としての取り組みを学生が学ぶ機会をご提供いただきました。

本プロジェクトは、地域の皆様との対話と協力の積み重ねによって成り立っております。ここに記して、心より感謝申し上げます。

注

(1) 藤野に関する情報については、藤野観光協会のウェブサイトに詳しくまとめられている。参照先：https://info-fujino.com/date/（2026.2.21）

(2) 和田地区は藤野地域の西部に位置し、陣馬山方面へと広がる山間地域である。一部の斜面には茶畑も見られる。一方、篠原地区は藤野地域の南西部に位置する山間集落であり、里山環境に囲まれた居住地域である。住民主体の行事や市民活動が継続的に行われている点に特徴がある。

(3) 2016 年に開設された本学のボランティアセンターが、2022 年 4 月の CEC 開設に向けた組織再編の過程にあり、従来のボランティア活動支援にとどまらず、市民協働に関わる取り組みへと展開が図られていた。

(4) 当時のミーティングの結果概要が相模原市のウェブサイトに記録されている。本プロジェクトに関わっていただいた相模原市緑区区政策課や、藤野観光協会、また「地産ガチャ」開発者であり、しのばら園芸市実行委員でもある武笠太郎氏と接点を持つ契機となったのも本ミーティングであった。
https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/024/052/202102/houkoku.pdf（2026.2.21）

(5) 都市住民等を対象に、藤野地域の暮らしや文化に触れる機会を提供する体験型プログラム。農作業体験、森林散策、地域住民との交流企画などを通じて、里山の魅力発信や関係人口の創出に資する取り組みとして継続的に実施されている。同協会では、こうした里山体験を具体的なプログラムとして体系化し「体験ツアー」として企画・実施している。

(6) 活動は主に週末に実施されたが、野外作業であるため天候や季節の影響を受けやすく、また実行委員が篠原地区の地域行事にも関わっていたことから、開催日程は必ずしも固定的ではなかった。

(7) 活動先へは公共交通機関のみでのアクセスが困難であること、活動が原則として終日に及ぶこと、さらに開催日程が一定でないことなどから、学生にとってスケジュール調整は容易ではなく、プロジェクトの関心度を高める等、仕組みを検討する段階であったといえる。

(8)「しのばら園芸市」を契機に形成された青学生と篠原地区との関係性を基盤に、その深化を図ることを目的として企画されたワークショップ。年数回の開催を通じて、継続的な交流の場を創出する。

引用・参考文献

三神憲一・水谷耕平,「市民協働プロジェクトを通じた学生の成長および大学の社会的効果に関する研究―青山学院大学シビックエンゲージメントセンター相模原キャンパスにおける「相武台団地活性化プロジェクト」を事例に」『シビックエンゲージメント研究』（1）:37-44,2023

水谷耕平,「相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト「わかば」実践報告―プロジェクトの立ち上げ」『シビックエンゲージメント研究』（2）:37-57,2024

水谷耕平,「相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト「わかば」実践報告Ⅱ―活動の深化に向けて」『シビックエンゲージメント研究』(3):13-29,2025
藤野観光協会,「藤野について」
(https://info-fujino.com/date/,2026.2.25 アクセス)
相模原市,「仮称)テレワークセンター空間等検討ミーティング結果概要」
(https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/024/052/202102/houkoku.pdf,2026.2.25 アクセス)

Ⅱ　シビックエンゲージメントセンター活動報告

ボランティア・シビックエンゲージメントプログラム

事　業　名	笹塚プロジェクト
日　　時	[学生企画]　2025/4/20（日）14:00 ～ 17:00、5/18（日）14:00 ～ 17:00、6/15（日）14:00 ～ 17:00、7/15（火）16:00 ～ 18:30、8/30（土）15:00 ～ 18:30、9/27（土）15:00 ～ 19:30、10/26（日）14:00 ～ 17:00、11/15（土）14:00 ～ 17:00、12/21（日）14:00 ～ 17:00、2026/1/25（日）14:00 ～ 17:00、2/15（日）14:00 ～ 17:00、3/24（火･祝）15:00 ～ 18:00 [新メンバー研修]　2025/8/2（土）10:00 ～ 12:00
場　　所	笹塚十号のいえ（笹塚十号通り商店街内）
参 加 人 数	[学生企画]　13 名（うち学生スタッフ 9 名） （4 月：6 名、5 月：6 名、6 月：3 名、7 月：4 名、8 月：6 名、9 月：7 名、10 月：7 名、11 月：7 名、12 月：7 名、1 月：、2 月：、3 月：） [新メンバー研修]　5 名（うち学生スタッフ 1 名）
内　　容	渋谷区笹塚地区は渋谷区の北西部に位置し、下町的な雰囲気が今なお残るエリアとして独自の地域性を形成している。かねてから高齢者や障害者など福祉的支援を必要とする住民割合が比較的高いエリアであったが、近年は駅前を中心に、近隣の幡ヶ谷・初台とともに再開発が進むなか、若年子育て世帯を中心に居住者の流入が増え、より多様な人々が暮らすまちになっている。都市にあって高齢者や障害者、子育て世帯、外国人など多様なニーズを抱える人々が、誰であれ孤立することなく、必要なつながりのなかで暮らせる都市型コミュニティの構築がいっそう重要になっている。 「笹塚プロジェクト」では、「地域の縁を「つなぐ」」を合い言葉に高齢者の孤立など既存の枠組では解決が難しい地域課題にアプローチする TEN-SHIP アソシエーションと協働し、青学生がキャンパスからほど近い地域の課題解決に、学生の強みを活かして関わっていく。現在、本プロジェクトでは、一昨年度から実施している「夏の草むしり隊ボランティア」に加え、昨年度から商店街の老舗八百屋の旧店舗を改装したコミュニティスペース「笹塚十号のいえ」で、2024 年 11 月以降、「青野菜カフェ」などの企画を、毎月プロジェクトメンバーの学生が主体的に企画し、実施している。
成　　果	「笹塚十号のいえ」で、色んな人に立ち寄ってもらえるような自主企画を行う「笹塚プロジェクト」は 2025 年 7 月に第二期に入り、新たに 5 名の学生が加わった（1 年生 2 名、3 年生 3 名）。4 月から 7 月までは昨年度からの継続学生 3 名が中心となって行い、8 月から新メンバーも加わって、企画の立案･実施を行った。新メンバーの活動開始にさいしては、TEN-SHIP アソシエーション代表の戸所さんより笹塚エリアの特徴やコミュニティの課題、「笹塚十号のいえ」が目指すものについてお話いただく機会を設け、活動への導入を図った。 4 月から 6 月は昨年度からの継続で「青野菜カフェ」を実施した。4 月は「野菜クラッカー　アボカドディップ添え」「冷製野菜スープ」（市販）の提供と「バルーンアート」「輪投げ」の実施、5 月はミャンマーの養育施設「ドリームトレイン」の中高生とともに、ミャンマーのお茶の葉サラダ「ラペット」とミルクティー「ラペイエ」の提供、6 月は「スムージー（ベリー、バナナ）」の提供と「射的」の実施を行った。7 月以降は回ごとにテーマを決めて、そのつど異なる企画を行った（以下、その内容を列挙する）。 7 月 ：「絵日記」「オリジナルクリアファイルをつくろう」 8 月 ：「射的」 9 月 ：「魚釣りゲーム」 10 月 ：ハロウィン企画「コーンホール」「梨スムージー」 11 月 ：「絵日記」 12 月 ：クリスマス企画「オリジナルスノードームづくり」「コーンホール」 1 月 ：「オリジナルブックカバーづくり」「コーンホール」 2 月 ：「オリジナルスライムづくり」 3 月 ：「編み物」「新年度の目標を書こう」 とくに秋以降は「ワクワク水曜塾」に参加している子どもたちや地域の方など、毎回のように参加してくれる人たちも増え、学生たちもその人たちの顔を思い浮かべながら次の企画を考え、そして当日楽しんでもらう、という良い循環が生まれていった。また、10 月のハロウィン企画では笹塚小学校西田校長が仮装姿で参加してくださるサプライズもあり、学生の活動を通じて地域のつながり作りに貢献できていることが実感された。

	学生は毎回、企画に合わせて広報用のチラシを事前に準備するとともに、実施後は CEC のウェブサイトに掲載する報告を持ちまわりで書き、当日の実施だけで終始しない継続的な発信ができたことも評価できる。
協力団体	一般社団法人 TEN-SHIP アソシエーション
実施風景	       

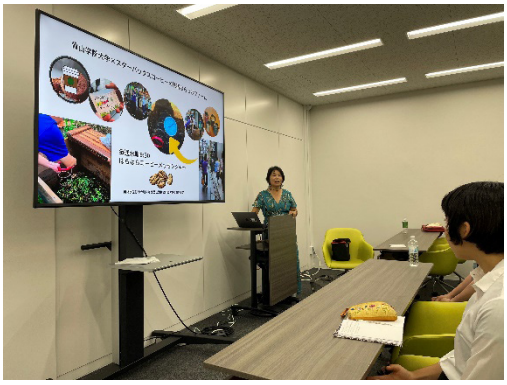
事　業　名	笹塚小学校「ワクワク水曜塾」
日　　時	前期:全 14 回［2025/5/14（水）、5/21（水）、5/28（水）、6/4（水）、6/11（水）、6/18（水）、7/2（水）、7/9（水）、7/16（水）、9/3（水）、9/10（水）、9/17（水）、9/24（水） （いずれも 13:15 ～ 15:00）］ 後期:全 18 回［2025/10/15（水）、10/22（水）、10/29（水）、11/5（水）、11/12（水）、11/19（水）、11/26（水）、12/3（水）、12/10（水）、12/17（水）、2026/1/14（水）、1/21（水）、1/28（水）、2/4（水）、2/18（水）、2/25（水）、3/4（水）、3/11（水）（いずれも 13:15 ～ 15:15）］
場　　所	渋谷区立笹塚小学校
参加人数	全 30 名（5 月～ 7 月：13 名、9 月：13 名、10 月～ 12 月：14 名、1 月～ 3 月：20 名）
内　　容	渋谷区立笹塚小学校では、夏休みの補習において大学生ボランティアの参加が子どもの学習意欲を大きく引き出すことにつながっていることを背景に、2025 年度から「ワクワク水曜塾」という名称で、学習に苦手意識のある小学 2 年生・3 年生を対象とした「学習支援・居場所づくり」を本学 CEC 等と連携のもと通年で展開している。なお、本事業は 2025 年 1 月～ 3 月に「水曜塾（仮）」としてトライアル実施を行ったが、そのさい参加した児童の希望を取り入れ、本年度より名称を「ワクワク水曜塾」とした。 いずれの学年も 10 数名の児童が通年で参加し、2 年生と 3 年生を週替わりで交互に行う。各回、45 分の学習のあとで 30 分のレクリエーションの時間を設け、できるだけ生徒一人ひとりのペースや興味関心に応じた過ごし方ができる場づくりを心がけており、担当の教諭、教員（CEC）も教室内にはいるが、基本的には大学生の感性や判断に委ねた運営を行っている。
成　　果	通年の実施となった今年度は、前期（5 月～ 9 月）と後期（10 月～ 3 月）に分けて学生ボランティアを募集した。全 30 回であり、多いときは 10 名以上が参加したが、とくに夏休み、春休みの長期休暇では学生の継続的参加が難しくなったため、学生の追加募集を行った。最低でも 5 名ほどの学生の参加数を維持できたことで、ほとんどの回で児童一人ひとりへの丁寧な関わりが可能になるとともに、全体で 30 名の学生が学年・学部を越えて本活動に参加し、貴重な経験を得ることができた。 各回、トラブルが起きることもあるが、継続的な実施のなかで児童の学習への姿勢、過ごし方は着実に変わっており、振り返りの時間では担当の教諭からから「普段プリントは全くやらずタブレットでゲームしかしない子」が大学生といっしょに算数や国語のプリントをやっていたり、「すぐにケンカになって誰かと遊べなかった子」がみんなとカードゲームに興じていたり、普段の様子とくらべると驚くべき変化である旨を教えていただくこともしばしばで、活動の意義を学生が実感できる機会になっている。各学生は活動後に感想を口頭で共有した後、欠席者への共有のためグループ LINE にも振り返りを投稿する習慣になっているが、二度のリフレクションが内省力を高め、学生自身の成長およびモチベーション維持につながっていると考えられる。 後期からは学生の主体性がより発揮されるように、学生ミーティングを活動後に実施した。レクリエーションの時間にどのような遊びを児童に提案しようか意見を交わしたり、児童への接し方について対策を講じようとしたりする場面も様々に見られた。
共催団体	渋谷区立笹塚小学校、一般社団法人 TEN-SHIP アソシエーション、聖心女子大学
実施風景	 

事　業　名	笹塚小学校夏休み学習支援ボランティア
日　　時	2025/8/27（水）～ 29（金）（いずれも 8:30 ～ 11:00）
場　　所	渋谷区立笹塚小学校
参 加 人 数	25 名（各 21 名、18 名、14 名）
内　　容	笹塚小学校では、例年、夏休み最後の三日間、全学年全クラスにおいて学習に遅れのある生徒を対象に夏季補習を行っている（各クラス児童 4 名～ 5 名）。従来はクラス担任が一人で行っていたが、少人数ながら個別の関わりに限界があったため、2023 年度からは「ななめの関係」で児童に接せられる大学生の協力を得て、夏季補習を実施することとなった。夏休みは大学生にとっても新しいことへの意欲がわく時期であり、1 日だけのボランティア参加も可能であることから、本プログラムは「ボランティアの入口」として位置付けられるものにもなっている。3 回目となる今年度は、青山学院大学の学生のほか、聖心女子大学の学生、渋谷ボランティアセンター経由で渋谷教育学園渋谷中学校高等学校の生徒が参加している（中学生の参加は今回が初）。
成　　果	昨年度（約 40 名）と比較すると参加学生数が減少しているが、他大学、他校からの参加もある本活動においては、今年も青学生の参加割合の高さが目立った。「ワクワク水曜塾」と合わせ、青学生の笹塚小学校での活動は近隣地域の町内会でも話題になっている旨を西田校長より伺っている。 25 名のなかで 4 名以外は今年が初めての参加だった。朝早い時間からの活動であり、遠方から参加する学生も少なくなかったが、三日間通しで参加した学生も少なくなく、短期間とはいえ継続的に関わって得られる充実感や学びがあったようである。その後、9 月に入って「ワクワク水曜塾（2025 年度前期）」への参加を希望した学生が 4 名おり、うち 2 名は 10 月からの「ワクワク水曜塾（2025 年度後期）」にも応募している。 なお学生の欠席などもあり、コーディネーターの中里も補助として 3 日間、児童のサポートを行ったが、普段関わりのないクラス担任の先生方と交流を図れ、有益な機会となった。
共 催 団 体	渋谷区立笹塚小学校、一般社団法人 TEN-SHIP アソシエーション、聖心女子大学、渋谷区ボランティアセンター

事　業　名	「渋谷おとなりサンデー」参加・記録学生スタッフ
日　　時	2025/6/1（日）9:30 ～ 15:00
場　　所	渋谷区
参 加 人 数	7 名
内　　容	8 年目の開催となる「渋谷おとなりサンデー」に、2023 年度より青学生が参加・記録学生スタッフとして継続的に参加している。渋谷区全域で行われるイベントに参加し、写真撮影やレポート作成など渋谷区の広報協力を行う。学生にとっては渋谷区の多彩な地域活動に触れ、キャンパスのある渋谷区の魅力を肌で感じられるよい機会になっている。
成　　果	学部 2 年生から大学院 1 年生までが参加した。 3 つのグループに分かれ、午前午後と異なる地域のふたつの催しをそれぞれが訪問し、主催者に話を聞いたり、活動の記録写真を撮影したりしながら、取り組みについて理解を深めた。とくに本町エリアで行われた大規模なイベントでは、区職員の人数不足を補う運営面でのサポートを学生がとっさに行ったようで、後日、区から謝辞をいただいた。なお、活動参加の様子は区の広報誌に掲載され、ホームページ上でも公開されている。
共 催 団 体	渋谷区地域振興課
実 施 風 景	 

事　業　名	青山キャンパス＆原宿・渋谷ツアー
日　　時	2025/5/21（水）14:00 ～ 17:00
場　　所	青山キャンパス
参加人数	ドリームトレイン児童 7 名、ジャパンハートスタッフ 3 名 青学生 7 名（CEC 学生スタッフ 5 名、キャンパスツアー学生スタッフ 2 名）
内　　容	NPO 法人ジャパンハートが運営するミャンマーの養育施設ドリームトレインで生活しながら学んでいる中高生 7 名が一週間日本に研修滞在をするにあたり、青山キャンパスを訪問し、学生と交流しながら日本の大学の雰囲気を知るとともに、原宿・渋谷を観光し、都心のにぎわいを肌で感じてもらう機会を、学生主導で企画・実施した。
成　　果	当日、どのような流れでミャンマーの子どもたちを案内するかを学生スタッフが検討し、手作りの地図を用意したうえで、子どもたちをエスコートした。 青山キャンパスのツアーでは、キャンパスツアーのスタッフをしている学生の協力が得られ、オープン直後の青山ミュージアムのほか、キャンパス各所を案内したのち、10 号館の学生ラウンジで大学生活について子どもたちからの質問に答えた。原宿・渋谷ツアーでは、青山キャンパスからスタートし、ハラカド、原宿竹下通りを経て、渋谷スクランブル交差点、宮下パークなどに立ち寄った。日常あまり歩くことがないというミャンマーの子どもたちだったが青学生と道中おしゃべりしながら、終始楽しそうだった。
共催団体	認定 NPO 法人ジャパンハート
実施風景	   

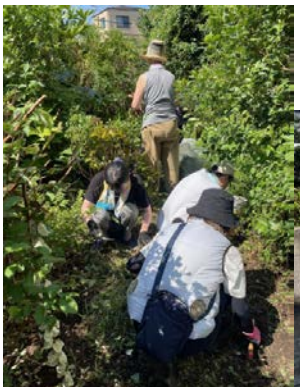
事　業　名	キャンパスファーミングプロジェクト
日　　時	[コンポスト講座＆事前説明会]　2025/7/26（土）13:00 ～ 14:30 [コーヒーメッセンジャー＆はらはらファーム活動] 2025/8/6（水）、8/13（水）、8/20（水）、8/27（水）、9/3（水）、9/10（水）、9/17（水）、9/24（水）（いずれも 16:00 ～ 18:00）、10/1（水）、10/8（水）、10/15（水）、10/22（水）、10/29（水）、11/5（水）、11/12（水）、11/19（水）、11/26（水）、12/3（水）、12/10（水）、12/17（水）、12/24（水）、2026/1/7（水）、1/14（水）、1/21（水） （いずれも 9:30 ～ 12:00）
場　　所	[コンポスト講座＆事前説明会]　青山キャンパス 10 号館 2 階 22 会議室 [コーヒーメッセンジャー＆はらはらファーム活動]　スターバックス原宿オモカド店、原宿はらっぱファーム（神宮前）
参 加 人 数	[コンポスト講座＆活動事前説明会]　8 名（うち学生スタッフ 6 名） [コーヒーメッセンジャー＆はらはらファーム活動]　26 名（うち学生スタッフ 9 名）
内　　容	「環境」あるいは「食」の諸問題に関わって、環境負荷を下げ、持続可能な生産をいかに行っていくかは喫緊の課題だが、近年、すでにある豊かな資源をつなげ、循環させていく「再生的（リジェネラティブ）」な取り組みとして「アーバンファーミング」への注目が高まっている。とくに「コミュニティファーム」は、食の循環とともに人のつながりを生みだすものとして都市農地を位置付けており、コミュニティ創出に力点を置いたさまざまな実践がなされている。 本プロジェクトは、2025 年 1 月まで神宮前国有地で展開されるコミュニティファーム「原宿はらっぱファーム（通称：はらはらファーム）」での活動を端緒として、その後、青山キャンパスでコンポスト＆ファーム活動を展開し、幼稚園から大学・大学院までが集まる青山キャンパスならでは取り組みとして、青山学院内、そして地域における開かれたコミュニティの創出に向けて、モノの循環と人のつながりを多面的に生み出していくことを目指す。 はらはらファームでの活動は、コンポストの管理を含む、コミュニティファームの維持に関わる農作業全般（6 月～）、および近隣のカフェ店（スターバックス原宿オモカド店）のコーヒーかす（10kg）を地域資源として回収する「コーヒーメッセンジャー」活動（7 月～）の 2 つであり、毎週水曜日に実施する。CEC 学生スタッフのコミットメントによるトライアル実施（6 月～ 7 月）を経て、全学にメンバーを募集、事前講座・説明会を実施した後、8 月から新メンバーが加わり本格的な実施となった。
成　　果	7 月のメンバー募集には 4 名から応募があった。その後も、できるだけ多くの学生に関わってもらいたい意図から、関心がある学生の参加を積極的に認めており、8 月以降、一般学生の登録は 13 名増え、総勢 26 名となった（うち学生スタッフ 9 名）。 各回の活動では、行ける学生が自主的に手を上げて参加する、というスタイルで、現地活動も含め、できるだけ学生の主体性にまかせた運用を続けているが、8 月第 1 週以降、非開催もなく毎週、実施できており、各回、2 名～ 6 名の学生が参加している。学生には、コンポストやファームの維持管理やコーヒーかすを通じて地域をつなぐ活動じたいが新鮮であるのに加え、コミュニティファームという性格から地域の方や見学、取材に来られた方との交流が常にあることも大きな刺激になっているようだ。コーヒーメッセンジャー活動では、スターバックスから毎回、学生にドリンクを提供いただくが、そうした直接的な報酬以上に、活動そのものから得られる充実感が大きいことが、学生の積極的な関与から感じられる。 その他、学生団体の有志メンバーが原宿はらっぱファームで活動したり、プロジェクトメンバーでもある学生がキャンパス内で落ち葉コンポストを行うプロジェクトを授業発活動として実施したり、CEC の学生活動を超えた展開も生まれている。 原宿はらっぱファームは 2026 年 1 月で終了となるため、当初計画していたキャンパス内でのコミュニティコンポスト＆ファームのキャンパス内実施に向けて調整・準備を進めているところであるが、合わせてオール青山共創推進委員会が実施検討をはじめた「農園プロジェクト」とも 2025 年末から連携を図っている。
共 催 団 体	原宿はらっぱファーム、NPO 法人コンポスト東京

実施風景	   

事　業　名	YOUTH プロボノプロジェクト（「原宿はらっぱファーム」広報・PR 活動）
日　　時	・2025/7/30（水）13:30 ～ 15:00　キックオフミーティング（対面） ・8/5（火）、8/12（火）、8/18（月）、9/2（火）、9/10（水）、9/16（火）、9/30（火） ※原則 12:00 ～ 13:00　オンラインミーティング ・10/1（水）10:00 ～ 14:00　振り返りミーティング
場　　所	オンライン中心（一部、認定 NPO 法人 サービスグラント）
参加人数	学生 3 名（公募および学生スタッフ）、社会人 1 名、他 団体関係者数名、社会人プロボノワーカー（隔週全体ミーティング時 4 ～ 5 名）
内　　容	認定 NPO 法人 サービスグラントとの連携による「学生プロボノ（期間限定プロジェクト型）」を、学生が活動しやすい夏期休業期間に実施した。今年度からファーミングプロジェクトで関わっている「原宿はらっぱファーム」の魅力を、より多くの人たちに届けて活動の輪を広げるために、インスタグラムで週 1 ～ 2 回程度情報発信を行うというのが主な内容である。 アイデア出しやタスクの確認等は主に slack を、ミーティングは zoom を使用した。今回はパイロット企画という形で、①リーダーとなる社会人プロボノワーカー 1 名 + 学生 3 名のチームを基本としたが、②社会人のみで構成された広報チームも存在し、ミーティングは①のみの回、①②全体の回がそれぞれ隔週で開催されたため、実質ほぼ毎週、アイデア出しや進捗状況報告、相談をしながら進める流れとなった。

成　　果	学生にとって、社会人プロボノワーカーとチームメンバーとして協働した経験から得られたものは非常に大きかった。canva や Instagram を活用した広報活動（戦略や分析も含む）に関する考え方やスキルはもちろんのこと、社会人がどのような観点でプロジェクトを進めていくのかについても、毎回の実践を通して学んでいた。 特に、マーケティングを学ぶ学生にとっては、授業で得た知識が実務の現場でどのように活用されているのかを理解する機会となり、「教室での学び（正課）」と「課外活動（正課外）」の関連性を自ら見出すことで、専攻分野への学習意欲を一層高める結果となった点は大きな成果である。 また、団体関係者や社会人からは、学生ならではの柔軟な発想や行動力が評価され、それによって団体の活動に新たな視点や広がりが生まれたとの声が寄せられた。さらに、本プロジェクト終了後も、継続して原宿はらっぱファームの広報・PR 活動に関わる学生メンバーがいたことも、喜ばしい成果の一つである。
共 催 団 体	認定 NPO 法人 サービスグラント 原宿はらっぱファーム（NPO 法人コンポスト東京）
実 施 風 景	 

事　業　名	夏の草むしり隊ボランティア
日　　時	2025/9/10（水）、9/17（水）、9/24（水）（いずれも 9:00 ～ 11:30）
場　　所	渋谷区笹塚・幡ヶ谷地域
参 加 人 数	学生 10 名（各回 6 名、4 名、6 名）
内　　容	一般社団法人 TEN-SHIP アソシエーションと連携し、渋谷区笹塚エリアの戸建て住宅や都営団地の庭を中心に、草むしり活動を 3 日間にわたって実施した。CEC 青山学生スタッフが笹塚・幡ヶ谷エリアの 5 つのお宅を訪問し、活動を行った。 活動前後では代表の戸所さんより、高齢化や独居住民の増加等による地域課題について、草むしり活動を通した住民への生活相談によるアウトリーチ機能や、継続的な見守り支援の重要性をお話いただいた。
成　　果	通算 3 日の草むしり活動で訪問した先は個人宅（3 件）、都営団地（1 件）、個人宅の隣接空き地（1 件）で、前者 4 件は昨年度に引き続いての訪問となった。戸所さん曰く、「夏前から青学生が来るのを心待ちにしてくださっている」とのことで、継続的な活動を通じて地域とのつながりができてきたことが実感される。 時期柄、とくに初回、二回目は気温がかなり高く、体調に気を付けての実施となったが、草むしり隊は初心者でも楽しく活動でき、地域のなかで暮らしに触れて、新たな気付きを得られる機会となる。他方、参加者 10 名のうち 5 名は昨年に続いての参加だったため、活動面での安定感、手際のよさがあり、頼もしく感じた。加えて今年度は就労継続支援 B 型・就労移行支援を行う「ワークささはた」のメンバーおよび職員とも一緒に活動し、各回、障害のあるメンバーと学生が自然なかたちで交流している模様が見られた。
共 催 団 体	一般社団法人 TEN-SHIP アソシエーション

実施風景	  

事業名	青山祭に行こう！
日時	2025/11/2（日）9:30 ～ 13:00
場所	青山学院大学青山キャンパス
参加人数	学生 5 名
内容	障害のある子どもの移動支援を行っている合同会社結び -me と連携し、普段お出かけに制限が出てしまいがちな子どもたちのお出かけをサポートする取り組みを年に 2 回行っている。夏休みに子どもたちといっしょに東京タワーに行った学生たちが、今度は 11 月に自分たちの学園祭（青山祭）に子どもたちを迎える。大勢の人でにぎわう大学祭を訪れてその雰囲気を感じながら、興味関心に応じて色々な企画を楽しめるように大学生がエスコートをしたり、自らが所属するサークル等で行っている催しに子どもたちを迎えたりする機会を設けた。
成果	結び -me の移動支援を利用している 6 名の子どもと親御さん、支援スタッフがチームごとに大学生と一緒に様々なサークル等が行っている催しをめぐって楽しみ、出店で売られているものを選んで昼ご飯を食べた。鉄道愛好会や美術部の企画に参加したり、色々な出店のなかから好きなものをそれぞれが選んだり、障害のある子どもたちが普段なかなかできない経験をしてもらう機会を、子どもたちとの交流を楽しみながら行うことでき、子ども、学生のみならず同伴した支援スタッフや親御さんにも楽しんでもらえている様子だった。
共催団体	合同会社結び -me
実施風景	 

事　業　名	YOUTH プロボノプロジェクト（「マナビファクトリー」広報・PR 活動）
日　　時	・2026/2/5（木）18:30 ～ 20:00 学生・社会人プロボノワーカーミーティング（ハイブリッド） ・2/6（金）22:00 ～ 23:00 、2/28（土）19:00 ～ 20:30 チームミーティング（オンライン） ・2/10（火）22:00 ～ 23:00 団体スタッフとのキックオフミーティング（オンライン） ・2/17（火）18:00 ～ 20:00 活動現場見学ヒアリング（代々木教室） ・2/21（土）18:00 ～ 20:00 活動現場見学ヒアリング（東大井教室） ・3/16（月）10:00 ～ 12:00 中間報告会（対面） ・3/30（月）19:00 ～ 21:00 最終報告会（対面）
場　　所	オンラインおよび対面（活動現場、認定 NPO 法人サービスグラント）
参 加 人 数	学生 5 名（公募）、社会人プロボノワーカー 1 名、他 団体関係者
内　　容	春期休業期間に YOUTH プロボノプロジェクトとして、NPO 法人マナビファクトリーの広報・PR 活動を実施した。同団体は、生活困窮世帯の小中高生を対象に、学習支援・食事支援・居場所支援を通じて、子どもたちが環境に左右されず将来を選択できる社会づくりを目指している。一方で、周囲からの見られ方への懸念から保護者が利用をためらうケースもあり、支援が十分に届いていないという課題があった。 そのため本プロジェクトでは、支援者・利用者双方に向けて、団体の理念や活動の価値が適切に伝わる Instagram の構成および投稿方針の企画提案が求められていた。 プロジェクトでは、「経済的な理由」を前面に出すのではなく、活動の価値や雰囲気、団体への信頼感が伝わる構成および運用を重視し、公募した学生 5 名と社会人プロボノワーカー 1 名のチームで約 2 か月間にわたり、現状分析、ターゲット設定、コンテンツ企画、運用設計に取り組んだ。
成　　果	成果物として、Instagram 運用マニュアルの作成、投稿用画像・テンプレート、それらの活用方法等の提案を取りまとめ、団体スタッフが広報活動を継続しやすい環境を整えた。事前調査や現場見学、関係者へのヒアリングを通じて課題理解を深め、実務に即した具体的な提案につなげた。さらに、得られた知見を整理・共有し、ターゲット設定や発信方針に反映することで提案の具体性を高めた。 学生の視点を活かした提案は団体側からも高く評価された。メンバーそれぞれが現場見学を通じて得た内容をミーティングで丁寧に共有し合うことで、チームで支援現場への理解を深め、その積み重ねが提案内容の充実に繋がった。関係者からの丁寧なフィードバックや支援のもとで実務に取り組んだ経験は、学生にとって大きな学びの機会となった。本プロジェクトは、団体の広報活動の改善に貢献するとともに、学生にとっても実務に基づく成長の機会となり、双方にとって有意義な取り組みとなった。
共 催 団 体	認定 NPO 法人 サービスグラント、NPO 法人マナビファクトリー
実 施 風 景	 

事　業　名	Fun sport nexus 2026
日　　時	2026/3/24（火）10:00 ～ 21:00、3/25（水）9:00 ～ 17:00
場　　所	国立オリンピック記念青少年総合センター
参 加 人 数	学生 12 名（1 日目：9 名、2 日目：4 名）
内　　容	「明るく、楽しく」を理念に、スポーツや文化活動を通じて、人・競技・地域を「つなぐ」ことを目的とするスポーツイベント「fun sport nexus 2026」が、公益財団法人スポーツ安全協会主催により今回、初の開催となった。パン食い競争やダンス、ボッチャなどの企画が二日間にわたって催され、子どもから大人まで数百名が参加した。青学生のボランティアは本イベントを運営面でサポートし、各企画ごとに分かれて、実施や記録のサポートを行った。
成　　果	学生は 1 ～ 2 名ごとに分かれて、それぞれの企画の補助を終日行った。大勢が参加し、活気あるイベントだったことに加えて、プロスポーツ選手や元オリンピアンなども各企画に関わっており、普段はなかなかない交流の機会にもなったようだった。
共 催 団 体	公益財団法人スポーツ安全協会
実 施 風 景	

事　業　名	藤野プロジェクト
日　　時	① 2025/7/6（日）藤野里山体験ツアー ② 7/27（日）～ 4/26（日）しのばら園芸市 / しのばらグリーンデイズボランティア ③ 9/24（水）、10/22（水）、11/26（水）、12/17（水） ④ 2026/3/7（土）10:50 ～ 15:45 里山ビバリウムワークショップ開催 ⑤ 3/8（日）10:00 ～ 16:00 さがみはら学生祭に出店
場　　所	相模原市緑区藤野地域（和田地区 / 篠原地区）/ オンライン / 淵野辺公園中央広場
参 加 人 数	① 5 名（うち参加者 3 名）②③ 13 名 ④ 4 名（うち参加者 1 名）⑤ 3 名
内　　容	〝芸術のまち〟〝都心に一番近い里山〟などの名前で知られる相模原市緑区・藤野地域をフィールドに、地域のことを知りながら、青学生の地域に根ざした社会貢献のあり方を考えていくプロジェクト。 里山体験ツアーでは、和田地区に暮らす人たちと交流しながら、自然に触れ、地域の魅力を体感する機会となった。 しのばら園芸市活動ボランティアでは、地域の自然素材を使って「在るものを活かす暮らし」を提案するイベント「しのばら園芸市」の開催に向けて会場の整備等を行った。また 2026 年 4 月から、篠原の自然の心地よさや魅力を体験するイベント「しのばらグリーンデイズ」へと名称が変更されたが、引き続き運営補助を担った。 里山ビバリウムワークショップは学生主体の企画として実施されたほか、さがみはら学生祭への出店も学生主導で取り組んだ。
成　　果	本プロジェクトを通じて、学生たちは地域住民との継続的な関わりの中で里山地域の魅力や課題を多角的に理解することができた。里山体験や園芸市の準備に携わることで、地域資源を活かした活動の意義や、地域との協働の在り方について実践的に学ぶ機会となった。また、昨年度の「しのばら園芸市」において、学生メンバーによる自主企画の実施（出店）に至らなかったことが課題であったが、今年度は上述のワークショップやイベント出店が実現した点は大きな成果である。一方で、企画立案から実施に至る過程においては、準備や運営面に粗さも見受けられ、今後に向けた課題が明らかとなった。
協 力 団 体	しのばら園芸市実行委員会、しのばらグリーンデイズ実行委員会、藤野観光協会
実 施 風 景	 

事　業　名	相模原市中央区地域活性化プロジェクト「わかば」
日　　時	2025/5/14（水）～ 2026/3/18（水）
場　　所	相模原市中央区内
参 加 人 数	学生 9 名
内　　容	相模原キャンパスの所在地である相模原市中央区について、学生の視点から地域の活性化に資することを目的として実施した。なお､昨年度までは｢相模原市中央区魅力発掘･創造･発信プロジェクト」という名称であったが、本年度は魅力の発掘や発信だけでなく、より広く地域の活性化に資するという目的から「相模原市中央区地域活性化プロジェクト『わかば』」という名称に変更している。 本年度は、①メディアチーム、②ツアーチームの 2 チーム体制で活動を行い、各チームがそれぞれのテーマに応じた企画を立案・実施した。毎月 1 回の全体ミーティングに加え、チームごとのミーティングや準備作業を随時行いながら、年間を通じて継続的に活動を展開した。 ＜全体での活動＞ ・毎月 1 回の全体ミーティングの実施 ・6/7（土）：相模原市中央区を知るためのツアー（相模原市立博物館、淵野辺公園、JAXA 相模原キャンパス） ・10/11（土）・12（日）：相模原祭（大学祭）教室企画出展（藤野プロジェクト、相模原ワインプロジェクトとの合同出展） ・11/19（水）：中間報告会 ・3/18（水）：活動報告会 〈メディアチームの活動〉 ・中央区公式 Instagram への企画投稿「青学生のまちのぞき旅 - 中央区 -」 主に区内のイベントや店舗を紹介する動画・写真コンテンツの制作・発信を行い、学生の視点から見た地域の魅力を継続的に発信した。 〈ツアーチームの活動〉 ・11/24（月・祝）:「中央区秘密発見！わかバスツアー」 区内の施設の裏側を見ることができる、市民向けのツアーを企画し、①博物館コース（相模原市立博物館、麻布大学いのちの博物館）、②消防署コース（相模原消防署・下溝防災消防訓練場）の 2 パターンのツアーを実施した。
成　　果	本年度の活動を通じて、参加した学生たちは相模原市中央区を中心としたキャンパス周辺地域への理解をより一層深めることができたと考える。特に、取材やツアー先への下見・交渉等地域に実際に出ていく活動を通して、キャンパス内では得られない直接的な地域との接点を持つことができ、実践的な学びの機会となったといえる。 各チームの活動においては、特にどのように伝え、誰に向けて届けるのかという視点を持って企画を検討する姿が見られた。メディアチームの Instagram 発信、ツアーチームの体験型企画等、地域の魅力を多面的に捉え発信することができた。 また、相模原市中央区役所をはじめとする地域関係者との連携を通じて、行政が地域活性化に果たす役割を具体的に理解する機会ともなったのではないだろうか。企画の実施に当たっても、各所との調整や準備、報告といった一連のプロセスを経験することで、社会における実践的な活動の進め方について学ぶことができたといえる。 一方で、本年度は 1・2 年生の参加が多く、また全員が新規メンバーであったこともあり、当初は地域活動や企画運営に対する経験が十分でない様子も見られたが、活動を重ねる中で徐々に経験や理解を深め、少しずつ成長していく様子が見られた。
協 力 団 体	相模原市　中央区役所　地域振興課・区政策課

実施風景	   

事　業　名	相模原ワインプロジェクト
日　　時	2025/3/26（水）～ 2026/3/18（水）
場　　所	ケントクワイナリー（農場・醸造所）、相模原キャンパス等
参加人数	学生 10 名
内　　容	本企画は、ブドウの栽培から醸造まで、ワイン造りの工程を全て市内で一貫して行う相模原産のワイン、「相模原ワイン」を地域の新たな特産品として広く発信し、相模原市中央区を中心とした地域の活性化や魅力向上に寄与することを目的として実施したものである。2023 年度の「わかば」プロジェクト自由企画チームの活動を基点とし、2024 年度には独立したボランティア・プログラムとして展開し、それを経て 2025 年度は市民協働プロジェクト「相模原ワインプロジェクト」として実施した。 本年度は参加メンバーを学内公募の上、選考により 10 名選出し、「広報チーム」と「ラベル・試飲販売会チーム」の 2 チーム体制で活動を行った。具体的な活動は 5 月より農場作業への参加から始まり、除葉や摘房、収穫等の栽培工程に加え、ラベル貼りをはじめ醸造所での作業にも一部関わりながら、ワイン造りの一連の流れを実体験として学生たちは経験した。また、活動はチームの枠を超えて合同で行う場面も多く、メンバー全体で協働しながら取り組むことができたといえる。 ワイン造りの作業と並行して、相模原ワインの認知度向上と魅力発信を目的とした PR 活動を展開し、Instagram 等を活用した情報発信、ラベルデザインの公募・投票、相模原祭でのブドウジュース飲み比べ体験等に取り組んだ。11 月には相模原市農業まつりにおいてイチゴワインの販売およびステージ発表を行い、また地域のコミュニティ放送 FM HOT 839（エフエムさがみ）への出演を通して活動の発信を行った。さらに、活動の集大成として、2026 年 3 月には相模原市のアンテナショップ「sagamix」において、完成したオリジナルワイン「SORA」の試飲販売会を実施した。

成　　果	本プロジェクトを通して、参加した学生たちは相模原地域の農業・産業・地域資源に対する理解をより一層深めることができた。特に農場作業等具体的なワイン造りの工程に継続的に関わる中で、ワイン造りが自然条件や人の手によって支えられていることを実感し、生産者のこだわりや努力、地域資源を活かしたものづくりの価値について具体的に学ぶ機会となった。 また、ワインの PR 活動や販売活動を通じて、自らが関わった商品をどのように社会に届けていくかという視点を持つことができた点も大きな成果である。ラベルデザインの企画や情報発信、試飲販売会の運営といった一連のプロセスを経験することで、地域資源を地域の魅力としてどのようにつたえるか、またどのように実際に人に手に取ってもらうか、といった実践的な課題に向き合うことができたのではないだろうか。 さらに、相模原市農業まつりやラジオ出演などに関わる中で、地域振興が行政・事業者・市民などの多様な関係者の協働によって成り立っていることを理解する機会となった。こうした経験は学生たちにとって、地域社会との関わりを考える上で貴重な学びとなったといえる。 本プロジェクトは 2023 年度の「わかば」プロジェクトの 1 チームとしての活動に始まり、2024 年度の独立したプログラムとしての発展を経て、本年度の市民協働プロジェクトとしての活動をもって一区切りとなる。相模原市中央区役所やケントクワイナリーの皆様に、相模原ワインという地域資源を通して地域と関わる機会を学生たちに与えていただき、学生たちにとっては大学周辺地域への理解や愛着を深める契機になったと思料する。
協 力 団 体	相模原市　中央区役所（大森）地域振興課 ケントクワイナリー（大森産業株式会社）
実 施 風 景	   

事　業　名	相模原市立図書館ボランティア
日　　時	2025/5/16（金）～ 12/17（水）
場　　所	相模原市立図書館等
参 加 人 数	15 名
内　　容	相模原キャンパスの最寄り駅である淵野辺駅近くに位置する相模原市立図書館において、学生が主体となって図書館に関する企画を立案・実施するボランティア活動を行った。本活動は、地域図書館が担う社会教育機能や地域との関わりについて、実践を通じて学生の理解を深めることを目的として実施している。 本年度は、①おはなし会班、②制作班、③読書班の 3 班体制で活動を行い、各班がそれぞれのテーマに応じた企画を検討・実施した。 〈おはなし会班〉 おはなし会班では、事前に選書や読み聞かせの練習を重ねた上で、2025 年 9 月 7 日（日）に相模原市立図書館にておはなし会を実施した。大型絵本やエプロン人形劇、手遊びなどを取り入れ、午前・午後の 2 部構成で行い、合計 60 名の参加者に読み聞かせをすることができた。また、12 月 7 日（日）・14 日（日）にはイオンモール古淵内の未来屋書店において、出張おはなし会を実施し、こちらも 2 日間で合計 64 名が参加するなど、図書館の外においても活動の場を頂くことができた。 〈制作班〉 制作班では、図書館が発行する中高生（ヤングアダルト）向けのブックリスト「わい'ず☆とんとん」の特別号として「青学ボランティア特別号」を制作・発行する機会を頂いた。この冊子は相模原市内の各図書館・図書室や学校等に配布されるとともに、オンライン上でも公開されている。冊子内のクイズ企画と連動した形で図書館内に宝箱を用意し、クイズの回答を基に宝箱の鍵が開けられ、景品がもらえるという冊子とリアルの連動した企画を実施するなど、図書館利用者が楽しみながら本に触れる機会を創出した。さらに、活動の集大成としてボランティア新聞の制作にも取り組み、各班の活動内容や図書館の紹介を同新聞にまとめ、報告している。 〈読書班〉 読書班では、図書館内における展示企画として 8 月 1 日～ 31 日の期間、「青学生オススメ本」展示を実施し、各自がテーマを設定し、選書・POP 制作・装飾を行った。43 冊を展示し、延べ 19 冊の貸し出しにつながった。また、12 月 2 日～ 28 日には、相模原市が JAXA をはじめとした宇宙にゆかりのある地であることを踏まえたテーマ設定の展示企画「星と月」を実施した。こちらも展示の装飾やしおりの制作などを行い、来館者が楽しみながら本に触れられる空間づくりを行った。
成　　果	本企画を通じて、参加した学生たちは地域図書館が担う社会教育機能や、地域における文化の拠点としての図書館の役割について理解を深めることができたといえる。特に、おはなし会や展示企画、冊子制作といった活動を通して、図書館が本の貸し出し・閲覧だけでなく、人と人の交流や学びあいの機会を提供する場であることを実感する機会ともなったのではないだろうか。 おはなし会班の活動では、子どもたちの反応を直接感じながら読み聞かせを行うことで、対象に応じた表現の工夫や場のつくり方について、図書館職員の方々から学び、読み聞かせの実践を通じて、声の出し方や立ち位置、進行の工夫といった具体的な課題にも気づくなど、今後にもつながる学びを得ることができていたといえる。 制作班では、ブックリストや新聞といった形で情報を発信する過程を通じて、企画を形にして社会に届ける経験をすることができた。企画段階では抽象的であったアイディアが、話し合いや試行錯誤を経て具体的な成果物として完成していく過程を経験したことは、学生たちにとって大きな達成感と学びにつながったのではないだろうか。 読書班の展示企画では、自らの興味関心に基づいてテーマ設定や選書を行うことで、本の魅力を他者に伝える視点を養えたといえる。来館者の反応や貸出実績を通じて、自分たちの企画が実際に来館者の利用行動に結びつくことを実感することもできたといえよう。 本活動を通して、市立図書館という地域の公共空間を舞台に、地域とのつながりを実感するとともに、社会に開かれた学びの場としての図書館の役割や、そこに地域の大学生が関わることの意義についても考える契機となったのではないだろうか。
協 力 団 体	相模原市立図書館

実施風景





（おはなし会班：おはなし会）

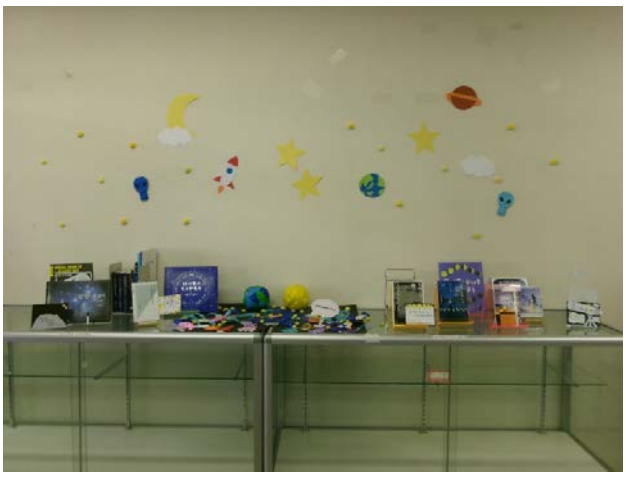


（制作班：特別号表紙）



（制作班：クイズ企画）





（読書班：企画展示）

事　業　名	青学国際子ども食堂
日　　時	① 2025/5/24（土）（ペルー料理） ② 6/28（土）（タイ料理） ③ 7/12（土）（上海料理） ④ 10/18（土）（台湾料理） ⑤ 12/20（土）（韓国料理） ⑥ 2026/1/31（土）（マレーシア料理） （いずれも 10：00 ～ 14：00）
場　　所	相模原市立大野北公民館　/　相模原市立橋本公民館
参 加 人 数	学生 32 名（３つのグループに分かれて活動） 小学生定員各 10 名（淵野辺小学校、大野北小学校の 3 ～ 6 年生）
内　　容	外国の料理を体験する異文化体験と食育、さらに青山学院大学の学生との交流を目的として、2024 年度後期から開始した。海外の料理は青山学院大学の留学生、外国籍の学生、さらに相模原市国際交流ラウンジの外国人職員の方に作って頂いた。コミュニティ人間科学部の学生が本活動に参加し、調理のサポートや子どもたちとの交流を行った。
成　　果	本活動を通じて、食を媒介とした異文化理解と地域交流の機会を継続的に創出することができた。各回で異なる国・地域の料理を扱うことで、学生及び参加した児童たちは多様な食文化に触れ、楽しみながら国際的な視点を養うことができた。また、料理をお願いした留学生や外国籍の学生、地域の関係者との関わりを通じて、多文化交流の場が形成された。 今年度は新たに 1 年生 22 名が参加し、継続参加の 2 年生が中心となって運営を担うことで、円滑な活動体制が維持された。加えて、前年度に実施していた事前のトライアル食事会を行わずとも安定した運営が可能となり、活動の定着が見られた。参加対象についても大野北小学校から淵野辺小学校へ案内を拡大し、地域への周知が進んだ。さらに、本活動は相模原市地域活動・市民活動ボランティア認定制度において認定を受け、学生が認定証を授与されたほか、相模原市より 3 万円の補助金の交付を受けるなど、地域における活動としての評価を得ることができた。2026 年度からはコミュニティ人間科学部の交流事業として実施する計画が進んでおり、これまでの活動を通じてその基盤が確立された。
協 力 団 体	相模原市社会福祉協議会
実 施 風 景	   

事　業　名	相模原市立小学校連合運動会ボランティア（相模原地域小中学校等連携事業）
日　　時	2025/9/30（火）～ 10/3（金）9：00 ～ 15：30
場　　所	相模原ギオンスタジアム
参 加 人 数	3 名［9/30：0 名、10/1：（雨天中止）、10/2：1 名、10/3：3 名（延べ 4 名）］
内　　容	学生たちに地域の子どもたちと関わるボランティアの機会を提供することを目的として、相模原市立小学校連合運動会（相模原市内の全ての市立小学校 6 年生及び義務教育学校 6 年生が出場）の運営ボランティアを実施した。この企画は、相模原市における教育の取り組みの一つである連合運動会を通して、学生が地域の教育活動への理解を深めるとともに、大学と地域の連携を促進することを狙いとしている。 相模原市立小学校連合運動会側としても、地域の一員である大学生が運営のボランティアとして関わることで、子どもたちに多様な大人・若者と接する機会を提供するとともに、目指す人間像を「共に認め合い　現在（いま）と未来を創る人」とする相模原市の教育に対する理解と関心を学生たちに持ってほしいという思いから、学生たちのボランティアを受け入れていただいた。 当日は競技の運営補助（選手の誘導、競技前の準備、各種競技の道具の準備・片づけ等）など、子どもたちの競技に近い場面でのボランティアを行った。
成　　果	本企画は 2023 年度から継続して学生を受け入れていただいている取り組みであり、本年度は 3 回目のボランティア参加となった。市内の全ての市立小学校 6 年生及び義務教育学校 6 年生全員が参加する大規模な体育行事にボランティアとして関わることで、学生たちは相模原地域や地域での教育行事の意義などについて理解を深める機会となった。 また、子どもたちや小学校の先生方と直接関わりながら活動することで、子どもとの接し方や、年齢の異なる他者と協働する際の配慮や責任感についても学ぶことができたのではないだろうか。さらに、地域で行われる教育行事を支える立場から経験したことで、こうした活動が子どもたちの将来的なシビックプライドの醸成につながっていく可能性についても、学生自身が実感する契機となったと思料する。
協 力 団 体	相模原市立小学校体育的行事実行委員会

イベント

事　業　名	ボランティアオリエンテーション
日　　時	2025/4/4（金）・10（木）12:40 ～ 13:10（青山） 4/3（木）・4（金）12:40 ～ 13:10（相模原）
場　　所	各キャンパス　シビックエンゲージメントセンター
参 加 人 数	（青山）　4/4：28 名　　4/10：18 名 （相模原）　4/3：9 名　　4/4：2 名
内　　容	新入生や春から新たにボランティア活動を始めたいと考える在学生などに向けてボランティアオリエンテーションを対面形式で実施した。 コンテンツは①ボランティアについて、②センター紹介、③参加方法、④プログラム紹介、⑤サービス・ラーニング科目の紹介等、例年と同様ではあったが、センターの場所や雰囲気を知ってもらう機会にもする目的で、センター内での対面形式とした。
成　　果	センターの存在やボランティア活動、サービス･ラーニング科目について周知することができた。相模原キャンパスでは学生スタッフが説明の中心部分を担い、説明を担当した者たちにとってもCEC の事業を理解する機会となったといえる。（なお、学生スタッフからの活動報告として、本書 89 ページにも報告記事を掲載している。）
実 施 風 景	（青山）  （相模原） 

事　業　名	CEC 学生スタッフ企画「日常をよりよく！ Run & Walk in 代々木公園」
日　　時	2025/4/23（水）13:20 ～ 15:20
場　　所	10 号館 2 階 23 会議室 17506 教室
参 加 人 数	青学生 2 名、学生スタッフ 4 名、ゲスト 2 名（パタゴニア東京・渋谷ストア　坂井さま、渡部さま）
内　　容	2024 年 10 月よりパタゴニア東京・渋谷ストアの協力を得て、CEC 青山学生スタッフ企業コラボチーム 5 名がコラボ企画の実施に向けてミーティングを重ねてきた。コラボイベント企画としては、1/8 にファッションをテーマに第 1 回「CEC 学生スタッフ企画：青学生×環境問題×〝ファッション〟＝？『思い出の T シャツでオリジナルエコバックを作ろう』」を実施し、環境問題をテーマに第 2 回「日常をよりよく！ Run & Walk in 代々木公園」を 4/23 に企画した。 予定としては、代々木公園をランニングした後に、学内でパタゴニアフィルムズの視聴、トレイルランニングについてパタゴニア渋谷・東京ストアのスタッフの方からお話、自然体験について参加者の写真を見ながらディスカッションという流れであったが、雨天となったため、学内でのセッションのみを行った。  
成　　果	新入生やまったく社会課題に関心がない層へのアプローチとして、学生の発案により EAGO 着ぐるみを着用して昼休みにチラシを配ることを 2 度行った（配布したチラシは 130 枚）。必ずしも集客には結びつかなかったが、学生の自主的なアイデアがかたちになるとともに、多くの学生の目に触れる機会になった。また、当日雨天となったことで、学内セッションへの参加が申し込みよりも減ってしまったが、小規模であることでディスカッションも深まり、参加した学生同士だけでなく、パタゴニア渋谷ストアのスタッフとの交流がはかられるとともに、発展的な活動に向けたアイデアが多数あがり、今後につながる機会となった。
協 力 団 体	パタゴニア東京・渋谷ストア
実 施 風 景	 

事　業　名	パタゴニア東京・渋谷ストア訪問
日　　時	2025/4/30（水）13:20 ～ 15:00
場　　所	パタゴニア東京・渋谷ストア
参 加 人 数	学生２名
内　　容	新入生ウェルカム企画として、１年生を対象にシビックエンゲージメントセンターとつながりのあるキャンパス周辺の団体や企業を訪問し、さまざまな社会的問題に対してどのような取り組みがなされているか知るとともに、キャンパスのある地域への親しみを得る１ day プログラムを行った。
成　　果	パタゴニア東京・渋谷ストアを訪問し、「地球を救うためにビジネスを営む」というビジョンをかかげるパタゴニアが、アウトドアアパレル企業として具体的にどのような商品開発やリペア・リサイクル事業に取り組んでいるかについて、ストアスタッフの方からお話を伺った。参加した新入生はいずれも、両親等にパタゴニアの製品の愛好者がいるなどで同ブランドに親しみを覚えており本企画に申し込んだとのことで、短い時間ながらスタッフの方、参加者同士でさまざまな話題で盛り上がっていた。
協 力 団 体	パタゴニア東京・渋谷ストア
実 施 風 景	

事　業　名	ボランティアカフェ（ボラカフェ）		
内　　容	ボランティアや社会貢献に興味がある学生向けに、実際に社会課題に取り組む団体や個人をお招きしてその体験等を語っていただくイベント。各回様々なテーマでゲストスピーカーにお話しいただきました。		
開　催　日	テーマ	ゲストスピーカー	参加者数
① 2025/5/28（水）	山林火災とボランティア活動～学生団体「Youth for Ofunato」による現地での支援活動レポート～	吉開百音 氏、岩永実津穂 氏、原田隆史 氏、朝比奈和泉 氏（学生団体 Youth for Ofunato）	３名
② 2026/1/14（水）	ヤングケアラーについて知る・学ぶ・支える勉強会～となりにいるかもしれない「ヤングケアラー」ちょっと知ってみませんか？～	山田由美子 氏（ケアラーズカフェモンステラ代表理事）	10 名

事　業　名	ボラカフェ：山林火災とボランティア活動～学生団体「Youth for Ofunato」による現地での支援活動レポート～
日　　時	2025/5/28（水）19:00 ～ 20:00
場　　所	オンライン
参 加 人 数	3 名、企画学生 4 名
内　　容	2025 年 2 月に岩手県大船渡市で発生した大規模な山林火災において現地で支援活動を行った学生団体 Youth for Ofunato のメンバー 4 名を迎え、当時の活動内容や現地の状況、支援を通じて得た気づき等について報告いただいた。 同団体は、2011 年の東日本大震災以降、継続的に大船渡地域と関わりを持ちながら、地域に根ざした復興支援活動を行ってきた。今回の報告では、これまで関係性が十分に構築されていない新たな地区において、支援の申し出が一時的に受け入れられないという状況に直面しつつも、住民との対話を重ねる中で信頼関係を築き、活動の実現に至った経緯についても共有された。
成　　果	登壇した 4 名の学生による報告を通じて、災害支援における信頼関係の重要性や、地域に寄り添う姿勢の必要性が具体的に示され、参加者にとって活動報告にとどまらない深い学びの機会となった。特に、現地での実体験に基づく語りは、災害対応の現実や課題をより身近に捉える契機となった。アンケートにおいても、「ニュースでは得られない現地の状況を知ることができた」「実際の活動内容や現地の声を聞くことができ貴重であった」といった意見が寄せられ、本企画の有用性が確認された。
協 力 団 体	学生団体 Youth for Ofunato
実 施 風 景	

事　業　名	ボラカフェ：ヤングケアラーについて知る・学ぶ・支える勉強会～となりにいるかもしれない「ヤングケアラー」ちょっと知ってみませんか？～
日　　時	2026/1/14（水）15:00 ～ 16:30
場　　所	相模原キャンパス　F 棟 402 教室
参 加 人 数	学生 10 名、企画学生 4 名（学生スタッフ）
内　　容	学生スタッフ企画によるボラカフェとして、「ヤングケアラーについて知る・学ぶ・支える勉強会」を開催した。本企画は、学生がヤングケアラーという社会課題について基礎的な知識を得るとともに、ヤングケアラー支援の実践者やヤングケアラー当事者としての経験を持つ方の声に触れ、大学生としてどのように関わることができるのか等を考える機会を提供することを目的に、相模原キャンパス CEC 学生スタッフが企画したものである。当日の流れや準備、司会等運営についても、学生スタッフが主体的に行った。 当日は、ケアラーズカフェモンステラ代表理事の山田由美子氏およびヤングケアラーの当事者を講師として迎え、講義、当事者による体験談、寸劇等の内容で実施した。講義ではヤングケアラーや若者ケアラーの定義や現状、具体的に山田氏が関わってきた当事者の事例を基に、ヤングケアラーの実態をお話いただいた。続いて、当事者の体験談や寸劇を通して、家庭で人知れずケアの役割を担う子ども達が置かれている状況を具体的にイメージできる形で伝えていただいた。なお、この寸劇にも学生スタッフが出演した。一方的な講義形式にとどまらず、多様な手法を用いることで、参加学生が主体的にヤングケアラーの問題について考え、感じ取れる場になるよう工夫されていた。

成　　果	ヤングケアラーという言葉を聞いたことはあるものの、具体的なその実態や支援のあり方について、十分に知らない学生が多く、今回のボラカフェを通してそうした実態を学生たちが知ることができたといえる。参加者の満足度も高く、またこの問題が「特別な誰か」の問題ではなく、身近に存在し得る課題であることに気が付いた様子もアンケートから読み取れる。 また、ニュースなどで断片的に知るだけでは理解しにくい、当事者の心理的負担や支援の難しさについて、生の声を通して学ぶ機会となり、学生たちが「自分に何ができるのか」「どのように周囲に目を向けるべきか」を考える契機になったのではないだろうか。 さらに、企画の立案から準備・運営まで学生スタッフの主体的な働きにより実現したボラカフェであったことから、参加学生にとってはボラカフェの内容から学ぶことができただけでなく、学生主体による社会課題啓発の実践例を共有する機会ともなった。学生スタッフたちにとっても、自らの課題意識をこのようなイベントという形で具現化するまでの行程を通して、学ぶものが多くあったと思料する。 なお、企画・運営を担当した学生スタッフからの報告も 92 ページに掲載しているので、そちらも併せてお読みいただきたい。
協 力 団 体	ケアラーズカフェモンステラ　代表理事　山田由美子氏　他モンステラの皆様
実 施 風 景	

事　業　名	**青山学院有志×宮古プロジェクト 宮古 day 青山学院×宮古市交流活動発表会～つながる想い、広がる学び、そして未来へ～**
日　　時	2025/11/29（土）10:00 ～ 16:00
場　　所	青山キャンパス 10 号館 1 階 学生ラウンジ
参 加 人 数	50 名（発表者、運営スタッフ含む）
内　　容	青山学院と宮古市の 14 年にわたる交流について、「宮古 Day」という形でイベントを開催した。今年活動した初等部生・高等部生・大学生・卒業生・教職員が現地で得た学びや心に刻まれた想いを共有し、震災直後から続く交流活動の軌跡と、それが未来へどう繋がっていくのかをともに考えた。当日は、大学保護者等が多数来校されるペアレンツウィークエンドの開催日でもあり、豊かな人間性を育む本学の一貫教育の取り組みについてより広く知っていただくことができた。 主な内容は、以下の通りである。 ・青山学院と宮古市の歩み（大学教職員） ・初等部 洋上小学校（初等部児童・教諭）

内　　容	・高等部 宮古訪問プログラム（高等部生徒・教諭） ・大学 正課での活動と学び（サービス・ラーニング科目履修生） ・学生ボランティア団体の活動（MF3.11 東北応援愛好会） ・宮古サーモン・ハーフマラソン（関係者） ・トークセッション（卒業生・教職員・学生）
成　　果	本学は東日本大震災以降、幼稚園から大学まで全設置学校が関わる形で岩手県宮古市との交流を継続してきたが、設置学校間でその活動を共有する場は今回が初めてであったため、各年代・各設置学校ならではの取り組みと学びへの相互理解にも繋がった。また、設置校の児童・生徒にとって、自校以外の場所で発表することも、大変貴重な機会になったという声をいただいた。今年度青山学院各設置学校の教職員、卒業生有志によって立ち上がった「青山学院有志×宮古プロジェクト」による企画実施となった本イベントは、宮古市と青山学院の関係が、支援・交流を経て「学び合い・支え合い」の段階に入っていることを確認するとともに、今後の一貫教育や協働の新たな可能性を考える良い機会となった。
協　　力	宮古市（中村市長より動画メッセージ、青山学院交流担当：佐々木様ご来訪）
実施風景	 

事　業　名	2025 年度青山学院大学シビックエンゲージメントセンター活動報告会
日　　時	2026/2/27（金）13:00 ～ 16:00
場　　所	青山キャンパス 10 号館 1 階　学生ラウンジ
参 加 人 数	38 名（参加者 8 名、発表者 22 名、運営 8 名）
内　　容	2025 年度にセンター主催プログラムやボラサポ制度、サービス・ラーニング科目等を通じて社会貢献活動に携わった学生・教職員による成果報告会を実施した。主な内容は次の通り。 <ボランティア・社会貢献プロジェクトサポート制度> ・スタートアップ採択案件：ゆるりと過ごせる、中高生の居場所づくりプロジェクト ＜CEC 学生スタッフおよび地域プロジェクトに関する活動＞ ・相模原キャンパス学生スタッフ、市民協働プロジェクト「相模原ワインプロジェクト」 ・青山キャンパス学生スタッフ、「笹塚プロジェクトチーム」、「原宿はらっぱファーム（コーヒーメッセンジャー、ユースプロボノ広報・PR 活動）」 ・青山 CE フォーラム「ちいきふくしと絵本」 ・AOGAKU ネットワーク所属団体の活動：青山学院大学公認 SHANTI SHANTI 国際ボランティア愛好会、渋谷区こどもテーブルボランティア愛好会 ・正課での活動と学び（サービス・ラーニング科目）

成　　果	今年度の地域での活動について、広く共有し学内外に発信する機会となった。学生にとっては、地域社会との関わりの中で得た学びを振り返り、自分たちの言葉で伝えることで、公共性への理解や当事者意識を高める機会にもなった。 また、今年度の新たな取り組みでお世話になった団体の方々からは、受け入れ側の視点から見た「学生の関わりによる影響」についてもお話しいただいた。参加者同士の対話を通じて、公共的課題への理解を深めるとともに、市民として主体的に関わる意識や、協働による学びの価値を共有する場となった。
実 施 風 景	 

講座・セミナー

事　業　名	第 3 回青山シビックエンゲージメントフォーラム「ちいきふくしと絵本」
日　　時	2025/5/31（土）13:30 ～ 15:30
場　　所	青山キャンパス 10 号館 23 会議室
参加人数	一般：11 名（うちオンライン 4 名） 青学生：27 名（うち CEC 学生スタッフ 9 名） CEC スタッフ：5 名 講師：2 名
内　　容	学内外に向けた「シビックエンゲージメント」の啓発と、本学におけるシビックエンゲージメント活動の紹介を目的として、昨年度より「青山シビックエンゲージメントフォーラム」を開催している。第 3 回となる今回は、長年、地域福祉をテーマとする絵本づくりを親子で続けてこられた森純一さん（東京都社会福祉協議会）をゲストにお迎えし、ご講演いただいた（タイトル「絵本づくりで伝えたい地域福祉したい気持ち」）。今回、講演および質疑応答のパートについては、オンライン配信も行った。会場では講演後に、「ちいきふくしのこころ」をテーマにキットパス（日本理化学工業）を活用した絵本づくりワークショップを企画・実施した。
成　　果	とくに現地参加について、ワークショップの実施上限を超える数の申し込みがあり、会場は終始、非常に盛況であった。（オンライン参加については必ずしも参加者は多くなかったが、講演の録画を後日 CEC 公式 YouTube アカウントにて公開した。） そして今回は、CEC 学生スタッフがより主体的に参画できることを意識し、両キャンパスの学生スタッフ 9 名が、ポスター制作、当日の準備、受付、司会進行をそれぞれ担うなど、企画から実施まで関わり、「青学生にシビックエンゲージメントの魅力を伝える」という学生スタッフのミッションをかたちにする機会となった。 ワークショップ実施にあたっては、中等部メディアメディアセンター司書の島袋恵美さんに協力いただくとともに、日本理化学工業からキットパス 30 ケースを無償貸与いただいた。 またワークショップで制作した絵本は、後日、表紙・まえがき・奥付を付けて、学生の手で製本したものを 11 月に函館で開催された「第 20 回世界に一冊だけの本・展」に出品した。『わたしたちの地域福祉』と題された絵本を当日来場された多くの方に手に取っていただけたようで、その後、さまざまなコメントカードがセンターに届いた。
共催団体	なし
実施風景	    フォーラム（講演＆ワークショップ）

実施風景	  絵本づくり＆出展

事　業　名	2025 年度国際協力プランナー入門（ソーシャルビジネス編）
日　　時	2025/11/22（土）・23（日）10:00 ～ 17:00
場　　所	青山キャンパス　10 号館 2 階 第 23 会議室
参加人数	計 3 名（申込者 9 名）
内　　容	2019 年度から実施している国際協力プランナー入門について、本年度は、従来の政府開発援助や国際協力を中心とした企画・構成を再検討した。近年、大学がアントレプレナーシップ教育に注力しており、その中で社会課題を題材としたプログラムが実施されていることなどを踏まえ、従来の国際協力からソーシャルビジネスの観点を取り上げたプログラムへと企画を刷新した。 導入として、「持続可能な開発と国際協力」の講義、特定非営利活動法人 ACE が考案したワークショップ「おいしいチョコレートの真実」、「ソーシャルビジネスの基礎知識」の講義を行い、その後、フィリピンでのソーシャルビジネスについて、ゲストスピーカーにご講話いただいた。2 日目のゲストスピーカーからは、カンボジアでのエシカルファッションの取り組みおよび日本販売を撤退するまでについてご講話いただき、価値提案、コスト構造・収益化等について話し合い、実際にソーシャルビジネスプランを企画した。予定したカリキュラムを修了した学生には修了証を発行した。
成　　果	1 日目に講義（インプット）、2 日目にソーシャルビジネス企画会議を行った。ビジネスの組み立て方、ミッション、事業の持続性確保の基礎的な考え方について、具体的な事例を通じて深く学ぶことができ、また、企画会議を通じて、インプットした知識をアウトプットすることで、課題を参加者が「自分事」として捉え、課題解決と経済的持続性の両立の難しさを体験的に理解できる内容となった。 これらの経験や知識を活かして「具体的に自分は何ができるのか」「最初の第一歩をどう踏み出すのか」といった、行動に接続する機会の提供が、プログラムの意義をさらに高めるという意見もあり、次年度以降はこれらを踏まえた内容を検討したい。 また、当日は体調不良等による辞退者・欠席者が多かったため、応募者の確保に加えて、季節的な影響の最小化も課題である。
協力団体	特定非営利活動法人 GLM インスティチュート
実施風景	 

事　業　名	コミュニティエンゲージメント勉強会
日　　時	2025/12/10（土）10:00 ～ 13:00
場　　所	青山キャンパス 10 号館第 21 会議室
参 加 人 数	10 名
内　　容	シビックエンゲージメントセンターの活動計画に掲げる「CE/CBL 実践の共有･学院内教員交流」の一環として、本学のサービス・ラーニング科目（青山スタンダード）における実践をもとに、学内教職員を対象とした勉強会を実施した。 取り上げた科目は「サービス・ラーニングとしてのボランティア活動」である。日本社会における多文化共生をテーマに、外国につながる子どもたちへの支援プログラムとして展開してきたこの科目は、今年で開始から 5 年を迎えた。 この節目に、授業内容およびパートナー団体との関係･コミュニケーションのあり方を振り返り、地域社会との連携による教育がいかに形成されてきたかを、大学・地域団体双方の担当者が共に確認した。また、今後のパートナーシップを継続していくうえで重要な点についても検討を行った。
成　　果	今回の機会では、まず本学のサービス･ラーニング科目のカリキュラム上の位置づけ、学習目標、コミュニティエンゲージメントの概念について、協力団体と改めて確認し、共通認識を形成した。続いて、現行プログラムにおける課題を双方から具体的に提示し合い、大学・学生・団体のいずれにとっても意義ある実践となるよう、授業運営側に求められる工夫や改善点について検討した。この過程では、大学と団体担当者が忌憚なく、建設的な対話を行うことができた。さらに、教養科目としてのサービス・ラーニングにおける受講生の知識・姿勢・学びのあり方について、資格取得課程との比較という観点も交えながら議論し、今後の実践に向けた包括的な学びの機会となった。
協 力 団 体	NPO 法人みんなのおうち、認定 NPO 法人チャイルドファンドジャパン、 社会福祉法人さぽうと 21

事　業　名	子どもと関わるはじめの 0 歩～みんなで語ろう！子どもの居場所づくり～
日　　時	2025/12/16（火）18:30 ～ 20:00
場　　所	相模原キャンパス　F 棟 304 教室
参 加 人 数	12 名
内　　容	子ども関係のボランティア活動を行っている学生団体や個人、また今後子ども関係のボランティアをしてみたいと考えている学生を対象に「子どもと関わるはじめの 0 歩～みんなで語ろう！子どもの居場所づくり～」と題した講座形式のイベントを実施した。これは相模原市社会福祉協議会の協力の下、子どもの居場所づくりに関する基礎的な考え方や、学生団体が日々活動している中での悩みの共有やそれに対するヒントを見つけることを目的として企画したものである。所属団体を越えた学生同士のつながりを作ることも意図している。 前半では、相模原市社会福祉協議会子どもの居場所推進員の鈴木愛樹代氏より、地域における子どもの居場所づくりの意義や大学生が関わることの意味、実際の活動の状況や課題について講義形式で説明を頂いた。後半は、参加学生同士による意見交換の時間を設け、各自が関わっている活動内容や日頃感じている悩み、工夫している点などを共有したうえで、それらに対して社協職員の方々よりコメントや助言を頂く形で進行した。
成　　果	本イベントには、普段から子どもと関わるボランティア活動を行っている学生を中心に参加があり、アンケート結果からも高い満足度が確認された。特に、日常的には自団体内での活動に終始しがちな学生にとって、他団体の取り組みや工夫、活動継続や世代交代に対する考え方を直接聞く機会は限られており、このイベントがそうした知見を共有する貴重な機会となったことが推察される。 後半に実施した学生同士の意見交換では、活動へのモチベーションの低下や人手不足、運営上の悩みなど、学生たちの率直な意見が共有され、それに対して他団体の学生や社協職員から実践的な視点でのコメントがなされたことで、参加学生たちにとって、自身の経験を整理し、再評価する機会となったといえる。アンケートの自由記述からも、他の学生や社協職員の話を聞くことで安心感や前向きな気持ちを得たという声が複数見られた。 一方的な講義形式ではなく、対話と共有を重視したことで、参加学生が自らの活動を振り返り、今後の取り組みに生かすための学びを得る機会となった点は、本イベントにおける成果であると思料する。また、参加した学生たちが他団体の学生や社協の方々等と新たなつながりを持つこともでき、今後の継続的な連携や協働の可能性を広げる場ともなった。

協力団体	相模原市社会福祉協議会
実施風景	 

事　業　名	認知症サポーター養成講座（相模原キャンパス）
日　　時	2025/11/26（水）18:30 ～ 20:00
場　　所	相模原キャンパス　F 棟 305 教室
参加人数	12 名（うち教職員 1 名、CEC 学生スタッフ 4 名）
内　　容	認知症を正しく理解し、認知症の方やその家族を応援できる認知症サポーターとしての知識を身につけるための講座を実施した。 今年度は認定 NPO 法人 Link・マネジメント（相模原市チームオレンジサポートセンター センター長）の能勢光氏と RUN 伴さがみはら実行委員長の大島利通氏、相模女子大学ボランティアグループ ミントの学生メンバーを講師に迎え、認知症の基礎知識などについて講義をしていただき、追加トピックスとして RUN 伴の活動や学生が携わるボランティア活動の事例についてもお話しいただいた。また、社会福祉協議会からも活動につながる情報等の紹介をしていただいた。
成　　果	講師の能勢氏は認知症対応型デイサービスや認知症介護者指導の豊富な経験に加え、昨年度まで CEC の市民協働プロジェクトとして取り組んでいた「相武台団地活性化プロジェクト」の受け入れ先として本学の学生とも関わりが多く、本学の学生の特性も踏まえたうえで講義の内容を構成していただいていたと感じられる。大島氏のお話では、認知症当事者や家族・支援者等が地域の人たちと共にたすきをつなぐ「RUN 伴」（ランとも）の活動について、その魅力や活動に関わることのハードルの低さも含め、学生たちに伝えていただいた。相模女子大学ボランティアグループ ミントの方々からは、日々の活動の紹介を通して、同じ相模原地域で同年代の学生たちが意欲的に、また楽しみながら認知症に関わるボランティア活動をしている姿を見せていただき、本学の学生たちにとっても良い刺激になったものと思料する。 また、今回は新たな試みとして CEC 学生スタッフが運営の補助だけでなく司会も含めて当日の運営に関わった。ただ受付や講師の紹介をするだけでなく、学生自身の実体験も含めて感想やコメントを交えながら司会をすることができており、講座参加者としての立場だけでなく、主体的に運営に関わる立場を通して学ぶことができたのではないだろうか。
協力団体	認定 NPO 法人 Link・マネジメント／相模原チームオレンジサポートセンター RUN 伴さがみはら実行委員会 相模女子大学ボランティアグループ　ミント 相模原市社会福祉協議会
実施風景	 

事　業　名	防災ボランティア講習：無線機を使ったコミュニケーションを体験しよう
日　　時	2025/12/10（火）18:00 ～ 19:30
場　　所	相模原キャンパス　F305 室、F308 教室
参 加 人 数	４名（学生３名、学生スタッフ１名）
内　　容	無線機（トランシーバー）が災害発生時の有効な通信手段であることを説明した上で、その特徴や基本的な使い方（機器操作、通話方法）について理解を深めた。その後、受講者２名１組で実機を用いたワークショップを実施した。また、発熱材と水を用いて調理するレスキューフーズを紹介し、実際に調理･試食を行った。後半では、無線機が活用されている災害現場の事例や、能登半島（輪島市・能登町）の避難所で提供されていた食料について、写真を用いて紹介した。
成　　果	大学が所持する無線機を活用し、実践的かつ汎用性の高い講習を実施することができた。災害発生時の学内対応は主に教職員が担うことが想定されているが、災害の状況によっては学生の協力を得ながら対応する可能性があり、その点においても有意義な内容であった。ワークショップ後には、無線機を実際に使用した感想や意見交換が行われ、災害時の活用方法への理解を深めるとともに、日頃の防災への取り組みについて考える機会となった様子がうかがえた。
協 力 団 体	なし
実 施 風 景	  

各種サポート制度

青山学院大学シビックエンゲージメントセンターでは、青学生や教職員向けの活動を支援する様々な制度を設けています。

「災害・復興支援活動に対するサポート制度」
　地震や台風、豪雨など大規模自然災害にかかる災害および復興支援ボランティア活動に参加する学生に対し、経済的負担を軽減することを目的に活動地までの旅費・宿泊費を補助する制度。
（2025 年度の利用なし）

「教職員ボランティア活動補助プログラム」
　教職員の自発的な社会活動への参加を促進するため、社会活動に参加した教職員に対し、条件を満たした場合、交通費の一部支給など、費用補助を行う。
（2025 年度の利用なし）

「ボランティア社会貢献プロジェクト・サポート制度」（通称「ボラサポ」）
　青学生や教職員が主体となって実施するボランティア社会貢献プロジェクトを応援する助成制度として毎年度実施している。
　コーディネーターによるサポートのもと新たに始めたいというプロジェクト向けのスタートアップコースと、これまでの活動をもとにさらに発展させたいプロジェクト向けのステップアップコースがあり、助成金額の上限は前者が 10 万円（昨年度までは 5 万円）、後者が 30 万円となっている。また申請について、前者は 5 月末と 9 月末、後者は 5 月末に応募を受け付けている。
　例年、各コースとも複数のプロジェクトをサポートしている本制度だったが、2025 年度の採択件数はスタートアップコースが 1 件（申請も 1 件）、ステップアップコースが 0 件（申請は 1 件）となった。

2025 年度採択プロジェクト
スタートアップコース 1 件（申請件数 1 件）

プロジェクト名	採択時期	助成金額
ゆるりと過ごせる、中高生の居場所づくりプロジェクト	2025 年　6 月	11,723 円

ステップアップコース 0 件（申請件数 1 件）

【スタートアップコース】

プロジェクト名	ゆるりば
日　　時	2025/8 ～ 2026/2
場　　所	相模原市　青少年学習センター　他
内　　容	学校や家庭に居場所を見出しにくい中高生を主な対象として、中高生が安心して過ごすことのできる「第 3 の居場所」を提供することを目的に、居場所づくりの活動を実施した。本活動の実施に当たっては、類似の取り組みを行っている団体にヒアリングを行い、また実際にその団体での活動も経験しながら先行事例の理解を深め、大学生がそうした居場所を提供することの意義や関わり方について検討を行いながら準備を進めた。

内　　容	活動の企画においては、「自由に過ごせること」「安心できること」を重視し、無理に会話や参加を促さないこと、参加者のペースを尊重することなどを基本方針とした。また、活動内容をあらかじめ細かく定めるのではなく、当日の参加者の様子やニーズに応じて柔軟に対応できる構成とすることで、中高生が主体的に、またリラックスして過ごせる場となるよう工夫した。 居場所提供の活動は月に２回程度、相模原市の青少年学習センター講習室・和室等を会場として実施し、中高生が自由に訪れ、大学生との交流やゲーム、会話などを通して思い思いに過ごすことができる時間と空間を提供した。また、クリスマスイベントなど季節に応じた企画も取り入れることで、参加のきっかけづくりを図った。 当日の運営においては、受付時に参加者の過ごし方の希望を確認し、それに応じた関わりを行うことで、提供する場と参加者のニーズの乖離が生じないよう配慮した。活動中はカードゲーム等をきっかけに自然な交流を促しつつ、参加者の様子を丁寧に観察し、必要に応じて個別に声を掛けるなど、安全面および倫理面への配慮を重視した。また、特定の参加者に過度な注目が集まらないようにしたり、踏み込みすぎた話題には立ち入らないようにするなどといった点にも留意した。 広報については、SNS を活用し、途中参加・退出が可能であることを明示するなど、参加のハードルを下げる工夫を行ったほか、他団体との連携や市内の学校へのチラシ配布を通して周知を図った。活動後は参加者アンケートを実施し、大学生メンバーによる振り返りを行うことで、次回以降の改善につなげた。
成果・展望	本活動を通じて、年齢や学校の異なる中高生と大学生が同じ場で時間を共有し、自然な交流が生まれる場を創出することができた。ゲームや会話をきっかけとした関わりの中で、参加者が無理なく他者とつながる機会が生まれ、「楽しかった」「また来たい」という声が多く寄せられるなど、活動の目的であった居場所の提供は一定程度達成されたといえる。 また、学校や家庭とは異なる第３の居場所を提供することで、参加者にとって日常の環境から一時的に離れられる機会となり、心理的な安心感の醸成や孤立感の軽減につながったと考える。特に、普段は学校に通いづらさを感じている参加者や、悩みを抱えている参加者が、活動中にはリラックスした様子で過ごし、笑顔を見せていたことから、自分らしくいられる場として機能していたことがうかがえる。 運営側の学生にとっても、活動を通して多くの学びを得ることができた。企画立案から準備、運営、振り返りまで一連のプロセスを通して、マネジメント能力やコミュニケーション能力の向上が見られたほか、中高生という繊細な年代の対象者への関わり方について試行錯誤を重ねながら実践的に学ぶことができた。また、活動を通してメンバー間の関係性も深まり、大学生自身とっても安心して過ごせる居場所としての側面を持つようになった。 課題としては、参加者の継続的な確保や広報のあり方、活動を支える大学生側の負担調整といった点が挙げられるが、全体として本活動を通して学生たちが主体的に社会的課題に関わり、実践として取り組み、一定の成果をあげられたものといえる。
実 施 風 景	 

「AOGAKU ボランティアネットワーク」

　シビックエンゲージメントセンターでは 2020 年度から学生ボランティア団体と繋がり、団体の活動を促進させる目的で AOGAKU ボランティアネットワークを立ち上げています。
　このネットワークには学友会組織に所属しない学生任意団体も参加することが可能であり、2025 年度は青山・相模原両キャンパスで 15 団体の登録がありました。

＜青山キャンパス＞

青山子ども会	あらとぅ　～ innovation around 20 ～
IES ボランティア愛好会（旧 STUDY FOR TWO ）青山学院大学支部	しぶっこ渋谷区こどもテーブルボランティア愛好会
学生団体　Youth for Ofunato	国際政治経済学部公認団体 SANDS
TsunAGU ボランティア愛好会	SHANTI SHANTI 国際ボランティア愛好会

＜青山キャンパス・相模原キャンパス＞

アイセック青山学院大学委員会	MF3.11 東北応援愛好会

＜相模原キャンパス＞

fan × fun 学生ボランティア愛好会	青山学院大学 SIVA ボランティア愛好会
ゆめどこ	Le Lien（ルリアン）ボランティア愛好会
明るい村づくりの会　青学支部	

青山スタンダード科目

正課での取り組み（青山スタンダード科目）

青山スタンダードで開講されている科目として、ボランティア活動やサービス・ラーニング等に関する授業を実施し、学生が地域社会への理解を深め、活動に参加することにつながる取り組みを行った。

【サービス・ラーニング科目】
青山キャンパス開講科目

■　サービス・ラーニングⅠ（前期）

サービス活動とは何かを学んだ上で、NPO 法人等のゲストスピーカーの講義と活動への参加を通して、社会課題に取り組む現場への理解を深めた。今年度はアジア・アフリカから派遣された学生に農村指導者研修を行う団体、難民の住まいや暮らしを支援する施設を運営する団体、渋谷区で子ども食堂を実施する団体にご協力いただいた。

〈連携団体〉
- 学校法人アジア学院
- NPO 法人アルペなんみんセンター
- 渋谷区こどもテーブル

■　サービス・ラーニングⅠ（前期）

「グローバル時代の社会課題」（外と内の両面から）をテーマにして、サービスの視座と姿勢を学ぶことを目的とし、国際協力団体として主に子どもたちを支援する２つの団体との連携のもと実施した。各団体のニーズにそって、海外の拠点（ネパール、カンボジア）とのコミュニケーションを重ね、本学初等部とも協働し、教育支援とアドボカシーなどのサービス活動に取り組んだ。

〈連携団体〉
- 認定 NPO 法人 チャイルド・ファンド・ジャパン
- 認定 NPO 法人 グローブジャングル

■　サービス・ラーニングとしてのボランティア活動（前期）

外国につながる子どもたちへの学習支援の取組を通して日本社会における「多文化共生」の課題について理解を深めた。近年増加している多様なルーツや背景を持つ子どもやその家族が地域社会で暮らし、教育を受ける環境づくりを支えている２団体での実習を実施した。

〈連携団体〉
- NPO 法人 みんなのおうち
- 社会福祉法人 さぽうと 21

■　サービス・ラーニングⅡ（後期）

社会の課題をビジネスの手法で解決することを目指すソーシャルビジネス（社会的企業）をテーマに、ゲストスピーカーの講義と学外での活動を通して問題解決へのアプローチを学んだ。今年度は地域社会づくりに向けてタウンカフェなどを運営する企業、マイノリティの問題解決を目指す企業、障がいのある人が一流の革職人を目指す革工房を運営する企業、電子機器のリユース・リサイクル事業を子ども・難民支援につなげる企業にご協力いただいた。

〈連携団体〉
- 株式会社イータウン
- 株式会社ゼネラルパートナーズ
- UNROOF（株式会社ボーダレス・ジャパン　グループ）
- ピープルポート（株式会社ボーダレス・ジャパン　グループ）

■　**サービス・ラーニングⅢ（後期）**

グローバルな社会課題への取り組みをテーマに、カンボジアとフィリピンの現場での活動を中心としたプログラムを実施した。事前学習を通して現地の状況や社会的取り組みへの理解を深めた上で、カンボジアでは子どもや地域住民と交流し、支援の姿勢や視点を学んで。フィリピンでは、地域課題に向き合いながら多国籍の学生と協働し、実践的な学びと異文化理解を深めた。

〈連携団体〉

・フィリピンでのプログラム：Trinity University of Asia
・カンボジアでのプログラム：認定 NPO 法人グローブジャングル

相模原キャンパス開講科目

■　**サービス・ラーニングⅠ（後期）**

ボランティアや社会課題に関わる活動を経験した人を対象に、活動の記録や振り返りを通して学びを深めた。さらに、その経験を今後の活動計画や自分の成長に生かす方法（サイクル）を身につけ、それを他の人にもわかりやすく伝えられるようにするための実践的な学習を行った。

〈ゲストスピーカー協力者〉

・NPO 法人サービスグラント　柴岡久美子氏

■　**サービス・ラーニングⅡ（前期＋夏期集中）**

「被災地に学び､繋がる」をテーマに､東日本大震災の被災地である岩手県宮古市をフィールドに､地域の課題や復興の歩みを学んだ。青山学院大学と宮古市のこれまでの関わりを通して、互恵的な関係を継続する重要性を理解し、防災や持続可能なまちづくりについて考えること目指し。宮古市役所や小学校、NPO、漁業組合でのサービス活動を行った。

〈連携団体〉

・宮古市役所
・鍬ケ崎小学校
・磯鶏・高浜小学校
・NPO 法人みやっこベース
・重茂漁業協同組合

【その他の科目】

■　**ボランティア・市民協働論（青山・相模原キャンパス前期）**

学生にとって身近に参加できるボランティア活動についての基本的理解をはじめ、青山学院と地域社会との連携の歴史、シビックエンゲージメントセンターでの活動やサービス・ラーニング科目について理解を深めた。ゲストスピーカーとシビックエンゲージメントセンターのコーディネーターが話題を提供し、幅広い切り口から社会理解を深めるための講義を実施した。

〈ゲストスピーカー協力者〉

・認定 NPO 法人 チャイルド・ファンド・ジャパン　藤井翼氏
・NPO 法人 tannely（タネリー）藤田のえ氏・宮田真知氏

■　**現代社会の諸問題（相模原キャンパス・後期）**

多文化共生とグローバル市民教育をテーマに、日本社会の現状と課題を考え、特に外国にルーツをもつ子どもの教育に焦点を当てて学びを深めた。多文化理解を促す団体や、外国人の住まいや生活支援を行う団体、進路選択に寄り添う教員の現場の声に触れ、誰もが尊厳をもって生きられる社会の実現に向けて必要な知識・態度・行動について探求した。

〈ゲストスピーカー協力者〉

・NPO 法人かながわ外国人すまいサポートセンター　裵安氏
・公益財団法人かながわ国際交流財団　藤分治紀氏
・黒田協子氏

■　**フレッシャーズセミナー（青山キャンパス後期）**

１年生の履修者が、渋谷の地域コミュニティと住民主体の取組みから、ボランティアや市民活動への参加につながる基礎的な理解を深めた。地域社会に存在する具体的な課題に触れるとともに、その背景にある社会的要因を理解することを重視した。また、行政・企業・市民活動団体など、地域において形成されている住民ネットワークや課題解決に向けた取組みについて学び、実践的な視点を養った。

〈ゲストスピーカー協力団体〉

・みんなの世界テーブル
・渋谷区役所
・渋谷区社会福祉協議会
・NPO 法人そるな

■　**地方行政を通して相模原を知る（相模原キャンパス 前期）**

相模原市の寄附講座として設置され、同市から派遣された職員が講師を務め、相模原市の歴史、自然、観光、産業振興など幅広いテーマが扱われた。市の成り立ちや地域特性を踏まえ、行政の立場から都市の現状と課題、将来の展望について具体的な解説が行われた。受講生は、身近な地域を多角的に理解するとともに、地域社会と大学との関係性について考察する視点を養い、今後の市民協働プロジェクト等に取り組むための基盤を形成することができた。

■　**フレッシャーズ・セミナー（相模原キャンパス 後期）**

「ボランティアと社会貢献」をテーマに、ボランティアの基本概念や歴史をはじめ、地域社会や国際社会が直面する多様な課題について取り上げ、それらに対する民間の取り組みや実践事例を通じて理解を深めた。また、障害福祉や国際協力分野の実践者による講義を通じて、現場の視点に触れる機会を設けた。本科目は１年次生を対象としており、ライフデザインについて考える機会を提供するとともに、ボランティア活動の情報収集の方法や外部団体との連携に関する基本的事項についても扱った。終盤には受講生によるプレゼンテーションを実施し、主体的に学びを深める機会とした。

〈ゲストスピーカー協力者〉

・障害福祉サービスローグ　井上真吾氏
・ドキュメンタリー写真家　森祐一氏

アドバイザー・グループ（アドグル）

テ　ー　マ	珈琲を知り、つながりを広げ、深める
活 動 場 所	石川県能登町、山梨県上野原市　ほか
参 加 人 数	15 名
内　　容	「一杯の珈琲から広がる出会いと学び」をテーマに、三神アドバイザー・グループでは、山梨県上野原市の logue と連携し、カフェ、福祉、地域、災害、国際協力について多角的に考える活動を展開している。 2025 年度の活動は、6 月のオンライン顔合わせに始まり、能登半島の歴史・文化に関する勉強会を重ね、夏期休業期間には民際協力 NGO パルシックの協力のもと、能登町および周辺地域を訪問した。9 月以降は上野原市を主なフィールドとし、地域の祭りや logue で開催されるイベントなど、多様な活動に参加した。各回の活動後には、食事をともにしながら感想や気づきを共有する時間を大切にしてきた。logue は、障害福祉サービスとカフェが一体となったユニークな場であり、学生たちはイベント運営やワークショップへの参加を通じて、カフェの「居場所」としての機能や、地域におけるインクルーシブな関係づくりについて理解を深めてきた。 学生にとって、学外で多様な人々と出会い、考えを深める本活動は、自身の関心や他者との関わり方を見つめ直す貴重な機会となっている。一杯の珈琲から広がるつながりが、それぞれの新たな挑戦へと発展していくことを期待したい。
実 施 風 景	 

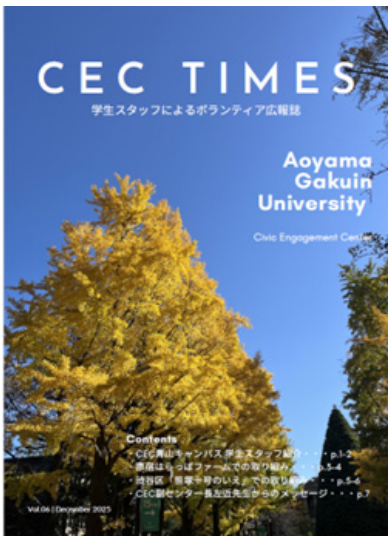
学生スタッフの活動

事　業　名	ボランティアオリエンテーション
日　　時	2025/4/3（木）、4（金）　12:40 ～ 13:10
場　　所	相模原キャンパス　シビックエンゲージメントセンター
参 加 人 数	4/3：9 人　　4/4：2 人
内　　容	新入生だけでなく在学生も対象に、社会貢献活動に関心はあるものの参加方法や活動内容が分からない学生に向けて、ボランティアオリエンテーションを開催した。学生スタッフとして、スライドの作成と当日の進行を担当した。内容としては、「ボランティアとは何か」という基礎的な説明から始め、シビックエンゲージメントセンターの概要、学内ボランティアプログラムの紹介、青山スタンダード科目の説明まで段階的に伝えた。また、終了後には個別相談の時間を設け、参加への不安や疑問に対して一人ひとりに対応した。
成　　果	新入生を中心に、「何か始めたいが何から始めればよいか分からない」という漠然とした不安を持つ学生に対し、ボランティアの具体的な参加方法や活動内容を伝えることで、行動のきっかけを提供することができた。
実 施 風 景	

事　業　名	ユニコムプラザさがみはら「まちづくりフェスタ」の展示
日　　時	2025/10/1（水）～ 10/31（金）
場　　所	相模原市立市民・大学交流センター（ユニコムプラザさがみはら）
内　　容	「まちづくりフェスタ」とは、大学と地域の交流拠点ユニコムプラザさがみはらで実施されている地域活動や、大学の生涯学習講座・実用化研究成果、学生の地域連携活動等を発表し、相互に学び合うことを目的とするイベントである。今回は、CEC について、そして学生スタッフについて、市民協働プロジェクトについてのポスターを作成し、展示する機会をいただいた。
成　　果	地域で行われたイベントにおいてポスター展示を実施し、ポスターを通じて、地域の方々に活動を紹介することができた。学内中心である広報活動を地域へと広げることで、学生だけでなく地域住民にも活動を知ってもらう機会ができた。また、「まちづくりフェスタ」では、同じ相模原市内の他大学や地域団体の活動についても知ることができ、新たな発見があるとともに、良い刺激にもなった。
実 施 風 景	

事　業　名	学生スタッフによるボランティア広報誌「CEC TIMES」
日　　時	CEC TIMES vol.6 発行　2025/12 CEC TIMES vol.7 発行　2026/2
内　　容	シビックエンゲージメントセンター学生スタッフが、活動目的の一つとなる「青学生のボランティア活動の啓発・発信」に基づいて作成した広報誌である。内容としては、当センターの企画やセンターに関わる学生のボランティア活動、地域活動やボランティア活動に取り組んでいる青学生などについて掲載している。活動を発信していくことで、ボランティア活動への取り組みやすさや積極性などを向上する目的も含まれている。また、実際に取材や作成・編集などを行う学生スタッフ自身も、活動の振り返りを行ったり、発信する上でのスキル向上に結びついたりなど、良い機会になっている。今年度は青山キャンパスの学生スタッフが中心となって vol.6 を、相模原キャンパスの学生スタッフが中心となって vol.7 をそれぞれ作成した。
成　　果	地域で活動を行っている方と学生スタッフが手を組んで実施した企画や、当センター主催の市民協働プロジェクト、積極的にボランティア活動・地域活動を行っている学生の取材記事などを掲載し、地域とのつながりや青学生の積極的な関りを表現できたと感じている。 CEC TIMES は、学内に設置させていただけることや、シビックエンゲージメントセンターの活動報告会などでも置いていただけたことから、多くの人々に手に取っていただくことができた。

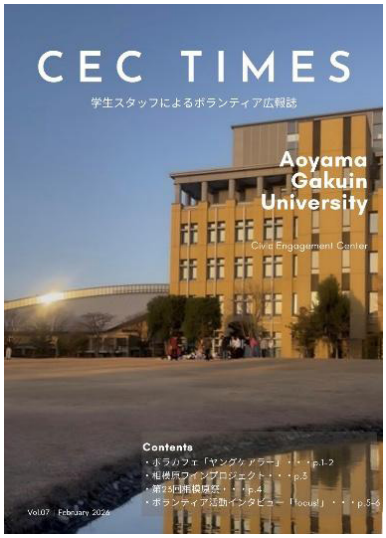
CEC TIMES vol.6







CEC TIMES vol.7







事　業　名	Instagram の活用
日　　時	2025/4 ～ 2026/3
内　　容	青学生へのシビックエンゲージメントセンターの取り組みやイベント情報などの情報発信・周知を目的として運用している。発信内容としては、講習やイベントに関して、内容を発信する広報や、メンバー募集に関する内容、活動記録などを主に取り扱った。 青山キャンパスの学生からは、今年度精力的に関わった原宿はらっぱファームの学生有志チームの活動について紹介する投稿（畑で収穫したハーブでハーブティー体験や入浴剤作りを行う）もあった。 アカウント：@ aogaku_cec 投稿数：23 件 フォロワー：308 人 (2026 年 3 月 29 日時点)
成　　果	@AOGAKU_CEC

事　業　名	CEC 企画運営参画
日　　時	2025/11/26（水）、12/10（水）
場　　所	相模原キャンパス
内　　容	シビックエンゲージメントセンター主催で 11 月 26 日に認知症サポーター養成講座、12 月 10 日に防災ボランティア講習が開催され、運営補助として学生スタッフも参加した。防災ボランティア講習では、CEC 公式 Instagram へのチラシの投稿や、当日の教室の準備、参加者とペアになり無線機使用の実践等を行った。認知症サポーター養成講座では、コミュニティ人間科学部授業内でのチラシ配り・宣伝、当日の会場設営、司会進行等を行った。
成　　果	学生スタッフとして実際に講座に参加することで参加学生とのコミュニケーションを取ることができた。また、特に認知症サポーター養成講座の授業内でのチラシ配り・宣伝は、シビックエンゲージメントセンターと講座を効果的に広める機会となった。
実施風景	 

事　業　名	ボラカフェ企画運営
日　　時	2026/ 1 /14（水）
場　　所	相模原キャンパス
参 加 人 数	10 人
内　　容	「ヤングケアラーについて知る・学ぶ・支える勉強会～となりにいるかもしれない「ヤングケアラー」ちょっと知ってみませんか？」と題して、ボラカフェの企画実施を行った。ケアラーズカフェモンステラの方と元ヤングケアラーの方を講師としてお招きし、ヤングケアラーについての基礎知識等の講義だけでなく寸劇や体験談も交えてお話いただいた。本事業において学生スタッフは、企画立案から先方との打ち合わせ、チラシの作成、授業内でのチラシ配り・宣伝、当日の会場設営、司会進行等を行った。
成　　果	学生スタッフが初めてボラカフェの企画に携わった。3 限にあたる時間で開催したことに加え授業内での宣伝の効果から、当日は 10 人の参加者が集まった。参加者からは、ヤングケアラーという言葉は知っていたけれど、実際の現状や経験者の方のお話を聞くことができて、身近に感じるようになったといったコメントが寄せられた。
実 施 風 景	 

Ⅲ　資料

シビックエンゲージメントセンター利用状況

センター利用状況

参加者とリピーター数

（単位：人）

延べ人数	440
参加人数	371
リピーター	53

参加カテゴリー

（単位：人）

セミナー・講座	233
ボランティア活動	204
シンポジウム	0
災害・復興ボランティア補助	0
教職員参加補助	3
	440

参加形態

（単位：人）

対面	266
オンライン	174
	440

参加者の属性（所属学部）と活動分野

（単位：人）

	活動分野	国際協力・交流	災害・復興支援	ジェンダーマイノリティ	スポーツ	子ども支援	教育	環境整備	清掃	福祉	地域	その他	総計
学部生	属性	3	27	0	13	45	38	0	0	41	92	117	376
	文学部	0	1	0	2	2	11	0	0	2	13	14	45
	教育人間科学部	0	1	0	2	3	3	0	0	1	6	5	21
	経済学部	0	1	0	2	0	4	0	0	1	5	7	20
	法学部	1	3	0	0	2	3	0	0	2	11	12	34
	経営学部	0	0	0	0	2	3	0	0	2	3	1	11
	国際政治経済学部	1	1	0	0	1	0	0	0	1	5	3	12
	総合文化政策学部	0	0	0	1	1	3	0	0	0	5	6	16
	理工学部	0	1	0	0	0	3	0	0	2	7	6	19
	社会情報学部	0	1	0	1	0	0	0	0	0	5	2	9
	地球社会共生学部	1	1	0	0	0	0	0	0	0	8	11	21
	コミュニティ人間科学部	0	10	0	5	34	0	0	0	25	24	31	129
	不明	0	7	0	0	0	8	0	0	5	0	19	39
大学院生		0	0	0	0	4	3	0	0	0	7	0	14
	総合文化政策学研究科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	国際政治経済学研究科	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	4
	経営学研究科	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	会計プロフェッション研究科	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2
	国際マネジメント研究科	0	0	0	0	2	1	0	0	0	2	0	5
	教育人間科学研究科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	文学研究科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	理工学研究科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
	経済学研究科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	社会情報学研究科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
科目履修生		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
交換留学生		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
教員		0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
職員		0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	3
一般（学外）		0	15	0	0	0	0	0	0	14	0	3	32
不明		0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	8	10
総計		3	50	0	13	49	41	0	0	56	99	129	440

ボランティア情報取扱数

1. 団体登録件数（新規登録団体）

青山	147 件（13）
相模原	63 件（ 7）

2. ボランティア等募集件数

青山	553 件
相模原	121 件

3. カテゴリー別ボランティア等募集件数

カテゴリー	青山	相模原
ボランティア募集	120 件	51 件
ニュースレター	339 件	25 件
講座・セミナー	41 件	11 件
イベント	25 件	28 件
助成金情報	10 件	2 件
インターン	8 件	2 件
シンポジウム	4 件	1 件
その他	6 件	1 件
合計	553 件	121 件

4. 領域別ボランティア等募集件数

領域	青山	相模原
災害救援・復興支援	8 件	4 件
社会福祉	29 件	26 件
環境保護	30 件	22 件
教育支援	44 件	13 件
スポーツ・文化・芸術	10 件	4 件
国際協力・交流	40 件	15 件
まちづくり	14 件	7 件
ジェンダー・マイノリティ	11 件	14 件
全般	367 件	16 件
合計	553 件	121 件

シビックエンゲージメントセンター利用状況

2025 年度

青山	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
来室者数	244	91	65	100	18	19	64	148	75	61	59	21	965
相談件数	6	2	2	2	0	0	2	0	2	1	0	0	17

2024 年度

青山	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
来室者数	161	150	120	143	24	48	154	198	79	82	21	81	1,261
相談件数	18	10	12	5	0	2	5	0	2	2	0	1	57

前年度比

青山	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
来室者数	＋ 83	▲ 59	▲ 55	▲ 43	▲ 6	▲ 29	▲ 90	▲ 50	▲ 4	▲ 21	＋ 38	▲ 60	▲ 296
相談件数	▲ 12	▲ 8	▲ 10	▲ 3	0	▲ 2	▲ 3	＋ 0	＋ 0	▲ 1	＋ 0	▲ 1	▲ 40

2025 年度

相模原	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
来室者数	94	47	54	41	12	11	88	60	45	37	13	40	542
相談件数	10	5	7	7	0	1	4	4	5	1	0	0	44

2024 年度

相模原	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
来室者数	117	79	95	54	7	40	170	80	51	42	27	19	781
相談件数	8	4	3	2	0	0	1	6	1	0	5	2	32

前年度比

相模原	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
来室者数	▲ 23	▲ 32	▲ 41	▲ 13	＋ 5	▲ 29	▲ 82	▲ 20	▲ 6	▲ 5	▲ 14	＋ 21	▲ 239
相談件数	＋ 2	＋ 1	＋ 4	＋ 5	＋ 0	＋ 1	＋ 3	▲ 2	＋ 4	＋ 1	▲ 5	▲ 2	＋ 12

青山　相談内容

日付	相談区分	相談内容
4月	海外ボランティアについて	ウクライナ支援ボランティアについて。6～9月くらいに活動してみたい。
	国内ボランティアについて	空きに一般心理か臨床心理かを選択する必要があるため、その前にボランティア経験したい。
	海外ボランティアについて	夏休みの海外ボランティア情報を知りたい。
	国内ボランティアについて	CEC 認定団体である TsunAGU ボランティア愛好会に興味があるが、連絡が付かない。
	組織運営・活動について	新ボランティア団体を作るための概要を知りたい。 青学生が留学生を支援する団体を作りたい。
	国内ボランティアについて	フードロス、まちづくりのボランティアに興味あり。 就活前に関係のある分野のボランティア活動に関わってみたい。
5月	国内ボランティアについて	ボランティア活動に参加したい。
	国内ボランティアについて	カナダ NGO とのコラボ～ Youth Empoweing Parents というカナダの NGO とコラボして青学でボランティアをしたい。YEP は教育系 NGO で学びたい人（大人）と Yourh Volunteer をつなげて学びの輪を広げる団体。活動に必要な資金は上限付きで支援してれるため青学（日本）支部として活動できないか。
6月	国内ボランティアについて	就職活動を始める中で、まだ大学生活で特に何もできていないと気づいた。また、人や企業を支える仕事に興味がある。ボランティア活動をすることで新たな発見があるのではないかと思い、ボランティア活動全般について知りたい。
	その他	学生スタッフ応募についての相談。
7月	国内ボランティアについて	どんな国内ボランティアを行っているか。
	その他	学生団体登録についての相談 ・初頭部に教員プログラムを提言 ・マクレイ記念館の緑地活用
10月	国内ボランティアについて	シャンティ・シャンティの活動でボランティアの受け入れ先を見つけたい。
	国内ボランティアについて	国内外問わず国際関係のボランティアをしたい。
12月	海外ボランティアについて	海外ボランティアについての相談。
	その他	合同イベントのクラウドファンディング（しぶっこ、一般社団法人 kid's Garden、東京渋谷ローターアクトクラブ、SHIBUYA CITY FC）に学校名を記載してもよいか。
1月	その他	個人でICYE経由で春休みにインドで英語を教えに行く。単位に認定されるか。

相模原　相談内容

日付	相談区分	相談内容
4月	国内ボランティアについて	学生ポータルで流れてきたキャンプの情報を知りたい。
	国内ボランティアについて	社）多摩区ソーシャルデザインセンターのスタッフをしており、イベントのボランティアを募集したい。
	国内ボランティアについて	特にジャンルの希望はないが、近所（大学周辺）でボランティアをしてみたい。
	国内ボランティアについて	就活もあるのであまり多くは参加できないが福祉関係のボランティアに興味がある。
	国内ボランティアについて	ボランティア活動先より大学でボランティア募集のチラシを掲示してほしいと依頼があった。

４月	国内ボランティアについて	不登校気味の子どもの支援など、若者の居場所づくりの活動を始めたい。ボラサポスタートアップコースへの応募を検討しており、企画書も現在作っているので見てほしい。
	国内ボランティアについて	高校時代に公営塾の活動を通して地域活性化の活動経験がある。相模原でも高校生を巻き込んだ地域活性化の活動・団体を立ち上げたい。ボラサポスタートアップコースに応募して団体の立ち上げも検討している。
	国内ボランティアについて	ボランティア活動をしてみたい。どのようなボランティア活動があって、どのように参加するのか。
	国内ボランティアについて	何かボランティアをしたい。地域活性化系の活動等ないか。
	国内ボランティアについて	中学生の参加者を増やす方法について相談。
５月	その他	災害発生後に被災地でボランティアとして活動するために普段から取組むこと等相談。
	国内ボランティアについて	地域で住民と触れ合う活動がしたい。
	組織運営・活動について	個人活動。探求型学習のアンケートや探求型学習に関するイベントを相模原市内の高校で実施したい。
	組織運営・活動について	能登半島に高校生を連れていき、被災地の復興の様子や現地の高校生と交流するスタディーツアーを企画し実施する。本日、ボラサポスタートアップコース制度の存在を知り応募についての相談。
６月	その他	笹塚（青山）プロジェクト説明会に現地参加を希望しているが必修授業があるため別途ご対応のお願い。
７月	海外ボランティアについて	小学生時代にオーストラリアに居住しており、バヌアツに訪問した経験を通じて、国際協力および海外の問題解決に関心がある。また、将来的には国際協力でのキャリア形成を視野に入れており、話を聞きたい。
	国内ボランティアについて	学習支援や無料塾等、子ども支援や若者の居場所づくりの活動に興味がある。
９月	組織運営・活動について	ウェスレー財団のカンボジアでの活動に参加した。子どもの教育環境の改善に貢献できることについて相談。
10 月	国内ボランティアについて	相模原祭を見学し何か活動したいと考えている。 保護猫カフェに訪れたことがあり保護猫を啓蒙するような企画を相模原祭で出展したい。
	その他	町田市生涯学習センター主催のガクマチ EXPO に参加しているが、今年度は参加団体が減りそうな為相談。
	海外ボランティアについて	飢餓や貧困に興味があり、将来は国連職員になりたいと思っているが、どのような進路を選べばよいか。 JICA 青年海外協力隊について知りたい。
11 月	組織運営・活動について	ボランティア参加促進。当事者意識の低い方へボランティアとして参加してもらうための工夫を知りたい。
	国内ボランティアについて	何かボランティアをしてみたい。地元の横浜市が好きで、将来は横浜市役所か神奈川県庁に就職したい。
12 月	海外ボランティアについて	ボランティア募集に掲載されていたフィリピンスタディツアー（NPO 法人アクション）について知りたい。
	組織運営・活動について	ボランティア企画の参加者を増やしたい。
	組織運営・活動について	学生団体ヒヤクキチが主催する「さがみはら学生祭」に出店してくれる団体を探している。
	その他	オープンキャンパス学生スタッフの活動で、CEC の業務内容についてインタビューをしたい。
	海外ボランティアについて	ボランティア募集等のポスターを掲示して欲しい。

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター規則

（2016 年 11 月 24 日理事会承認（2022 年 2 月 24 日全部改正））

改正　2022 年 9 月 29 日　2023 年 12 月 14 日

（趣旨）

第 1 条　この規則は、青山学院大学学則（以下「学則」という。）第 5 条の 3 第 4 項の規定に基づき、青山学院大学シビックエンゲージメントセンター（以下「センター」という。）の目的、事業、組織等について必要な事項を定めるものとする。

（センターの目的）

第 2 条　センターは、学則第 5 条の 3 第 2 項の事業として学校法人青山学院（以下「本法人」という。）が設置する学校（以下「設置学校」という。）に在籍する学生、生徒、児童及び園児並びに本法人の教職員が、主体的に多様なニーズに応える社会貢献活動を体験し、又は学問領域の枠にとらわれない知識を修得し、他者とともに未来の国際社会及び地域社会を創造する市民として、かつ、全ての人と社会のために仕えるサーバント・リーダーとして成長するよう支援することを目的とする。

（定義）

第 2 条の 2　この規則において、次の各号に規定する用語の意義は、それぞれ当該各号に規定するところによる。

（1）　機構長　青山学院大学社会連携推進機構規則第 5 条第 1 項の機構長をいう。

（2）　専任教員　学校法人青山学院寄附行為細則第 11 条第 3 項第 1 号イの教授又は准教授をいう。

（3）　機構会議　青山学院大学社会連携推進機構規則第 6 条の 2 の社会連携推進機構会議をいう。

（センターの事業）

第 3 条　センターは、第 2 条の目的を達成するため、ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等の社会との連携を通じた教育研究及び設置学校間の連携に係る次に規定する事業を行う。

（1）　ボランティア及び市民協働に関する活動の実施及び促進に関すること。

（2）　ボランティア及び市民協働に関する活動の情報収集及び管理に関すること。

（3）　ボランティア及び市民協働に関する活動への参画機会の提供並びに参画する学生及び団体の支援に関すること。

（4）　サービス・ラーニング科目等の開発支援及び促進に関すること。

（5）　設置学校におけるボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等の支援及び促進に関すること。

（6）　ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等に関する学内外の専門家及び関連団体との連携の促進に関すること。

（7）　ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等に関する調査及び研究に関すること。

（8）　センターの活動に関する成果の報告に関すること。

（9）　前各号に規定するもののほか、センターの目的達成に必要な事業

（センターの組織）

第 4 条　センターに、センター長 1 名を置く。

2　センターに、副センター長 1 名を置く。

3　センターに、助教若干名を置く。

4　センターに、助手若干名を置く。

5　センターの運営等に係る重要事項を審議するため、センターにシビックエンゲージメントセンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

6　センターの運営等に必要な事項を検討するため、運営委員会の下にシビックエンゲージメントセンター実務委員会（以下「実務委員会」という。）を置く。

（センター長）

第 5 条　センター長は、センターの事業を統括し、センターを代表する。

2　センター長は、機構長が専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

3　センター長の任期は、2 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4　センター長は、再任されることができる。

（副センター長）

第 6 条　副センター長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるときは、その職務を代理する。

2　前項に規定するもののほか、センター長は、必要があると認める場合は、副センター長にその職務の一部を臨時に代理させることができる。

3　副センター長は、センター長が専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

4　副センター長の任期は、2 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5　副センター長は、再任されることができる。

（センター助教）

第 7 条　センターの助教（以下「センター助教」という。）は、学校法人青山学院助教に関する就業規則（以下「助教に関する就業規則」という。）の定めるところにより雇用された、センターに所属する助教とする。

2　センター助教は、青山学院大学（以下「本学」という。）のいずれかの学部又は専門職大学院研究科（以下「学部等」という。）に分属する。

3　センター助教は、コーディネーターの呼称を使用することができる。

（センター助教の職務）

第 8 条　助教に関する就業規則第 4 条第 4 項の規定によるセンター助教の職務は、同条第 1 項に規定するものに加えて、次のとおりとする。

（1）　第 3 条に規定するセンターの事業に係る業務

（2）　前号に規定するもののほか、センター長が必要と認めた業務

（センター助教の資格）

第 9 条　センター助教は、助教に関する就業規則第 5 条第 1 項の規定により、青山学院大学専任教員の任用及び昇任に関する規

則（以下「専任教員任用昇任規則」という。）第２条第４項各号のいずれかに該当する者でなければならない。
2　前項に規定するもののほか、助教に関する就業規則第５条第２項の規定によるセンター助教の資格は、ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等の社会との連携を通じた教育研究に係る専門的知識を有する者で、センターの事業を遂行するために必要な能力を有するものとする。

（センター助教の雇用手続）

第 10 条　センター助教の雇用は、次項から第５項までの規定による。
2　センター長は、センター助教の候補者の雇用が適当であると認めたときは、運営委員会の審議を経て、学長に、センター長による推薦状、当該候補者の経歴、業績等が明記された書類その他必要と認められる書類を添えて、その候補者の雇用を発議する。
3　学長は、前項の規定による発議を適当と判断したときは、学部長会にこれを付議する。この場合において、前項の候補者が雇用された場合の分属学部等について、併せて付議する。
4　前項の学部長会において、候補者を雇用することが可とされ、かつ、その分属学部等が決定した場合の当該候補者の雇用の決定は、専任教員任用昇任規則第３条第１項第３号から第６号までに規定する手続を経なければならない。この場合において、同項第３号中「学部長等」とあるのは「分属先の学部等（以下「分属学部等」という。）の長」と、「当該専任教授会」とあるのは「当該分属学部等の専任教授会」と、同項第４号中「専任教授会」とあるのは「分属学部等の専任教授会」と、同項第５号中「学部長等は、専任教授会」とあるのは「分属学部等の長は、当該分属学部等の専任教授会」とする。
5　専任教員任用昇任規則第３条第１項第４号の審査委員会については、同規則第４条の規定を準用する。この場合において、同条第１項中「専任教授会」とあるのは「分属学部等の専任教授会」と、同条第２項本文中「当該学部等」とあるのは「分属学部等」と、同項ただし書中「当該学部等」とあるのは「当該分属学部等」と、「他学部」とあるのは「分属学部等以外の学部」と、同条第４項中「各学部等」とあるのは「分属学部等」と読み替えるものとする。

（センター助教の雇用契約の契約期間等）

第 11 条　センター助教の雇用契約の契約期間、待遇、勤務等については、助教に関する就業規則の定めるところによる。

（センター助手）

第 12 条　センターの助手（以下「センター助手」という。）は、学校法人青山学院助手に関する就業規則（以下「助手に関する就業規則」という。）の定めるところにより雇用された、センターに所属する助手とする。
2　センター助手は、コーディネーターの呼称を使用することができる。

（センター助手の職務）

第 13 条　助手に関する就業規則第４条第３項の規定による職務は、同条第１項に規定するものに加えて、次のとおりとする。
（1）　第３条に規定するセンターの事業に係る業務
（2）　前号に規定するもののほか、センター長が必要と認めた業務

（センター助手の資格）

第 14 条　センター助手は、助手に関する就業規則第５条第１項の規定により、専任教員任用昇任規則第２条第５項各号のいずれかに該当する者でなければならない。
2　前項に規定するもののほか、助手に関する就業規則第５条第２項の規定によるセンター助手の資格は、ボランティア及び市民協働に関する活動又はサービス・ラーニングに係る専門的知識を有する者とする。

（センター助手の雇用手続）

第 15 条　センター助手の雇用は、次項から第４項までの規定による。
2　センター長は、センター助手の候補者の雇用が適当であると認めたときは、運営委員会の審議を経て、学長に、センター長による推薦状、当該候補者の経歴、業績等が明記された書類その他必要と認められる書類を添えて、その候補者の雇用を発議する。
3　学長は、前項の規定による発議を適当と判断したときは、学部長会にこれを付議する。
4　候補者の雇用の決定は、前項の規定により学部長会の審議を経た後、常務委員会及び常務理事会で協議し、理事会の承認を得なければならない。

（センター助手の雇用契約の契約期間等）

第 16 条　センター助手の雇用契約の契約期間、待遇、勤務等については、助手に関する就業規則の定めるところによる。

（協力者）

第 17 条　センター長は、センターの事業の実施に必要があると認める場合は、当該事業に協力する者（以下「協力者」という。）を置くことができる。
2　協力者は、センターの事業の実施に必要な専門的知識又は経験を有する本学外の者で、当該事業の実施に係る助言又は協力を行う。
3　協力者は、センター長が候補者を推薦し、運営委員会の審議を経て、学長が委嘱する。
4　協力者の任期は、原則として１年以内とする。ただし、再任されることができる。
5　協力者は、当該協力者であることを示すものとして、アドバイザーの呼称を使用することができる。
6　第２項の助言又は協力は、無償とする。ただし、センター長が、必要があると認める場合は、学校法人青山学院謝礼等の支給基準に関する内規（以下「支給基準に関する内規」という。）の定めにより、報酬又は謝礼を支給することができる。

（運営委員会の構成）

第 18 条　運営委員会は、次の委員をもって構成する。
（1）　センター長
（2）　副センター長
（3）　大学宗教部長
（4）　専任教員の中からセンター長が指名する者　次のとおりとする。
　　イ　青山キャンパスを就学キャンパスとする学部又は研究科から　１名以上
　　ロ　相模原キャンパスを就学キャンパスとする学部から　１名以上
（5）　社会連携部長
（6）　学生生活部長
（7）　相模原事務部長
（8）　学務部長
2　前項第４号に規定する委員の任期は、２年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

3　前項の委員は、再任されることができる。
（運営委員会の招集、開催、表決数等）
第 19 条　運営委員会は、センター長が招集し、議長となる。
2　運営委員会は、必要に応じて開催する。
3　運営委員会の開催は、委員の 3 分の 2 以上の出席を必要とする。この場合において、運営委員会で審議する事項につき、書面をもってあらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。
4　運営委員会の議決は、出席した委員の過半数の賛成を必要とする。
5　議長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。
6　議長は、次条に規定する運営委員会の審議結果を機構長に報告するものとする。
（運営委員会の審議事項）
第 20 条　運営委員会は、次の事項を審議する。
（1）　センターの運営等に係る基本方針に関する事項
（2）　センターの予算及び決算に関する事項
（3）　センター長、副センター長、センター助教及びセンター助手の人事に関する事項
（4）　センターに関する諸規則の制定改廃に関する事項
（5）　前各号に規定するもののほか、センターの運営等に必要な事項
（実務委員会の構成及び開催）
第 21 条　実務委員会は、次の委員をもって構成する。
（1）　センター長
（2）　副センター長
（3）　センター助教
（4）　センター助手
（5）　専任教員の中からセンター長が指名する者　次のとおりとする。
イ　青山キャンパスを就学キャンパスとする学部又は研究科から　1 名以上
ロ　相模原キャンパスを就学キャンパスとする学部から　1 名以上
（6）　社会連携部社会連携課長
（7）　学生生活部学生生活課長
（8）　相模原事務部学生生活課長
（9）　学務部教務課長
（10）相模原事務部学務課長
2　前項第 5 号に規定する委員の任期は、2 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
3　前項の委員は、再任されることができる。
4　実務委員会は、センター長が必要に応じて招集し、議長となる。
5　センター長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。
（実務委員会の業務）
第 22 条　実務委員会は、次の事項について協議し、その執行に当たる。
（1）　センターの事業遂行に係る計画の策定及びその実施に関する事項
（2）　センターが行うボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等に係る企画、立案及び実施に関する事項
（3）　外部の組織との連携に関する事項
（4）　センターの予算案の作成及び予算の執行に関する事項
（5）　学生スタッフに関する事項
（6）　前各号に規定するもののほか、センターの運営等に必要な事項
2　センター長は、必要があると認める場合は、前項に規定する協議、執行等の結果を、運営委員会に報告する。
（学生スタッフ）
第 23 条　センター長は、必要があると認める場合は、センターに学生スタッフを置くことができる。
2　学生スタッフは、センター長の指示により、センターの活動に係る補佐業務に当たる。
3　前項の補佐業務は、無償とする。ただし、センター長が、必要があると認める場合は、支給基準に関する内規の定めにより、報酬又は謝礼を支給することができる。
4　学生スタッフは、本学の学部又は大学院研究科に在籍する学生で、センターの活動への参加を希望する者の中から、センター長が任命する。
（所管）
第 24 条　この規則は、社会連携部が所管する。
（改廃手続）
第 25 条　この規則の改廃は、運営委員会、機構会議及び学部長会の意見を聴いた後、常務委員会で協議し、理事会の承認を得て、学長がこれを行う。

附　則
1　この規則は、2022 年 4 月 1 日から施行する。
2　2022 年 3 月 31 日において青山学院大学ボランティアセンターの助手として在職した者で、この規則の施行日においてセンター助手として在職するものは、この規則で定めるところによりセンター助手として雇用され、又はその契約期間を更新されたものとみなす。

附　則（2022 年 9 月 29 日）
この規則は、2022 年 9 月 30 日から施行する。

附　則（2023 年 12 月 14 日）
この規則は、2024 年 4 月 1 日から施行する。

2025 年度 シビックエンゲージメントセンター 委員一覧

2026 年 3 月 31 日現在

運営委員会

センター長（議長）	河見 誠（コミュニティ人間科学部 教授）
副センター長	左近 豊（国際政治経済学部 教授）
大学宗教部長	大宮 謙（社会情報学部 教授）
センター長指名（青山）	外岡 尚美（文学部 教授）
	中邨 良樹（経営学部 教授）
社会連携部長	濱本 嘉郎
学生生活部長	藤井 隆司
相模原事務部長	鴨志田 壽生
学務部長	乃美 浩一

実務委員会

センター長（議長）	河見 誠（コミュニティ人間科学部 教授）
副センター長	左近 豊（国際政治経済学部 教授）
センター助教	秋元 みどり
	三神 憲一
センター助手	中里 晋三
	広瀬 かおり
	水谷 耕平
センター長指名（青山）	シュー士戸 ポール（文学部 教授）
	山本 珠美（教育人間科学部 教授）
センター長指名（相模原）	菅野 幸恵（コミュニティ人間科学部 教授）
	堀江 正伸（地球社会共生学部 教授）
	渡邉 昌宏（理工学部 教授）
社会連携部社会連携課長	濱本 嘉郎
学生生活部学生生活課長	太田 浩史
相模原事務部学生生活課長	遠藤 敏明
学務部教務課長	中居 哲也
相模原事務部学務課長	海野 大輔

学生スタッフ　青山キャンパス

荒川 十嬉（総合文化政策学部 3 年）
井水 里純夢（法学部 1 年）
金谷 航太郎（経済学部 4 年）
コウ コウコウ（国際政治経済学研究科 修士 1 年）
鈴木 遥香（経済学部 4 年）
土肥 恵（法学部 3 年）
萩原 稜久（経済学部 3 年）
ハン カンウ（国際マネジメント研究科 修士 1 年）
星 亮成（経済学部 4 年）
穂積 葉奈（教育人間科学部 3 年）

相模原キャンパス

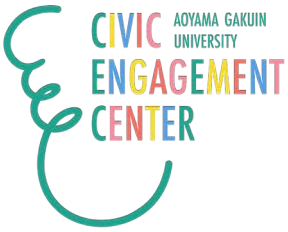
新 亜子（コミュニティ人間科学部 2 年）
鵜島 伊吹（コミュニティ人間科学部 3 年）
黒木 雫（コミュニティ人間科学部 2 年）
戸田 うい（コミュニティ人間科学部 3 年）
宮井 明日香（コミュニティ人間科学部 3 年）

シビックエンゲージメントセンター（CEC）ロゴ

シビックエンゲージメントセンター（以下、CEC）はこれまでのボランティア活動支援に加え、市民協働活動そしてサービス・ラーニングの３つを活動の基軸とし、より自発的な社会参加を促し、社会課題解決に取り組み、社会貢献活動に取り組めるよう支援することが求められている。

一方、名称からどのような役割を担うセンターかイメージしづらく、ボランティアや社会貢献活動に関心がある学生と直接的接点が持てなくなることが懸念されていた。そこで、CEC を学生たちに認知されやすく、親しみを持ってもらえるようなイメージロゴマークを学内で募集した。

応募作品の選考については、大学関係者以外にも本学のキャンパスが所在する東京都渋谷区役所と神奈川県相模原市役所の職員の方にも審査員として協力いただき、最終的には４件の応募作品の中から石原穂乃香さん（当時､総合文化政策学部総合文化政策学科４年）デザイン「Spring」が採用された。



作品コンセプト：

「C」と「E」と「C」を組み合わせた誰でも走り書きができそうなシンプルなシンボルになっていて、その気軽さとバネのようなシルエットでフレンドリー感を出し、柔軟性を表現している。

シビックエンゲージメント研究　第４号

2026年8月28日発行

編集　シビックエンゲージメント研究編集委員会

発行　青山学院大学シビックエンゲージメントセンター

（青山キャンパス）

〒150-8366　東京都渋谷区渋谷4-4-25

（相模原キャンパス）

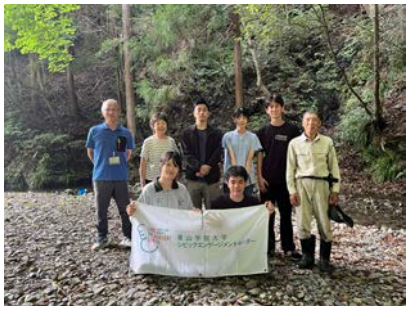
〒252-5258　神奈川県相模原市中央区淵野辺5-10-1

印刷　株式会社創志









CIVIC ENGAGEMENT CENTER
AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY

AOYAMA GAKUIN UNIVERSITY